
桐生の忍 影送り組曲

アオキチヒロ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

桐生の忍 影送り組曲

【Nコード】

N7405A

【作者名】

アオキチヒロ

【あらすじ】

忍 忍者と称される彼等は、この平成の世も生き続けていた。世界には二つの顔があると言った弟。桐生朝飛は、思う。自分は一体、どちらの人間なのか。これは、彼等と彼等を取り巻く全てのモノの、忍ぶべき物語。

0・世界 Last week

「世界は、常に裏と表によって構成されるモノなんだよ」
僕よりも一年十ヶ月後に生まれた弟が言った。

例えば？

僕の問いに、まるで歌うように弟は答える。

「右か左か。

黒か白か。

前か後ろか。

上か下か。

悪か正義か。

敵か味方が。

生きるか死ぬか。

生かされるか殺されるか。

天国か、地獄か。

世界には、二つの顔があるんだよ」

相変わらず、どこを見ているのか分からないその碧眼を向けて、弟は言った。

間は無いの？ 真ん中とか、灰色とか、中心とか、中立とか、

傍観者とか。

弟は久しぶりに笑う。珍しく、声をあげて。

「兄さんは変だね。忍である桐生朝飛は、どちらも選ばずに生きるんだ？」

と、弟 空夜は笑う。

桐生 空夜。それが僕の弟の名前。

この国の生まれでない母さんが、慣れない漢字辞書を引いて、付けてくれた名前。

空夜は、どっちを選ぶの？

僕の問いに、弟は答えない。

一番欲しかった答えを、誰も僕にくれはしない。

そんな、一週間前の話。

* * *

「ハアツ…ハアツ…！ くそ！ なんで、なんでだ？ なぜバレた！？」

夜の闇の中、安っぽいネオンで賑わう繁華街を、青年が走っていた。何かから逃げるように、自身の背後を気にしながら、それでも速力を遅めることなく走り続けた。

無我夢中で逃げる青年は、前から歩いてくる通行人を避ける暇も無いのか、何度も辺りにぶつかりながら走っていた。体当たられた通行人が、青年を罵倒する。その言葉すらも待たずに、青年は走った。

「何故、逃げるんです？」

青年の背後から、まるで疾風のように追いかけてくる少年が問いかけた。青年と同じ速さで走っているにも拘わらず、その息は一つも乱れていない。ただ、歩いているだけのようないななな霧困気だった。

その少年は藍色の剣道着に身を包み、背には刀を背負っていた。時代錯誤もいいところだと、後ろを振り向きながら青年は思った。自分をここまで追い込んだ少年の顔は、狐の化物を基にしたお面で隠れていて見えない。

「くそおつ……！！」

必死に逃げていく青年を追いかけてながら、少年は呆れたように呟いた。

「諦めの悪い人ですねえ」

「忍に、こんな子供の忍などに……っ！」

青年の叫ぶ「忍」 それは、古くから日本の影を担ってきた、裏の世界に生きる者の呼称。いわゆる「忍者」というものだ。

忍者と称される彼等は、常に誰かの影となり、その存在を知られることは無い。とうの昔に途絶えたと思われるが、忍は今もこの世を生きている。

その姿形を変え、この平成の世を生きている。表の世の、誰にも知られずに。

「もう、逃げないんですか？ 僕ならまだまだ走れますけど」

とんとん、と右足をコンクリートに打ち付けて立つ少年の背後には、賑わう繁華街がちらりと見える。

夜になるに連れて賑わいをみせる繁華街だが、小さな路地は街に忘れ去られたような暗さ。まるで別世界のそこに、二人の人間がいることなど、誰も気が付かなかった。

路地裏へと逃げ込んだ青年は、息切れが苦しいのか、何度も浅く

呼吸を繰り返していた。

「裏切り者」

ぼつりと声が出た。その声は街の騒音に掻き消されて、どちらの発した声かは分からなかった。

「俺を始末するつもりなのか、お前……はっ……俺を誰だと思ってる？ お前と同じ忍の者だぞ？ それも、お前なんかよりもずっと裏の世を生きている忍だ。お前みたいな半端者に倒せる相手じゃない。お前、自分の行為が忍の裏切りだと知っててやってるのか？」

青年が、自分の目の前にいる面の少年へと話した。黙って話を聞いていた少年が、青年の言葉が終わると同時に、その化物の面を外した。

現れたのは、色素の薄い栗色の毛に、漆黒の瞳。

「言いたいことは、それだけでしょいか」

少年の素顔に見覚えがあったのか、青年は引きつった笑みを向ける。

「……ああ。お前こそ言いたいことは無いのか？ 桐生の忍さんよ。俺は相手が子供だろうと手加減しないぜ」

少年は、表情を変えることなく青年を見た。何かを見透かすような、冷たい眼だった。

「名くらい、名乗っておきましょうか？ いつまでも『桐生の忍』では不便でしょう」

「……余裕だな」

「僕の名前は、」

揺らめくように、刃が光る。安っぽいネオンの光を受けて数色に輝くソレを、青年は魅せられたように見つめていた。

殺られる。いま、ここで、この刀で、この餓鬼に。

固まってしまった青年に、少年はゆっくりと答える。小さな子に諭すように、ゆっくりと。

「桐生 朝飛。それが貴方を殺す者の名です」

「こ、五忍樹がこんな……あ、うぐ、が……はっ……！」

青年が右手に隠し持っていたクナイを落として、虚しい音が路地裏に響き渡った。朝飛がそれを拾って、また化物の面を被る。

「どうぞ、安らかにお眠り下さい」

黙祷を捧げる朝飛の目には、もう動かなくなった肉の塊が映るだけだった。

青年が最後に言いかけた言葉、五忍樹。

それは、現存する忍の中で、最も秀でた能力を持つ五つの一族のことを指している。

桐生「きりゆう」、火之基「ひのき」、薬樹「くすのき」、鰐木「つばき」、そして、苗木之下「なえぎのした」。

『木』の名前を持つ彼等一族は、畏敬の念を込めて五忍樹と呼ばれるのだ。

そして、面を被るこの朝飛も五忍樹。

「夜明け前に、帰らなくちゃ」

繁華街を、疾風のように朝飛は去っていった。繁華街はその賑わいを変えることなく、光り続ける。

路地裏での惨劇に通行人も店員も気付かない。青年の死体は、ただ冷たくなるだけ。朝飛によって偽装されたその死体は、酒の所為で青年が自ら死んだようにされていた。

朝飛が完璧に去ってから、数分。青年の死体に、影が差した。

「お兄ちゃん……」

青年よりも幼い女が、冷たくなった彼の体を抱きしめて、哀しそくに言った。

「許さない……桐生の忍……」

彼女の声は、繁華街の空に消えていった。

*
*
*

世界が、常に二分されるモノのだとしたら、僕は何処にもいけないよ。

僕がそう言うと、弟は鼻で笑った。

「なら、世界中から人間がいなくなるね」
その碧眼は、確かに僕を捕らえていた。

なんでそう思うの？

「だって兄さんは、一番まともな人間だから」
何も知らない弟は、僕にそう言った。
そんな、一週間前の話。

これは、僕と僕を取り巻く全てのモノの、忍ぶべき物語。

桐生の忍 影送り組曲

0・世界 Last Week (後書き)

夜更けの物語。

遠 en r a i 雷に登場する世外れの都合屋、クウヤ・アンダーグラ
ウンドの兄が主人公の物語。
遂に始まりました。

冒頭で世界について話している彼が気になった方は、遠 en r a i
雷の方もどうぞご一読下さい。

1・日常 Sudden visitors

朝は嫌いだ。

起き抜けに、朝飛はそう思った。

何故、急にそんなことを思ったのか自分でも分からなかったので、取りあえず未だに覚めない眠気の所為にしておいた。

そして、枕元の目覚まし時計を見る。6時55分。いつも通り、目覚まし時計でセットした時間よりも5分早くに起きた。自分に目覚まし時計が必要無いのを分かっているのに、やっぱり不安なのでセットしている。

相変わらず寝癖一つ付かないその髪をくしゃくしゃと撫でて、朝飛はだるい身体に鞭打って起きる。二段ベッドの上で眠る弟に、朝が来たことを告げた。

「空夜。朝だよ」

二段ベッドからは、弟の腕がひらひらと見えた。起きたことの意味表示だ。

「…なんじい…?」

「もうすぐで7時」

「…へえー………?」

夢半ばに返事をする弟を見て、朝飛は起こすことを諦めた。きつと、今日も学校を休むつもりなのだろう。小学校の時もそうだったが、結局弟は中学に入学して2ヶ月で不登校児になった。

朝飛は壁に掛けられたカレンダーを見て、弟に聞こえないように少しだけ溜息を吐いた。

今日の日付は6月30日。

6月のページに付けられた丸印は10個にも満たない。丸印は、空夜が学校へ行った日に付けているマークだ。ということは、今月、空夜は10回もまとともに学校へ行っていないということになる。中学1年生の、しかも1学期の時点でこの状態じゃ、先が思いやられ

る。

「空夜。ちゃんと朝ご飯、食べに来なよ？ あと1ヶ月もしないうちに夏休みなんだから、ちょっとは学校に行かないと」

「……うー……」

これはきつと無理だな。朝飛は部屋のドアを閉めて、静かに階下へと降りた。

1階には、やっぱり誰も居なかった。

「あれ？ リモコン、リモコンって」

居間でテレビを見ようとしたは良いが、いつもの位置にテレビのリモコンが見つからなくて、朝飛が困ったように声をあげる。定位置のテーブルの上には、サラダせんべいが入った籠以外何も無い。

朝飛は壁に掛けられた時計を見た。そして少し焦る。

「うわ、『目覚めるテレビ』の星占いランキング始まっちゃうよ！」

もういいや、とテレビの本体に付いている主電源を使おうとして、朝飛は手を止めた。テレビの上に置かれてある、見慣れたモノ。

「あ、リモコンみつけ」

それを手にし、毎朝の習慣でもう覚えたチャンネルを押して、朝飛は席に着いた。朝ご飯は、後で空夜と食べよう。一人で食べるのは、少し味気ない。

大きなダイニングテーブルは、一人で頼付くには広すぎた。

今日も、誰も居ない。

父さんは確か要人の護衛だとかで一昨日から留守。忍の仕事は大抵が何かの護衛だ。たぶん、じいちゃんも仕事だろう。2人とともに仕事について詳しいことは言わない。場所だとか、内容だとかを言っってしまうと、情報が漏れる可能性があるからだ。忍は、隠密に行

動するのが原則。それは自分だって理解している。
だからとはいえ、この家の人間は、何にも言わずに出ていく人達ばかりだ。

開け放たれた居間の扉を見つめながら、朝飛は溜息を吐いた。それと同時に、静かな朝にそぐわないテンションの高い声がテレビから流れる。しまった。考え事をしてた所為で、星占いを見るのを忘れてた。

ランキングは、残すところ1位と最下位のみ。

『さてさて気になる今日のラッキーさん&アンラッキーさんは？』

12位！ ごめんなさい、牡牛座さん！ 今日は大入しく本でも読んで過ごそう。ラッキーアイテムは掃除道具。心までピカピカにしようね！

そしてそして、1位は獅子座さん！ 何か思いがけないラッキーハプニングがありそう！ だからって調子に乗っていると真逆さま。いつも通りに過ごせば幸せがやってくるはず！

次は真木アナのもぎたてニュース！』

「……さ、最下位……！」

がくつと項垂れる、牡牛座のO型、朝飛が居た。

そんな彼のラッキーアイテムは掃除道具。そんなモノを信じていなくとも、毎朝の玄関掃除は自分の役目なのだ。掃除道具なら嫌でも持つ。

見たいコーナーも終わったし、あとはニュースだけ。そろそろ玄関掃除に掛からなくては。朝飛はテレビの電源を消そうとして、リモコンに手を伸ばした。

しかし、深刻な表情のアナウンサーとニュースの映像に、朝飛は動きを止めた。

『の繁華街で、二十代頃の男性が何者かに刃物で刺され、死亡しているのが発見されました。男性は、首元に傷を負っており、金

品が盗まれた様子は無かったようです。目撃情報はまだ出ておりませんが、警察は怨恨関係のものを見て捜査にのりだし
「……物騒な世の中」

一言だけ呟くと、朝飛は止めていた動きを再開し電源を切った。
桐生家には、一切の音が消えた。

* * *

朝飛は玄関へと出て、右手に握った竹箒を両手に持ち替え、掃きだした。

桐生家は、一応表の世では『桐生剣道教室』として此処に居るので、玄関は常に綺麗にしておかなければならない。

朝飛が箒で掃き始めて数秒経ったとき、前方で声がした。

「貴方が、桐生一族の朝飛ですね？」

語尾が少し上がり目なのを聞くと、多分それは質問に近かったのだろうけれど、言葉の重みとしては確信した声だった。

何の前触れも無く、突如現れた少女は、セーラー服に下駄、という何とも奇妙な格好をし、その長い黒髪を三つ編みに仕上げていた。奇妙な格好の少女が、もう一度同じことを聞いた。

「桐生一族の、アサヒですね？」

一方、尋ねられた方の朝飛は早朝練習の為の剣道着に竹箒、こちらも少女に負けず劣らず変な格好だ。

「……………」
朝飛は、突然現れた少女に驚きを隠せず、呆然と立ちつくしている。

少女の格好も大概変だが、朝飛のその格好はここが剣道場だと知る人が居なければ、いささか時代遅れな格好だろう。剣道着姿に竹箒だなんて、どこの門下生だと問いたくなる。

そんな朝飛が、何も答えずに立ちつくしているのを見て、苛立ちの隠せない声色で少女が三度目の質問をした。

「桐生朝飛、ですよね」

それはもう疑問符など付いていなかった。ただ、相手に同意を求めようとしているだけのようだった。眼は、早く認めると言わんばかりに睨み付けてくる。微笑んだ顔ならきつと可愛いだろうに、今の少女の顔は、鬼の形相という表現がぴったりなほどに怖かった。

朝飛は取りあえず返事をした。このまま黙っていたって、得することなど無さそうだ。

「はあ、そうですね……………どうしてセーラー服なのに、下駄なんですか？」

何故自分の名を知っているのか？とか、どうしてこんな所に居るのか？など、したい質問は沢山あったのだが、朝飛は一番疑問に思っていることを選んで聞いた。少女は淡々と答える。

「単なる趣味です。貴方は口出ししないでください」

「はあ、変わった趣味ですね……………」

その格好を『趣味』の一言で片付けてしまうのはどうかと思うが、詰問に近い問答から逃れるように、朝飛はまた竹箒で玄関を掃き始めた。全身で「関わり合いになりたくない」と言っているのが分かる。

朝飛の姿を、少女はじつと見つめながら、また一方的に話し始め

た。朝飛が隠さずに嫌な顔をしているというのに、だ。少女はなかなか図太い神経をお持ちのようだった。

「私の名前は、火之基志保。聞いての通り、火之基の直系の忍です」「ああ、そうなんですか。いいお名前ですね」

「そりやどうも。名は名乗りましたけど、気安く『しほ』なんて呼ばないで下さいね？ 貴方達桐生一族に名前を呼ばれるなんて、胸糞悪いですから」

「その点なら大丈夫です。呼ぶ気なんて毛頭ありませんから」「なら結構」

忍の二人は相変わらずかち合わない視線の中、問答を続けた。

時間も時間だからか、桐生家の前を通る人は居ない。朝飛は誰かがここを通って、志保のことを不審な眼で見てくださいればいいのにと願った。不審な眼で見られて、どこかへさっさと行ってくださいればいいのに。

こういうキツイ感じの人が、朝飛はちょっと苦手だった。

「ところで、桐生朝飛」

詰問は終わっていなかつたのか、とうんざりした朝飛が答える。呼び捨てにされるのは別に構わないらしい。

「なんですか？」

問いかけに応じた朝飛に、志保は冷たい眼を言った。

「死んでくれませんか？」

今日は家の用事があるから、ちよつと今日だけ掃除当番代わってくれない？

そんな風な気軽さを持って志保は言った。疑問符付きだが、もちろん答えなんて聞かずに。

「では、さようなら」

「……出来ることなら、僕は普通の生活を送りたいのですけど」

「あの世に逝けば叶うんじゃないですか？ その願い事も」

少女は、下駄に仕込まれていた刃を。

桐生の忍 影送り組曲

少年は、竹箒を構えて、お互いに一歩も譲らなかつた。

1 日常 Sudden Visitors (後書き)

日常なんて、容易く壊れるものだから。

2・下駄 Dangerous girl

「覚悟はいいですね」

志保は言うが否や、その細い右足を朝飛に向かって蹴り出した。いきなりの攻撃に驚いた朝飛だったが、そんなこと、微塵にも顔に出さずに対応した。

「物騒ですね、その下駄」

丁寧に隠し込まれた刃は、確実に朝飛の首を狙っていた。

一見、普通の下駄のように見えたが、やはり隠し刃が仕込まれていた。こんな芸当が出来るのは、忍具や武具を作り出す一族、鰐木だけ。

「そういう貴方も十分物騒ですよ」

「お褒めにあずかり光栄です」

蹴り上げた足を只の竹箒で見事に止められた志保が、朝飛から半歩下がった。切り刻めたのは、竹箒の掃き部分のみだ。

「その下駄は、鰐木家で作ったものですか？」

「貴方なんかには言いません」

「でしょうね」

この志保という少女は、どうやら自分のことを毛嫌いしているようだった。まあそれもそうだろう。朝っぱらから死んでくれたなんて、相当嫌われているようだ。

朝飛には、見当が付かなかったが。

離れた場所で、志保が声を発した。

「刀なりクナイなり手裏剣なり出さないと、次は本当に首が飛びますよ」

「ご忠告ありがとうございます。でも、」

棒の部分だけになってしまった竹箒を構え、朝飛はにこりと笑った。

「僕にはこれがありますから」

構えとしては、剣道に似通った部分があった。しかし、それとは違う。自分の知っている剣道とは、違う構えだった。しかし、ここは桐生剣道場。やはり剣道で来るのだろうか？

違和感に眉を顰めた志保が、もう半歩下がる。相手の出方が分からないなら、下手に動く和不味い。

「剣道、ではありませんね」

駄目元で尋ねてみた。

「薙刀ですよ」

あっさり答えられた。志保はがくつと、肩をずらした。

敵に自分の攻撃を教えていいのか？ あれが桐生忍の頂点に立つ者なのか？

「ナギ、ナタ……なるほど、女々しいのは顔だけじゃないんですね」

「うわあ、酷いですね。僕は母親似なんですよ。それに、薙刀は別に女性の武術というわけではありません。案外、攻撃性に優れてますよ」

「ナギナタのこととか、そんなことはどうでも良いんです。貴方の首さえ刈れば、」

志保がもう一度脚を振り上げようとしたとき、二人の間に、何かが降ってきた。

いや、違う。

二人の間に、まるで戦いを中断させようと、誰かが割り込んできたのだ。

「おつかねえな、昨今の日本の治安状況はよあ。お前ら、さては最近ニュースで頻繁に取り上げられてる『キレイやすい子供』だろ？

もしくは犯罪低年齢化の象徴だ」

「誰だっ!？」

志保が大きく叫んだ。それは、戦いを止められた怒りではなく、驚きや戸惑いを隠せずに、つい出てしまった本音のように聞こえた。

「刃物をしまいな、火之基の下駄っ子。オレはこいつに用がある」
「寝言は寝てから言えよ!? 私の方が先だったじゃない、後からやってきた癖に順番抜かすんじゃないわよ! 大体、あんたは一体……!?!」

先程までの丁寧な、だが冷たい感じのする敬語は取り払われ、乱暴な口調で志保が叫んだ。

恐らく、こちらの口調が本来の彼女なのだろう。取り乱す志保に、『誰か』がにんまり笑って答える。

「オレか? オレの名前は鰐木魁。お前達2人と同じ、五忍樹の一つ『鰐木一族』の直系で、お前の履いている下駄 『花風』の制作者だ」

そうやって余裕綽々に名乗った少年、魁の風貌は一風変わった物だった。

黒色の髪に、所々に入れられた赤いメッシュ。ズボンにじゃらじやらと付けられた鎖型のアクセサリー類。服装は、赤と黒を基調としたパンク感のあるもの。

黒いジャケットには、無数の缶バッジが付いていた。スマイルマークが好きなのか、黄色い缶バッジが多く付けられていた。

そして何より、右耳に4つ、左耳に2つ開けられたピアスと、口元に一つあるピアスが一際目立っていた。

「『鰐木』だつて?」

突如現れた魁の、唐突な答えに驚いたのは、朝飛だった。朝飛がまるで使い物にならない竹箒を構えたまま、魁の方を向いた。

「初めまして、アンドこれからヨロシク。俺のことは名字以外でなら何て呼んでも構わないぜ。っつーか名字で呼ぶな。お前はたしか、桐生一族次期頭目の朝飛だっけか」

「ちよっと、待って。鰐木の直系が何故ここに居るんですか?」

「まあそれは追々説明するとしてだ。ちなみに敬語とか使わなくていいし……ってそういう話じゃなくて、おい、火之基の下駄っ子。そいでもって朝飛。ここいらで止めときな。今は俺達の時間じゃない。こんな夜も明けた時刻に忍の争いごとは、よくねえだろうが」
そう言つて、魁は眼にも止まらぬ速さで志保の下駄『花風』と、朝飛の持つ武器……竹箒を取り上げた。
二人の目には、魁がそこからただの一度も動かずにいたように見えた。

いや、違う。まさか武器を奪ってくるなんて思っていなかったから、そう見えただけなのだ。

「やるなら、夜が明ける前までに、だ」

下駄を取られ、裸足になった志保が怒りで肩を震わせた。先ほどの位置よりも、さらに半歩下がっている。魁を敵と見なしていた。

「う、うるさい！ お前に何が分かる！ 私は、私は……！」

志保の取り乱す姿に、魁が諭すように言う。

「下駄っ子。俺達忍の三原則は知ってるだろうが」

その言葉に、志保が静かな声で答える。

「その一、夜更けを忍の刻とすること。

その二、他忍同士争いは、頭目へ報告してからのこと。

その三、世の片方に留まること。

そうでしょう、鰐木の直系」

「名字で呼ぶなっつたろーが、この下駄っ子め。まあいい。その三原則を知ってるなら、夜明けに争いはするんじゃないやねえ。それから、このことは、」

話の途中で、すたすたと魁の方へ歩いてくる志保が続きを言った。

「もちろん、私の兄……火之基頭領に報告済みです」

それを聞いた魁が、納得する。

「なら問題ねえ……って、おおおおおおお……！」

叫びながら、慌てて魁が元居た木の上に飛び戻る。かなり吃驚しているのか、木の上でせいぜいと息をしていた。よっほど慌てたら

しい。

それはそうだろう。彼の目前へと歩いてきた志保が、正面切つて小刀で斬りかかってきたのだから。不意を付かれたも同然だ。

「ちょ、ストップ！ なにすんだよ！？ おつかねえ女だな！」

「女が恐ろしいのは常識でしょうが」

「つつーか、何処に隠し持つてやがった、その忍具！」

「体の至る所に」

「物騒だな、おい！」

木の上で吠える魁は、まるで猫に追い込まれたネズミのようだった。それも、かなり凶暴な猫に。

朝飛はそんな彼を助けようとせず、ただぼんやりとその光景を見ていた。出来ることならば、このまま彼女の意識が魁に向いたまま、自分のことを忘れてくれたならば万事解決なのだが。そう上手くいかないのがこの世界。

「桐生朝飛。貴方も忍の原則はご存じでしょう」

「一応」

うんざりしたように朝飛は答える。人に突つかかって来られるのは、何度味わおつとも慣れないモノだ。特に、志保のように同業者であれば尚更。

「それでも貴方は忍なんですか？」

「え…？」

「貴方くらいですよ。裏も表も選ばずに、片方に成りきらずに生きる忍なんて。そんな半端者に、次期頭目が務まるとでもお思いですか」

朝飛はその穏やかな表情を曇らせた。そして志保から目を逸らす。凶星だったのだ。

「おい朝飛」

上から声を掛けられた。魁がこちらを見ている。

「お前は知らないかも知れないけどな、桐生家はいま危うい立場にあるんだぜ？ 五忍樹の中で、密かに囁かれていることがある。桐生

一族は、五忍樹を裏切ったってな」

「裏切る……？ 桐生家が？ まさか」

「その通りです、桐生朝飛。桐生一族はもう終わりです。まあ今回は手を引きましょう。まさか鰐木家が来るとは露ほども思いませんでしたしね。ただし、覚えておいてください」

「……なにを？」

「火之基は貴方を許しません。火之基の直系を殺した罪は重い」

朝飛が目を見開かせるのを見て、志保は姿を消した。玄関前には、ただ呆然と立ちつくす朝飛と、木の上にはその光景を見つめる魁がいるだけだ。

「殺した……？ いや、それよりも、一体何が……桐生が裏切りだなんて……」

「そのことについて、オレはお前に聞きたいことがあるんだ」

魁が木の上から再び降りてきた。

「にぎやっ！」

魁が木の上から降りる際に、見事に躓いて転げ落ちた。魁の屍が、アスファルトの上に転がる。

そんな彼を見てた朝飛の頭に、ふと朝の言葉が甦る

「……そしてそして、1位は獅子座さん！ 何か思いがけないラッキーハプニングがありそう！ だからって調子に乗っていると真つ逆さま……」

「魁、君つてもしかして獅子座？」

「……当たり前だけど、なんで知ってるんだよ？」

俯せのまま、魁が朝飛に尋ねる。

「じゃあ、いつも通り過ぎさせば幸せがやってくるよ」

しかし朝飛は問いに答えず、自分の言いたいことだけを言った。それを聞いた魁が、何か思いついたらしく、少し言葉を止めた。

「………… お前、今朝の目覚めるテレビのこと言ってるだろ………… なら俺も見たっつーの。そういうお前は蠍座だな」

「ご名答。君にラッキーアイテムを奪われた所為で、今日は1日アンラッキーだよ」

丸裸の竹箒を指さして、朝飛が言った。

そこより、少し上にて。

「なーにやってんだか」

二階の窓から、二人を見つめる空夜が居た。彼は、志保が兄に話し掛けた所から、今に至るまでの全てを見ていた。

「ふああー…………二度寝しよつと…………」

現時刻、7時半過ぎ。学校へ行くのはもう止めたようだ。

桐生の忍 影送り組曲

2 下駄 Dangerous girl (後書き)

演奏者は揃った。

ついに、忍ぶべき影送り組曲の演奏が始まる。

3・三忍衆 Who is the doubtful one?

「やー、さつきは危なかったな。まさか火之基がいの一番に攻撃を仕掛けてくるとは。オレもまだまだ五忍樹に対する認識が甘かったっつーことだな。反省反省」

鰐木魁は楽しそうに言った。ジャケットの所々に泥が付いているが、指摘しても変わらないと思った朝飛は、敢えて教えてやることはしなかった。

「火之基が来たり、鰐木が来たり。今日はなんの記念日？ 五忍樹大売り出し中か？」

「五忍樹のみんなで、バーベキューパーティー、桐生家にて……なんつってー」

朝飛は魁を可哀想な人を見る目で見た。軽蔑した目、とも言つ。

「そんな目でオレを見るなよ！ 冗談を言つて気分を和ませてやろうと思っただけじゃん！」

「そうなんだ。じゃあ帰つて」

「意味も分からず、早速退場ですか?!」

「ていうか帰れ」

「命令口調?!」

朝飛は使い物にならなくなった竹箒を拾い、玄関の門を開けた。

もう朝の掃除は止めるしかない。時間も丁度良い頃だろう。朝食の支度をしなければならぬ。

「ちよつと待てよ、オレの話が聞かなくて良いのか？ いきなり火之基が桐生次期頭目を襲いに来たんだぜ？ 理由を知りたくないのかよ」

「がしゃん、と門を乱暴に閉めて、朝飛は魁の方を振り返らずに答える。

「……復讐だとか報復だとか、理由ならいくらでもある。別に知りたくもないよ」

あくまで聞こうとしない朝飛に、魁がさらに踏み込む。
「知つといた方がいってこともあるんだぜ。とにかく、オレの話
を聞いて、オレの質問に答えるよ。」

この女顔」

そこで朝飛はやっと魁の方を向いた。ちょっと怒っている。ちよ
つとというよりも、表情に出してしまうほどに怒っている。

もしかすると、それは激怒だったかもしれない。ただ、まだ会っ
て数分しか経っていない魁には、それがどれだけ恐ろしいことなの
か、イマイチ分からなかった。一つだけ分かることは、虚ろな目が
もの凄く恐いということ。

少し後ずさった魁だったが、ここで負けてはいけないと思い、言
い返す。

「な、なんだよ。言いたいことがあるなら言ってみるよ」

その一言を聞いて、朝飛はすう、と息を吸って、溜まっていた言
葉を吐きだした。

「さつきからウダウダウダと五月蠅えんだよ、このピアス野郎。
人が聞きたくないっつってんだから、しつこく付きまってるんじや
ねえよ。お前はコンロにこべり付いた油汚れか。僕は朝ご飯の用意
とか洗濯とか掃除とか夕飯の買い出しとかタイムセールその他もろ
もろの理由で忙しいんだよ。どうしても話をきいてもらいたいなら
三回まわって道端に這いつくばって『自分は朝飛様の忠実な犬です
っつて言え。それに僕は母親似ただけだっつただろうが。一日に二
度も同じこと言わせてんじやねえよこの穴だらけ人間が。その穴に
コンクリート詰めてやるうか」

一息だった。一息で言い終えて、朝飛はにっこり笑う。魁は引きつった笑顔のままだ。

「……………なーんて、全然思っていないから安心してよ、魁」

素敵に素晴らしい笑顔が、底が見えないくらい果てしなく恐かった。朝飛の後ろには牙を剥く虎が見えた気さえする。いや、見えた。「すいません、女顔なんて全然心にも無いことを言ってしまったって本当にすいませんでした!」

「やだなあ、そんなに怯えないでよ。別に、この使い物にならない竹箒の柄の部分で君の頭をバツティングしてその頭をホームランさせてやるうだなんて、微塵にも思っていないから」

「おつそろしいことを笑って言うな! 怖すぎる!」

必死な様子の魁がそろそろ可哀想になってきた朝飛は、魁で遊ぶのを止め、真面目に話す。

「君は、なんで火之基が僕を襲ってきたか、知っているんだね」

本音を言えば、襲ってきた理由など、どうでも良かった。朝飛自身に被害は無かったのだ。ただ竹箒が一本使えなくなっただけ。別にそんなこと構わない。

だが、魁の言った言葉の意味を知りたかった。

『桐生一族は俺達を裏切った』

裏切り者。よく聞く言葉だ。

朝飛は門を静かに開けながら、有無を言わさない声色で言った。

「君の話を聞くかわりに、僕の質問にも答えてもらうよ」

「……………りょーかい」

「立ち話もなんだし、」

手招きをし、魁を家へと招き入れる。

「どうぞ。今は僕と弟以外、誰もいないけどね」

「どーも」

* * *

桐生の家に招かれて、魁が一番初めに思ったことは「遭難しそう」ということだった。それほどまでに、桐生の家は複雑で大きかった。鐔木の家は、他の家に比べれば大きい方かもしれないが、桐生に比べれば小さい家だ。

「でっけー……」

「裏にまだ道場があるよ」

「まだ敷地があるのかよ…金持ちだな、桐生は」

「田舎だから、土地が安いんだよ。たぶん」

どうとも思わないのか、淡々と言って、朝飛は客間へ続く廊下を歩いた。

一階では空夜の気配がしない。まだ寝ているのだろうか。いちいち魁のことを説明するのも面倒だと思い、朝飛は空夜を起こすのは後にしようと思った。

「ふーん。小さな家が少しずつ別れて、廊下で繋がってる感じだな」

長い廊下を音も立てずに歩きながら魁が納得した。

そして足を止める。どうやらやっと客間に着いたようだ。初めて歩く道は長く感じるとよく言うが、家の中でも感じるとは思わなかった。

「はい!？」

「ふははははっ! 馬鹿め、後ろがガラ空きじゃ!」

今度は可愛らしい総レースのワンピースを着た少女が、その姿に到底似つかわしくない言葉遣いと共に手裏剣を投げてきた。

三人の後ろから飛んできた手裏剣が、とんとんっ、と小気味良い音を立てて、魁のすぐ真上を通り壁へと突き刺さる。しゃがんだ状態のまま、魁はまた引きつった笑いで朝飛を恨めしそうに見た。

「おい、朝飛。これは一体なんなんだよ」

「……桐生の三忍衆だよ」

これまた引きつった笑いで朝飛が言った。疲れているようにも見える。

「自己紹介が遅れたね。アタシは海老名 桃実。B型の二十一歳。

桐生忍の中でたぶん一番強いよ」

桃実は煙草を携帯灰皿に押し込みながら、自信満々に言った。その隣で可愛らしい少女が続ける。

「儂の名は四日市 瑠璃じゃ。して、御主は一体何者じゃ」

「オレは、うげっ!？」

魁が自分の名前を答えようとして、次は朝飛から横っ腹に蹴りをいれられた。その反動で、思いつきり横へぶっ飛ぶ。

いきなりの攻撃に驚いて、桃実と瑠璃が朝飛の方を見る。

「……いつてえなコノヤロー! 何すんだよ!」

魁が素早く起きあがりながら、自分の居た位置を見た。

そこには、長い針が四本突き刺さっていた。

「は、針……?」

あそこに魁が居れば、言うまでもなく魁の串刺しが出来上がっていた。

「…ゆずきくん…何してんの？」

魁を蹴った張本人、朝飛が目をまんまるにして廊下側へと声を掛けた。

「朝飛様　　！　ご無事ですか！？　お怪我は！？」

廊下から突如現れたのは、朝飛と同じくらいの年頃の少年。右手には奇怪な形の銃を握っている。あれで針を撃ち込んだらしい。

これで、魁に奇襲をかけてきたのは三人目。

「コイツも、桐生三忍衆の一人か？」

最早気力すら残っていない魁に、朝飛が申し訳なさそうに答える。

「うん…曾根崎　　柚希くんって言うんだ。魁、死ななくて良かったね」

「全くだ…」

そんな二人のやりとりを見て、柚希が大袈裟に叫んだ。

「あ　　！まんまと逃げ切りやがって侵入者め！　朝飛様、すぐに排除いたします！」

柚希が魁に銃を向け、

「何を言つておる、柚希。儂の獲物じゃ」

「とりあえず、ここはアタシに譲るときな。桐生をなめたらどうなるか、このピアスに教え込んでやるよ」

桃実と瑠璃が横から割り込んで、

「駄目です！　ここは朝飛様一番の側近である俺に任せてください！」

しかし、柚希も負けじと二人を押し返し、

「はっ！　針銃をまんまと避けられておいて、一番の側近？　上手い冗談が言えるようになったのう、柚希」

「そういうアンタも手裏剣が空振りじゃないか。アタシなら一発で仕留めてたよ」

「ほう、随分大口を叩いておるがな、お主も他人のことを言えた義理ではなからうて」

女同士の喧嘩が始まる。

その三人を交互に見て、魁が朝飛の方を見た。虚ろだ。虚ろな目をしている。凄く怒っている。

「あ、朝飛」

「その三人……」

三人はまだ言い争いを続ける。次期頭領の声など耳に入っていない。

「いますぐそこへ座ってくれませんか。さもないともれなく三つの首が飛びますよ」

俊敏な動きで、桃実と瑠璃と柚希が正座する。

「「「ごめんなさい！」「」「」

朝飛は素敵に素晴らしい笑顔で、魁へと向き直った。

「僕は今からお茶を煎れてくるから、適当に座っててよ。それから桃実さん、瑠璃さん、ゆずきくん。僕が帰ってくるまでに、腕立て三百回しておいて下さい」

ぴしゃつと音を鳴らして扉を閉められた部屋には、早速腕立てを始める桐生三忍衆と、呆然と立つ鐔木の跡取り。

「オレ、五忍樹に対する認識が甘すぎたわ……」

ポツリと言った。

3・三忍衆 Who is the doubtful one?

(後書き)

ずっとこけ3人組みたいな三忍衆。

4・子犬 However, it surely

大人しそつに見える奴ほどキレると怖い。そんなことを、どこかの誰かが言っていた。

魁は必死の形相で腕立て伏せをする桐生三忍衆を見て、先ほどの朝飛を思い出した。正直、鰐木の頭目よりも怖かった。

「二百十、二百二十、二百三十！」

桃実はしらつとした顔で、ずるを働いていた。道理で他の二人より速いはずだ。魁が黙って他の二人を見ると、柚希と目が合った。

「……ふん」

逸らされた。

どうやら、柚希にもの凄く嫌われているようだった。

「二百四十、二百五十！ よっしや、あと五回！」

「あ　！　ずるいですよ海老名さん！　ちゃんとやって下さい
よ」

不正を見つけた柚希が、怒りながらも腕立て伏せをする。真面目な奴だ。指摘された桃実が不機嫌そうな顔で対応する。

「うるっさいねー。男なら黙って腕立て伏せしな。瑠璃を見てみなよ。黙々とし続けてるじゃないのさ」

「四日市さん？」

柚希と一緒にあって、魁もそつちの方を見る。

「……ひやくごじゅーに、ひやくごじゅーさん……」

部屋の隅で可愛い少女が、もの凄く怖い顔をして腕立て伏せをしている。その一角だけ、空気が違っていた。不釣り合いも良いところだ。

柚希が桃実のほうを振り返ると、すでに彼女は休憩に入っていた。呑気に煙草を銜えている。

「でもでも、不正は不正です！　ちゃんと、」

まだ主張を続ける柚希に向かつて、桃実はにやりと笑って言った。
「アンタ、そんな堅物だと大好きな朝飛に嫌われるよ」

その瞬間、柚希は泣きそうな顔になった。いや、どちらかと言えば、そう。主人に見捨てられた、捨て犬のような顔だ。今にも泣き出しそうさ。

「どどどどどどどうしよう海老名さん！」

「まあ落ち着きなうって。アンタがアタシの不正を見逃してくれれば、万が一そんなことがあったとき、アタシが上手く取り合ってやるよ」
「本当ですか　！？　有り難うございます！」

魁がもう一度瑠璃の方を見ると、瑠璃はさつきよりもスピードアップしていた。

「ふん：馬鹿か、あやつらは」
その通りだと思った。

「さんびやく　！」

きつちりと腕立て伏せ三百回をし終えた柚希が叫んで、部屋はまた静かになった。瑠璃も桃実も、とうの昔に休憩を始めていた。

ここは時計も置いていないせいとか、やけに沈黙が痛い。

魁が居心地悪そうに机と睨めっこをしていると、桃実が煙草を吸いながら話し掛けてきた。

「アンタ、名前は何て言うんだっけ？　さつきは聞きそびれたからね」

「あ。そういえば言ってなかったんだっけ。オレは鰐木　魁。鰐木一族の、次期頭目だ」

その言葉を聞いて、瑠璃が目を見開いた。

「五忍樹か……さつきは曲者呼ばわりしてすまなかったな。任務から帰ってきたばかりで、儂も少し気が立っていた」

「あー、いいよ別に。後ろにも気を付けろっていう教訓になったし」

なんでもないことのように、魁は首を振った。桃実も、煙草を灰皿に押しつけて謝る。

「アタシも、急に斬りかかって悪かったね。あやうく五忍樹の關係が悪くなるどころだったよ」

笑って言う桃実に、魁は何とも言えなかった。

それは。

それは、いま正にそうなのだ。五忍樹の關係が、かなり不味くなつてきている。

この三忍は、そのことを知らない。きつと、火之基の下駄っ子が朝飛を襲ったことすら、まだ知らないのだろう。

黙り込んだ魁に、袖希が不服そうな目を向ける。

「俺は謝りません」

「え？」

「俺は悪くないです。朝飛様は桐生の次期頭目となられるお方。いつ何時敵に襲われても、おかしくは無いんです。俺は、桐生三忍衆としての使命を全うしたまでです。大体、こいつが本当に鰐木の間人という証拠も無いのに、何故海老名さんも四日市さんもあっさり信じるんですか。怪しいじゃないですか」

そして袖希は、普通とは異なる形の銃 確か、瑠璃が『針銃』と呼んでいたその銃口を、魁へと向ける。

じゃき、と嫌な音が鳴った。

「五忍樹の跡継ぎなら、これくらい避けられるでしょう。俺のこの『曾根崎針銃』は、弾の代わりに毒を塗り込んだ針をいれています。避けられなければ、死にますから」

「ちよい待ちな、袖希。あんた、そんなことをしてただで済むと思つてんのかい？」

「そうじゃ。銃を下ろせ」

「嫌です。俺が、こいつは侵入者なのかそうでないのかを確かめます。口出しは無用です」

魁が、懐からクナイを取り出す。自分で打った、特別製のクナイ

だ。

「覚悟は良いですね？」

柚希が、人差し指に力を込めると同時だった。

閉じられていた扉が、静かに開いた。

「何してんの、ゆずきくん」

お盆に湯飲みを2つ乗せた朝飛が、その光景を目にして聞いた。

「朝飛様　！」

柚希は曾根崎針銃を放り投げて、朝飛の元へ駆けつける。

「な、柚希！　武器を放り投げるでない！　儂に当たるだろうが！」

瑠璃が慌てて針銃を受け止める。かなり危ない。危険だ。そんな瑠璃に構わず柚希は朝飛からお盆を受け取る。

「朝飛様がこんな雑用などする必要有りません！　言ってくだされば俺が用意しましたのに」

「ゆずきくん」

「はい！」

「魁を撃とうとした？」

朝飛に問いつめられ、ばつの悪そうな顔をする。

「で、でも！　俺はこいつが侵入者かどうか確かめようとしただけで！」

「ちゃんと謝らないと。魁は……錨木の人間だよ」

少しだけ間が空いた、妙な台詞がひっかかりつつも、柚希は素直に頭を下げる。魁ではなく、朝飛にだが。

それでも許して貰えず、主人に怒られてしまった柚希は渋々と魁へ向き直る。

「……さつきはどうもすみませんでしたねえ、この侵入者」

むすっとした表情で、魁に頭を下げる。嫌々やっているのが見え見えだ。セリフからして、謝る気なんて毛頭無いのが伺える。隣ではいつのまにか座敷へ腰を下ろしていた朝飛が、渋いお茶を美味し

そうに飲んでいた。

「ゆずきくん」

「はい！ 何でしょうか、朝飛様！」

「ちゃんと謝って」

その言葉に、柚希はめちやくちや嫌そうな顔をした。至極嫌そう
だ。そして複雑そうな顔だ。怒られてしょんぼりしているのに、後
ろには嫌いな魁がいる。

「……そろそろ怒るよ」

主人の言葉に、柚希はもう一度魁のほうへ向き直る。

「ごめん…なさい」

柚希の肩が震える。瑠璃と桃実と朝飛が耳を塞ぐ。魁は素直に謝
った柚希を、驚いたように見ていた。そして、刹那。

「朝飛様の阿呆　　！　　なんであんな奴を庇うんですか！ この
お人好し、素敵な笑顔！　　そんな朝飛様を俺はお慕い申し上げてお
ります　　！」

きーん、と耳の奥まで響く大声が部屋中に木霊した。複雑な心境
を見事に言葉へと変換して、柚希は走り去っていく。逃げたとも言
う。

柚希が走り去った廊下を見て、魁は朝飛に聞いた。

「おい、朝飛。追いかけていないのかよ？」

「たぶん仕事しに行ったんだろ。ほら」

ぺら、とスケジュール表を見る。本日、桐生三忍衆揃って、朝8
時より要人の警護。

それを見て、桃実も思い出したように立ち上がる

「あ、アタシもそろそろ行かなきゃ。メイクしなおさないと」

「ふん。顔を作るのに大変そうじゃの、年増は」

瑠璃も立ち上がって、窓に足を掛ける。どうやら普通の玄関から
出る気は無いらしい。

「あん？ アタシのどこが年増だつて？ 瑠璃。捻り潰すぞ」
「やってみろ」

一緒即発状態のまま、窓から去っていく桃実と瑠璃を見て、魁は思う。

「オレ…桐生の忍じゃなくて良かった。鰐木の忍でホント良かった！」

「君ってなにげに失礼だよな」

本日二杯目の緑茶をすすって、朝飛がのんびり答えた。

「だつてよ、お前、家には自分と弟としかいねえって言ってたじゃんかよ」

「言つてたね。まさかあの三人が帰つてるとは思わなかったんだよ

……特にゆずきくん……」

朝飛が遠い目をして言う。

きつと袖希にはいつも苦労させられているのだろう。主人がそう言う風に思っていると知ったら、彼は切腹でもしかねそうだが。

「魁。本題に入ろう。君は一体何を伝えに来たの？」

魁が伝えに来たこと。それは。

「火之基一族の次男が死んだ事件を、お前は知ってるか？」

朝飛がそれを、知らないはず無かった。

4 子犬 However, it surely (後書き)

連鎖して連鎖して連鎖して。
繋がる憎しみの鎖は。

5・仇 Die・Or・ruin

「火之基一族の直系は、男女の三兄弟で、上から順に志勇、志斗、志保という名前だ。末っ子が、さっきお前を襲ってきた奴。火之基志保。長男の志勇は、火之基の現頭目だったはずだ……と。まあ、これくらいはお前も知ってるか。んでもって、こっからが本題。今日午前3時過ぎ、二十代頃の男性の死体が繁華街で発見された。犯人不明、動機不明。警察がいま捜査している途中…… ニューズになったはずだ」

朝飛は、そのニュースをついさつき見ていた。星占いの後に見た、あのアナウンサーの声が鮮明に甦る。

「…なつてたね。その死亡した男性が、火之基志斗。火之基の次男だったんだろ？」

「ああ。なんだ、もう連絡が回ってたのか。さすがは五忍樹のネットワークだな」

「だけど、それと僕とは関係ないよ。全くの無関係だ。なのに、何故火之基志保は、僕を襲ってきた？」

表情を変えずに、朝飛が言う。平常を保とうとすると、それが余計不自然に見える。まるで何も悟られまいとしているように見えた。

「……それが全く無関係ってわけじゃないんだよな」

魁は湯飲みに映った自分の顔を見つめたが、飲もうとはしなかった。

「これはまだ表の世の何処にもまわっていない情報だ……火之基志斗の死体の傍に、ある破片が落ちていた。成分分析に秀でている薬樹一族が調べたところ、それは、鰐木一族が作った『疾風』という名の日本刀の破片だった」

「はやく……」

朝飛が、思わず湯飲みを落としそうになるが、堪えた。魁が、見透かすようにこちらを見ていた。

「これでも関係ないと言い切れるのか？ 『疾風』使用者、桐生朝飛」

魁が朝飛を問いつめる。死体の傍に落ちていた刀の破片、その刀の使用者。疑うなと言う方が無理だ。

朝飛が湯飲みをテーブルに置いて、口を開く。

「ぼくは、」「朝飛様を愚弄する気が、この外道お！」

上手い具合に朝飛のセリフの上に重なって、叫び声に近い大声がする。魁が、げっ、という表情をして瞬時に後ろへ飛び退いた。

やはり、畳の上に針が一本刺さった。音が立ったのが分からないくらい素早く開けられた扉の向こうには、柚希が牙を剥きだした犬のように唸っていた。どうやら、柚希の頭の中で魁は『倒すべき敵』と認識されているらしい。

「ゆーずーきーくーん……」

朝飛が怒りを堪えて、笑顔で対応する。無理矢理作った笑顔だ。

魁にでも分かる。そんな朝飛すら目に入らないのか、怒りの表情で柚希が魁へと近付く。

「罎木の跡取りとはいえ、もう我慢できません。その赤メツシユ、今すぐ死ぬ。もしくは三途の川を渡れ」

どっちを取っても地獄行きだ。じゃきん、と曾根崎針銃をかまえる柚希。次は何処へ逃げようかと眼を忙しなく動かす魁。

そして、どこからともなく竹刀を取り出した朝飛。

「ゆずきくん。お仕事はどーしたのかー…」

目一杯に振り翳して、

「な！」

柚希が間一髪の間、それを両手で挟み込んだ。いわゆる白刃取りだ。それに伴って、針銃がゴトツと床へ落ちる。

「こ、ここに、これには深い深い…それはもう東シナ海よりも深い訳があります…！」

「残念ながらもいまの僕は問答無用できみを叩き割りたい気持ちでいっぱいなんだ」

「叩き割るんですか！？ どこを!？」

柚希が必死で弁解をしようとするが、朝飛は聞く耳を持たない。じりじりと竹刀が二人の間を微妙に動く。

魁が一体どうしたものかと迷っているその中で、開け放たれた扉から桃実が顔を覗かせた。

「朝飛。柚希来てるかい？ さつきから見当たらないんだけど」

「ああ、来てますよ。桃実さん、ゆずきくんに首輪を付けてお仕事に行ってくださいませんか？」

「うわちゃー。相当怒ってるね。了解、しっかり見張っておくよ」

桃実は頭をがしがし掻いて、柚希の首根っこを掴んだ。そしてもちろん、引きずりながら廊下へと出る。

「離してください海老名さん！ 俺には朝飛様をお守りするという使命が……」

どごっ。

煩い柚希を黙らせるために桃実が鳩尾を蹴った。クリーンヒットだ。柚希がお腹を押さえて悶えていた。無抵抗に近い形の柚希に、それはあまりにも容赦なかった。

敵視されているとはいえ、余りにも可哀想な柚希を見て、魁がポツリと言う。

「お前……本当に仲間か……？」

「愛のムチってやつよ。仕事優先だつってんのにサボるから、その罰。せいじゃ朝飛、任務遂行してきまーす」

桃実は悪びれもなくそう言って、柚希にもう一発喰らわした。

「護衛、くれぐれも粗相の無いように気を付けてくださいね」

ひらひらと手を振る朝飛は、鬱陶しい柚希が消えて少し嬉しそうだ。桃実が柚希を引きずっていくのを見届けて、扉を再び閉じた。

「で、さつきの続き。『疾風』の破片が落ちていた。だから、君は

僕を疑っている。そういうこと？」

「まあそんなとこかな。だけど、お前だけを疑っている訳じゃない。オレはこの一連の事件の犯人探しをしているんだ」

「一連？」

人が一人死んだくらいでは、一連という言葉を使わない。朝飛が言葉の妙さに首を傾げると、魁がこれこそが本題だと言うように、声を低くした。

そして、その右手を開いた状態で、朝飛の眼前に見せる。

「五人」

「は？」

「ここ数ヶ月で殺された、忍の数だ。それもただの忍じゃない、五忍樹に関連する忍ばかり」

「まさか。五忍樹の忍が殺される？ そんなこと……」

「あつて良いはずがない。だけど、実際にそうなんだ。お前のように五忍樹直系の血筋を持たないから、裏でもあまり知られていない」

予想できなかった話題に、朝飛はただ話を聞くことしか出来ない。魁は、殺された忍たちについて話し出した。

「草津大河、重松鉄平。こいつらは火之基に使える下の忍。ペアで任務をこなしていたところ、殺された。犯人不明、動機不明」

五本の指から、親指と人差し指が消える。

「相津清忠。薬樹に属する忍、下っ端。鰐木への使い帰りに殺された。犯人不明、動機不明」

器用に、中指が消える。いとも簡単に折られていくその指を見て、いま名前の挙がったこの人達も、そんな風にして死んでいったのだろうか。

「佐渡朱美、鰐木の忍。苗木之下から新しい忍を受け取りに行く途中に殺された。犯人不明、動機不明」

五本の指は、小指だけになる。

「今回、火之基志斗が殺された。犯人不明、動機不明。五忍樹直系

者、初の犠牲者だ」

そして全ての指が手の内に収まり、朝飛の目の前には握り拳だけが見えた。

「何か……あるね……」

「だろうな。そうじゃなきゃ、この数はおかしすぎる。ちなみに、どの忍も殺され方は一緒。刃物で、ずたずた」

「君は、この事件の犯人を捜してるんだ？」

「ああ。そういうことになるな」

「理由は？」

朝飛のその一言で、魁が少しだけ固まった。不自然でない程度に、少しだけ。

「殺された忍の中に鰐木忍が居て、オレが鰐木の次期頭目だからさ」

「……へえ」

朝飛が、にんまりと笑った。馬鹿にするような、それでいて、哀れむような笑い方だった。

「んだよ。なにか可笑しいトコでもあんのかよ」

「あなたは本当は『誰』ですか？ ……そう言いたいんだよ、兄さんは」

魁が後ろを振り返った。

さっきまでそこに音なんて無かった。

モノなんて無かった。

匂いなんて無かった。

気配なんて無かった。

何も無かった。なのに、そこに居たのは生きている少年だった。

「だ、誰だ!？」

「あなたこそ誰？ 鰐木魁？ 違うよね。嘘は、人の目を濁らせる

から」

少年は、形容しがたい雰囲気を持っていた。例えるなら、無。無表情、無感情、無音、無関係。全てが、無に思える。

黒い髪で、日本人には珍しい、深い碧色の目をしていた。顔立ち
は、朝飛とそっくりだった。

「ああ起きたんだ。おはよう、空夜」

魁の背後で、呑気な声が響いた。朝飛が湯飲みを持ちながら、目の前の人物へと声を掛けた。

「『おはよう』じゃないよ、兄さん」

「あれ？ じゃあ、こんにちわ？」

「巫山戯ないですよ。なんでこんな回りくどいコトしてるの」

回りくどいこと？ 魁が不思議に思っていると、空夜と呼ばれた少年がずかずかと部屋へと入ってきた。そして、魁の湯飲みを取り上げて、机の上に派手にぶちまけた。

「おわっ！？ 何してんだ、お前……」

無惨にも全てを空にされた湯飲みを置いて、空夜は冷めた声で言った。

「自白剤」

「あ？」

「いれてたろ、兄さん」

呆れたように机の上の茶を見て、問題の人物へと視線を移す。

「うん。ちょこつとね」

朝飛は、悪びれもせずに応えた。魁がそれを見て、そして大きな溜息を吐いた。

「ばればれ……って訳ね」

「桐生を甘く見るな。僕はともかく、兄さんは疑うことしかしないからね」

「あはは、酷いなー」

魁はこの二人を改めて『怖い』と感じた。ただ恐怖の対象となる『怖い』じゃない。興味本位で中身を覗きたくなる、そんな『怖さ』

だ。

空夜が魁に本当のことを問いたです。

「で、結局の所、あなたは誰なの？ 鰐木に跡継ぎは居ない。確か鰐木の頭目は、子供がいないからね」

完全に、全て見透かされている。こんなにもすぐに当てられるとは思わなかった。

魁は二度目の溜息をついた。

「苗木之下に所属していた、飯島魁。ついこの間、鰐木の頭の養子になることが決まった。だから次期頭目という肩書きに嘘は無い。まあ、手続きとか色々あつて、まだ正式な鰐木の跡取りって訳じゃないんだけどな」

もう隠すことは無かった。朝飛がもう一度同じ質問をする。

「なるほどね。じゃあさ、本当の理由はなんなの？ 犯人探しをする、本当の理由」

「……仇討ちを、頼まれたんだよ。苗木之下のガキンチヨにな」

「仇討ち？」

「ああ。殺された草津大河と、重松鉄平の弟妹共にな」

ここから、運命は混じり合った。

5 仇 Die · Or · ruin (後書き)

草津真理奈、重松鉄太。

後に、裏町へと属することとなる。

6・再会 Dangerous girl, again

「草津大河と、重松鉄平の弟妹？」

朝飛の問いかけに、魁が深く頷いた。

「名前は、草津真理奈と重松鉄太。二人とも苗木之下の忍だ」

「苗木之下に、兄弟の忍……珍しいね」

朝飛が思っていたことを、空夜が言った。苗木之下、異質の忍。

魁がこの間まで所属していた『苗木之下』は、五忍樹の中でも異質。いわば養成所のような所で、五忍樹の中で最も多種多様の人が集まる場所だった。

五忍樹は、ただの忍の集団ではない。一族にはそれぞれ特徴がある。

『桐生』は気の流れを理解し、主に体術に優れる。

『火之基』は攻撃性に優れた一族。主に火に基づいた術を使う。

『鏢木』は武器職人。様々な忍の使用する武器を作り出してきた。

特に刃を用いる武器を作るため、鏢の字を取っている。

『薬樹』は薬。傷薬から毒薬までクスリと名の付くものなら何でも調合する。医療に使うときもあれば、暗殺に使うときもある。

そして『苗木之下』。ここは先に言った四つの一族のうち、どれかに入る為に修練する場所だ。主に孤児や、社会へ出れない者、天涯孤独の者を集めて構成されている。

故に兄弟で苗木之下に所属しているというのは、珍しいことだった。

「五忍樹の苗字を名乗れるのは、一族の直系の者のみ。苗木之下出身のオレは、鏢木へ養子縁組されたことによって、飯島の姓から鏢木の姓を名乗れるようになったって訳だ」

「それで？ 仇討ちを頼まれたから、この事件の犯人を捜している

の？」

「まあそんなこった。もう嘘はついてねえ」

魁は両手を頭の後ろへやりながら、目の前の桐生兄弟を見た。空夜は相変わらず何処を見ているのか、焦点の合わない目を足下へやり、朝飛は魁のことをじつと見ていた。

「なんだよ？」

そんな朝飛に声をかける。朝飛はゆつくりと声を出した。

「嘘は吐いてない。けど、隠していることはある」

「……どこまでも信用してくれねえのな」

魁は笑った。まあね、と朝飛も笑った。空夜だけが笑わなかった。

「で？ これから君はどうするの」

「んー……それが、ちょっと言いづらいんだけど……」

「なに？」

頭をポリポリ掻きながら、魁が言葉を濁す。空夜によって零された自白剤入りのお茶が、魁の表情を映す。

「オレさ、何も言わずに勝手に出てきたから、いま鐔木の忍に追いかけられてるんだわ」

「帰れ」

即答だった。魁が言い終わると同時に朝飛が即答した。

しばらく魁の動きが止まる。そして、

「ひでえー！ おまつ、それ酷くねえ！？ 何も聞かない内に答えを出すなよな！」

「じゃあ続きをどうぞ」

可哀想に思ったのか、空夜が魁に声をかける。人の話は最後まで聞け。彼が母に教えられた言葉だ。

「かくまって欲しいです」

「帰れ」

空夜も、先程の朝飛と全く同じ答えだった。容赦のない兄弟に、

魁があからさまにショックを受けた顔をしていた。

「あーあーあー。折角事件のこと話してやったのになー!」

「なんで勝手に出てくるんだよ。ちゃんと頭目に訳を話して、それから事件を調べればいい話だろ?」

机の上に零れたお茶を拭き取りながら、朝飛が言う。その通りだ。黙って出てくる意味など無い。

「頭目には言ったさ」

畳の上にとかつと寝転んで、魁が拗ねたように答える。

「だけど、この事件には関わるなって釘をさされた。それでも、オレは二人の仇討ちをしなきゃいけない。まるで本当の兄貴みたいだった、二人の。だから……ってえー!」

雰囲気をぶち壊すように、空夜が魁を蹴った。

「なんだよ!?!」

「僕の座布団の上に座るな」

どうやら魁が寝転んだ場所に空夜専用の座布団が置いてあったらしい。なにも座布団ぐらいで蹴ることはないのだが、それが当たり前らしく、朝飛も朝飛で「駄目だよ、人の座布団の上に寝転んじゃ」と魁を窘める。

「なんだよ、桐生の忍はみんな暴力的だな!?!」

「体術に優れてるって言って欲しいね」

空夜が心外だと言わんばかりに答えたと同時に、玄関から呼び出し音が聞こえた。

「……誰だろ? ちょっと出てくるね」

朝飛が立ち上がったって、廊下へと出る。朝から色々であったせいで今日はまだ剣道着から着替えてすらいらない。

部屋では残された二人がどうしたものかと立ちすくんでいた。気まずそうに魁が声を掛ける。

「なあ空夜。いま何時だ?」

「八時ちよっと過ぎ」

「こんな時間に誰だろうな?」

「気になるね」

二人の意見が一致したらしく、空夜と魁は顔を見合わせて朝飛の後を追った。

「空夜は誰か心当たりあるか？」

「近所の人か、鰐木の間人じゃないの？」

「えっ、まじでか？ やべえ！」

サツと空夜の後ろに隠れる。肩をがっちりと掴んで、魁は空夜を押しながら歩く。

「……歩きにくい」

「いま連れ戻されるのは嫌なんだよ」

「じゃあ部屋で待っておけばいいのに……」

「気になるだろ」

「矛盾しすぎ……」

「ごちゃごちゃと言っている間に、玄関へとついた。扉の前には朝飛と、見慣れた顔があった。

「火之基志保……！？」

「誰、それ」

先程見た顔だった。魁が放った名前に、空夜が疑問符を飛ばす。

「お前の兄貴を殺そうとしてきた奴だよ」

「ふーん。殺せなかったんだ」

興味無いのか、空夜が詰まらなさそうに答える。鰐木の間人じゃなかったことで安心したのか、魁は空夜の前へ出て、志保に向かった。

「……鰐木の跡取り。まだここに居たんですね」

「お前こそ。今度は何をしにきたんだよ？」

志保がぐつと黙り込む。いきなりの魁の登場にびっくりしていた朝飛が、そんな志保の代わりに答える。

「言いたいことがあるんだって」

「言いたいこと？」

そして今気付く。志保の後ろには、背の高い男もいた。高い癖に、細い。志保によく似た目を持っていた。まじまじと魁が見つめてみると、男が一礼した。

「初めまして、飯島魁」

「な、なんでそれを…!?!」

「火之基志勇さん。火之基の頭領だよ」

朝飛の紹介に、しかめっ面の妹とは正反対の柔らかな笑顔を浮かべ、志勇は朝飛へと向き直る。

「今朝は大変ご迷惑をお掛けした。誠に申し訳ない」

謝罪の言葉だった。今朝のことに対する、謝罪。志保はまだ不満を残した顔で朝飛を睨んでいた。

「志保、朝飛さんに謝りなさい」

志勇の言葉にでさえ、耳を貸さない。じつと朝飛を見つめたままの志保に、志勇が左手で強制的に頭を下げさせる。

「あーやーまーれーって言ってるんだ!」

「いやーだーって言ってるっつーの! 馬鹿兄!」

「頭領命令だ!」

「職権乱用よ!」

「どこが!?!」

賑やかな兄妹だった。だが、腑に落ちない。魁は志勇に向かって尋ねる。

「火之基頭領。なんで謝りに来てるんすか?」

志保の頭を両手で持ち、志保に両頬をつままれながら、志勇が答えた。

「桐生は五忍樹を裏切っただけでなごいなかった。そういうことだ」

桐生の忍 影送り組曲

桐生の忍 影送り組曲

檜が香る。

6・再会 Dangerous girl, again (後書き)

7・欠片 Look at this world!

一日が、とても長く感じる。そう感じるのは久々だった。まだ昼時だというのに、朝から色んな出来事があった所為だ。いや、「あった」というにはまだ早いかもしれない。まだ続けているのだから。「思考回路、ショート寸前！ って感じだけど、大丈夫？ ゆずきくん」

朝飛は自分の目の前でクエスチョンマークを飛ばす袖希を見て、それから台所を見た。

「これは、どういう、こと、ですか？」

袖季が途切れ途切れに言葉を発しているところを見ると、己自身、まだよくわかってないようだ。

「そうだねえ……一体どこから説明すればいいのか……」

袖希の質問に、はあ、と溜息を吐いて朝飛は答えにならない答えを呟いた。彼等の目の前に広がる光景は、想像すらしなかった光景。

「あー！ 下駄っ子、お前いまオレの皿にタマネギ入れたら！」

取り皿にこんもり盛られたタマネギを指さしながら大声を出す飯

島魁 改め、鰐木魁。

「入れてないわよ。被害妄想よ、ねえ空夜」

どうやら今朝の敬語は、彼女の性質ではなくただの猫かぶりだったようだ。恐らく年上であろう魁に対して、彼女はつつけんどんな返事を返す。何故か彼女のサラダからは、タマネギが全て無くなっていた。

「うん。被害妄想だよ」

「おい空夜！ お前どっちの味方だよ！」

「っていつか、どっちの味方にもなつたつもりは無いよ、僕」

そして、志保の隣に座る弟、桐生空夜。

「じゃあこのタマネギ食ってくれよ！ オレも苦手なんだよ！ お

前、これくらい食べるだろ？」

「ホント……正直言ってもいい。魁、タマネギくらい食べられるようにしておいた方が良さと思うけど」

「無理！ 生理的に受け付けねえ！ 食べたら倒れる！」

鍔木の次期頭目、その向かい側には火之基の直系と、桐生の直系である弟が仲良く座っている。彼等が食べている料理は、朝飛が冷蔵庫のありあわせで作った昼食だった。

護衛の任務が終了して、いち早く桐生家に戻ってきた柚希は、未だにこの異色の構図を理解できずにいた。

しばらくどう説明したものかと悩んでいた朝飛が、やっと口を開く。

「まあ、そこは雰囲気察しておいて」

説明するのが面倒で、全てを放棄した一言だった。

「それはいくら何でも難問すぎますよ！ 何がどうなって、五忍樹の直系が一度に集まるんですか！」

「僕に怒鳴られても……」

朝飛は視線を空夜達から外さないままで、柚希の質問に答える。

「志勇さんが、来たんだ」

「火之基の当主が？ ここへ？」

「そう。ゆずきくんは、火之基の次男が亡くなってしまった事件を知ってるよね。魁が言うには、それは偶然ではなく、確実に五忍樹が狙われているらしいんだ。そして彼は、その犯人を捜している。色々な事情があつてね」

柚希が魁の方へと視線をずらす。タマネギと戦う彼の姿が見えた。どうやら空夜と志保が無理矢理食べさせようとしているらしい。可哀想なことに、魁の体を押さえつける志保と、その口に向かってタマネギを放り込む空夜の連係プレーは見事だった。

朝飛はそんな彼等から柚希へと視線を移し、けるりと言った。

「ちなみに、僕も疑われていたっばいよ。犯人に一番近いって」

「……やっぱりあのピアス野郎、始末しとくべきでした……！」

「言つと思つたよ」

いまにも曾根崎針銃を取り出しそうな雰囲気の袖希だったが、すぐに冷静になる。

「…えっと、それと火之基当主の登場は、どう繋がるんですか？」

「それからまあ、色々話してて……なんだっけ？ ああそうそう。

僕の『疾風』の欠片が火之基の次男の死体傍に落ちていたらしくて、危うく『桐生一族が五忍樹を裏切った』ってことになりそうだったんだけど………志勇さんが、その説を全否定した」

あの時、志勇は言い切った。「桐生は裏切っていなかった」と。

* * *

あの時。玄関で放たれた言葉に、魁は食い下がった。

「裏切つてないって……どうして言い切れるんすか？ 何か証拠でもあるんすか？」

魁が珍しく、真剣な面もちで尋ねていくのを朝飛はまるで他人事のように見つめる。いや、『珍しく』という表現自体が間違いなのかも知れない。まだ彼等は、出会ってから一日も経っていないのだから。

これこそが、本来の魁の姿なのかも知れない。

そんな魁に対し、先程から変わらない柔和で、しかし厳格さの残る表情で志勇は言う。

「そう怖い目で睨むな、鰐木の。断言するのには、其れ相応の理由

があるからだ」

「理由？」

「勿体ぶらずに、はっきり言えばいいじゃないですか。火之基さん」

至極つまらなそうに空夜が言った。朝飛は何も言わない。何も言わずに、ただ何処かを見ている。何処を見ているかなんて、魁には分からない。本当は、何も見ていないのかも知れない。

どうすれば良いのか分からずに、視線だけが激しく動き回る魁に、志勇は事務的に話す。

「火之基志斗　私の弟が殺されたであろうその時間に、桐生朝飛

いや、桐生次期当主がこれを殺すことは不可能だ。何故なら、志勇の言葉の後を、不機嫌極まりないその表情を崩すことなく、志保が続ける。

「桐生朝飛は、とある運送業者を殺していたから」

誰も、表情を変えなかった。魁以外は。魁はこれ以上は無理だろうと思うくらい目を見開いて朝飛を見る。朝飛は、まだ違う所を見ていた。

志保の、標準より少し低く感じるその声だけが聞こえる。だけしか、聞こえない。

「その運送業者は、何でも運ぶって評判の業者だったようね。今頃悲しんでいるでしょうね、彼等に頼っていた人達は」

「あるいは、発狂しているかもしれない。薬が、買えなくなつて志勇の言う薬。それは決して表で出回るような薬ではなく、人を破滅させる為だけに存在する毒にも似た、一種の『薬』。

そこでやっと、朝飛はこちらを見た。こちらの世界へと、目を向けた。

「人を殺していたから、殺人容疑が晴れる。なんだかとても可笑しい話だね、魁」

朝飛は笑った。

「とっても、可らしいよ」

困ったように、笑った。

「……でも……だけど！ あの欠片は何だって言うんだ！？ 火之基志斗の遺体の傍に落ちていた、鰐木の頭の最高傑作『疾風』の欠片は！」

怒りにまかせて、怒鳴った。相手が五忍樹で二番目に権力の有る一族で、こちらが二番目に権力が弱い立場だと言うことも忘れて、何に怒っているのかも分からずに魁は怒鳴った。怒鳴り散らした。「欠片など、何処にでも落ちているものだよ、鰐木の。ましてや、日々暗躍する桐生の次期当主の刀なら、尚更だ。何処に落ちていようと、不思議なことは無い」

魁はそれ以上何も言わなかった。彼が、志勇がそう断言するのだ。これ以上自分が何を言おうと、何も変えられないだろう。諦め、その感情だけが彼を満たした。

「……それでは、私はこれで失礼する。朝飛くん、桐生頭目に宜しく伝えてくれ」

「ええ、もちろんです」

がらがらと、引き戸式の扉を開けて志勇は帰る。だが。

「私は、帰らない」

志保は兄の行動に習わず、そこに立ち尽くしていた。

「私はまだ、あんたのことを、信用していない」

ギン、と志勇の目が光った気がした。それと同時に、志保が慌てて付け加える。

「……いない、です。だからアタシが納得するまで、ここに居させてもらう……です」

微妙な敬語になりながらも、志保は用件を伝えた。この件についてどうしようも出来ない魁が、一切の決定権を持つ朝飛に向かって尋ねる。

「おい、どうすんだよ」

朝飛は朝飛で、あまりにも突然の申し出に少し戸惑っているよう

だった。何をどういえば良いのか分からない。

そんな兄に代わって、弟が一言呟いた。

「好きにすれば？ 僕には無関係だよ」

『無関係』を強調して言う彼の姿。朝飛は形容しがたい表情でそれを見ていた。

「それじゃあ、好きにさせてもらうわ。じゃなかった、もらいますね」

「決まりだな。じゃ、オレもお世話になるってことで……」

「なんでやねん！」

朝飛が、綺麗に魁を一本背負いした。

* * *

「と、言うわけで。魁と志保は暫くここに入入りすることになったみたいだよ。それも、かなり頻繁にね……」

投げやりな台詞だった。それが聞こえたのか、志保の声が被さる。「朝飛。言っておくけどこれは監視よ。好き好んでここに入入りする訳じゃないわ。もちろん、馴れ合うつもりもない。魁が志斗兄の犯人を捕まえて、私が全てに納得するまでの監視よ。だから、必然的に私も犯人探しに参加することになるし、当然、あんたもよ」

理不尽なことを続けざまに言う彼女の手には、しっかりとスプーンが握られたままだった。その姿で、馴れ合わないとか言うか、普

通。

「桐生全体？ じゃあ僕も疑いの対象なんだね」

むぐむぐと炒飯を口に頬張りながら言う空夜に、志保はぱつとその両手を取り、握りしめる。

「うっん！ 空夜は別よ。だって空夜は空夜だから！」

「なに、その理屈」

朝飛が言つて、魁が代わりに答える。

「まあ末っ子とかつて、弟とか妹を欲しがるもんだしな。志保は三人兄弟の一番下なんだろ？」

「えっ、そういうもんなの！？ ちょっと志保、空夜は僕の弟であつて、キミの弟じゃないよ！」

「うーん……じゃあ義弟つてことで」

「駄目だよ！ 『じゃあ』つて何！？」

先程まで三人だったそのダイニングテーブルに、朝飛が加わつて、さらに賑やかになる。

その有り得ない光景を、柚希はただ静かに見ていた。

7・欠片 Look at this world! (後書き)

「僕が志保の義弟になるってことは、志保は兄さんと結婚するってこと?」

「え!」

8・疑心 Nobody believes

あの後、朝飛と魁と志保と、そして一応参加しているのか、空夜も交えた四人でこれからどうするのかを決めた。とりあえず共通の目的である、火之基志斗殺害を始めとする五忍樹関係の事件を調べることにして、それから朝飛が夕飯の買い出しに行ったり、任務報告書を桃実と瑠璃が渡しにやってきましたり。

慌ただしく過ぎていって、いつの間にかやってきた夕方。

朝飛の「遅くならない内に帰った方が良い」の言葉に素直に従って、志保は玄関前に居た。火之基家は、桐生家のある市よりも二つばかり南に行つたところにある。電車を使うとは言っているが、それでも早い内に帰つた方が良いことにこしたことはない。

「それじゃあ、また明日も来るからね。朝飛、しっかり魁の犯人探しを手伝うのよ」

「出来るだけ情報を集めてみるよ」

「あ　！　なんですか、生意気に！　朝飛様に命令するなんて百年早いです！」

「はいはい。もういいから、ゆずきくん」

玄関でも構わずに喚く柚希と志保。朝飛はこれ以上騒がれては困ると思ひ、志保を半ば追い出すようにして帰す。と、そこに桐生家の居候となつた魁が廊下からやってきた。

「あ、下駄っ子はもう帰るのか？」

「うん。暗くなつたら危ないからね。もう帰ってもらつことにしたよ」

「ふうん。じゃあオレ、その駅まで送ってくるわ」

自然と出た魁の言葉に、朝飛は少し間を置いて、そして一言「分かつた」と呟いた。いつもように微笑みながら。だが当の志保が反対する。

「いらないわよ、見送りなんて」

「よくねえよ。万が一のことがあったら、火之墓の頭に会わせる顔がねえだろ？」

「……フン。勝手にしなさいよ」

先に行くわよ、と早歩きで進み出した志保を追いかけようにして、魁が慌てて後を追う。

「あ、朝飛！ オレの分の夕飯も置いといてくれよー」

「このピアス野郎 ! 図々しいにも程がっ、」

「うん、分かったー」

間延びした声で、了解の返事をする朝飛。呑気にも右手を大きく振っている。

「朝飛様……！」

がく、と膝を折る柚希。

「何を呑気なことを！ 他忍を家に置くんですよ！？ もっと警戒心を持ってください！」

「まあまあ」

身を乗り出してくる柚希を押さえ、朝飛は苦笑いで対応する。

「別にいいだろ？ 目的は一緒なんだし……」

「ですが」

まだ不満を残しているのか、スッキリしない返事を返す柚希に朝飛は何食わぬ顔で言う。

「僕の邪魔をするようなら、容赦はしないけどね」

* * *

「それで？ わざわざ私を見送るっていう口実を作った訳は何？」
歩調も口調も、表情すらも変えず、ただ先程と変わらないように
歩きながら志保は魁へと問いつめた。

「……怪しいと思わねえか？」

「志勇兄が？」

「…何故、志勇さんは急に桐生を庇った？」

魁は志保を見ずに話す。二人を注意深く見なければ、この間で会
話がなされているなどと気が付かない程に自然な素振りだった。

「今朝お前と初めて会ったとき、お前は言ったよな。『お頭に報告
済みです』って。それはつまり、お前が桐生朝飛へ攻撃することを、
志勇さんが許したってことだよな」

「そうよ」

「それに対して、志勇さんは謝った。決定的証拠では無いにしろ、
物的証拠はあった。それにも関わらず、自分の行動が間違っていた
と認めた」

「『疾風』の欠片ね。でもあれは志勇兄が言っていたように、欠片
なんて何処にでも落ちているものなんでしょ？ ましてや、落ちて
いたのは警察も見逃すくらいの破片で……」

「……はず、ねえんだよ」

低い声だった。憤りを感じている声色。いつもとは違うその声に
驚いて、志保が思わず魁の方を向いた。

「お頭の作った刀が、欠けるはずねえんだ」

自分のことは自分が一番理解している。だから、魁はとっくに分
かっていた。自分が、意固地になっていることくらい。

それでも。

「あれは、お頭の最高傑作なんだ」

自分が最も尊敬する鍔木の頭目。魁は彼に憧れ、いつか鍔木の忍
に所属することを苗木之下の時代から夢見ていた。

それ故に、苗木之下では武具の勉強ばかりしていた。作り方から、使い方まで。独学の限界まで勉強していた。だから知らないが、鐔木は養子に自分を選んでくれた。その矢先の、この事件。

「もし万が一欠けるとするなら、それは人を斬った時だ。それも、何人もの人間を」

志保は溜息を吐く。

「桐生の次期跡取りよ。何人が斬っていても可笑しくは無いわ」

「ああ、可笑しくない。だけどあの『疾風』はそんなことをするために作られたんじゃないやねえんだよ。お頭は言ってた。『忍』を守る刀なんだつて。あの刀は、人を斬るために作られたんじゃないやねえ」

「じゃあ何？ あんたは朝飛がこの事件の犯人だつて言うの？」

「それは分からない。現に、それが不可能だと志勇さんに言われただけ」

魁は前ばかり見ていた目線を上へと上げ、電線が轟めく空を見た。真っ赤な空だった。

「だけど、あいつは、何かを隠してる」

何故かその時に思い出したのは、今日一日でよく見せていた表情ではなく、たった一度だけ見せた、困ったような笑顔だった。

「本当に調べるべきは、桐生つてことかしら」

志保が魁の思っているであろうことを言って、会話が終了する。

もう話すことも無いのか、ただ沈黙の中で駅へと向かう。二人の影は長く伸び、魁のピアスが夕陽に反射する。

「……隠してる、ね」

そんな二人よりも少し離れた場所。

「一体何を隠してるんだろっね」

鮮やかすぎるほどの赤色の中、空夜が廃ビルの屋上に腰掛けて、魁と志保を見下ろしていた。

桐生の忍 影送り組曲

桐生の忍 影送り組曲

渦巻く疑心。

8・疑心 Nobody believes (後書き)

閑話「命乞いデイズ」(前書き)

【閑話】

- 1 むだばなしのこと。
- 2 心静かにする話。もの静かな会話。

閑話「命乞いデイズ」

「おかしいと思わない？」

朝飛が突然そう言った。質問の意味も意図も理解できなかった柚希は、質問に対して質問で答えた。

「何がでしょうか？」

「最近よく思うんだ」

「はあ」

足下を見つめて、朝飛は球形のゴミを綺麗に蹴り上げた。それは空気の抜けたボールのように上手く跳ねられずに地面へと転がった。朝飛は思うように飛ばなかったことが不満だったのか、少し納得のいかない顔をしていた。

「なんで命乞いなんてするんだろっね」

さっきの続きを言う。柚希はやっと話が見えてきて、だけど何と答えれば良いのか分からなくて、また質問した。

「命乞い、ですか？」

「そう。謎だよ」

「何が謎なんですか？」

「最近こんなことばかりしてるからか、色んな命乞いを聞くんだけど、今から自分を殺そうとしている人にそんなことをして本当に助かると思ってるのかな？」

そしてまた朝飛はゴミを蹴った。次は小さな球形だったから上手く飛ばかと思っただけ、繊細な物だったらしく、朝飛が蹴ったと同じ時に壊れた。

朝飛は自分の靴を見て、ああ汚れちゃった、と小さく呟いた。

「そうですね……きつと、助かりたいから言うんですよ」

当たり前のことを言った。それを聞いて、朝飛はやっぱりと笑う。「助かりたいから？ 無駄だって分からないのかな。目の前に刀を引っ提げた人が居て、自分のことを見ていて……それを分かかって

言ってるのかな？ 本気で助かると思ってるのかな？」

あはは、と楽しそうに朝飛は笑う。

「そうだとしたら、傑作だね。笑えるよ、本当」

とても楽しそうに笑う。

「命乞いする暇があるなら、逃げ出せばいいのに」

「逃げられたら、困るじゃないですか」

「逃がさなければいいんだよ」

「……矛盾してませんか？」

「そう？」

柚希は少しだけ答えの出ない問答に参っていた。それを察したのか、朝飛はそれ以上何も言わなかった。

ふと朝飛が視線を下に移して、自分の靴を見た。

「汚いなあ、もう」

「仕方ないですよ。ゴミなんて蹴ったりするからです」

柚希は後ろを振り向いて、朝飛の蹴っていたソレ等を見た。最初に蹴った頭は穴という穴から液体が出ていたし、次に蹴った眼球はその衝撃に耐えられずに潰れていた。腕だか足だかよく分からない関節部分は、白い何かが見えていた。

鉄の匂いはもうしなかった。代わりに、嗅いだことのあるような匂いがした。

ああ、これが死臭なのかな、と柚希は静かに思う。自分が生きてきた中で、一番多くの時間を共有してきた匂いだ。もうまわりついて、離れてくれない。

朝飛は何かの臓器であったらろう肉片を見つめて、動かないで居た。

「さっきの人がさ……」

「はい」

「僕に命乞いをしたんだ」

「はい」

だから、あんな質問をしてきたのだらう。柚希は静かに返事をす

る。

「『私には家族がいるんだ』だって。笑えるよね。その言い方じゃあまるでさ、僕に家族がないみたいだよね」

「そうですね」

「……でも、あながち間違いでもないかな」

「はい？」

聞き返すように、返事をする。朝飛の言っている意味が分からなかった。彼には、自分とは違って家族が居るというのに。

「だって、もう、終わってるのと同じだから」

「朝飛様？」

「みんな、バラバラだから。僕が全部を切り捨てて、壊してしまった所為で」

風が、出てきた。

「……そろそろ帰りましょうか、朝飛様。任務完了ですし」

何も言えなくなった柚希は、それだけを言っ、帰りを促す。

「そうだね」

朝飛は止めていた動きを再開して、後ろを振り向かず歩き出した。その二歩後ろから、柚希も歩き出す。歩調はゆっくりとしていて、早くこの場から抜け出したい柚希は、急ぐ気持ちを抑えながら小さな歩幅で歩く。

（昔と比べて朝飛様は随分と変わってしまった。）

柚希は前を危なっかし気に歩く朝飛を見つめて、自分の知っている『昔の朝飛』と重ねてみた。何も知らずにいたあの頃。朝飛の背負う物に気付かなかった、幼き日。朝飛は、今日と同じように笑っていたか？

(ああ、でも、)

前を歩くこの少年の。

(一体どこが変わったんだっけ?)

思い出してみれば、やっぱり何も変わってない気がした。思い出なんて、そんなものだ。美化もすれば、劣化もする。柚希は立ち止まりかけていた足を動かして、相変わらず朝飛の二歩後ろを歩いた。変わっていないように見えるけれど、やはり、どこかが変わってしまったのだろう。

自分が気付かないほどに、微量に。

この世界に不変の物など、ありはしないのだから。

(閑話休題。 2007/1/3)

桐生の忍 影送り組曲

閑話「命乞いデイズ」(後書き)

【閑話休題】

それはさておき。話を戻して。

話を本題に戻すときに、接続詞的に用いる語。

何かを忘れてるのは覚えているのだが、何を忘れたのかは忘れてしまった。思い出そうにも、記憶の断片にすら残っていないのだから困りものだ。

忘れてしまうくらいなら、いつそ全部まとめて忘れられれば良かったのに。そうすればこうして悩む時間も無かった。気にすることなどなく、毎日を送っていた。

自分の中で、いつも、どこかで何か引つかかる。いつも、ということは、大抵一緒にいる兄に関係することなのだろうが、いまいち自信も無い。

それ以前に、今までで鮮明に記憶へ残るような出来事が無いのも考えようだ。

家を出て行ってしまった母の、別れの瞬間だとかは思い出せないのに、よく話していた他愛の無い話だけは覚えているのだ。なんだ、この欠陥だらけの記憶力は。

『あいつは、何かを隠してる』
いま、頭の中の大半を占めている言葉を、声に出さずに口を動かしてみる。

誰だって何かを隠している。自分はもちろん、兄も。この台詞を言ったあの忍だって。

誰だって知られたくないことの一つや二つ、持っている。それを隠すために、嘘を吐いたり、騙したり、いろいろするのが人間だ。だけど自分は別にそれを知ろうとは思わない。知る必要が無い。

自分には全くの無関係なのだ。

そもそも。

そもそも、だ。一週間ほど前からこうして兄達はこの家へ集まり、

色んな憶測を立てては否定し、情報集めに勤しんでいるが、それは何の為なんだろうか。

そんなことをしたって死んだ人が甦るでもなしに、あの三人は飽きずに犯人探しをしている。少年探偵団か。……読んだことないけど。

犯人を見つけて仇討ちだとか、そういうのは自己満足じゃないか。そんなことをする暇があるのなら、今日のおやつ心配でもすればいいのに。その方がよっぽど有意義だ。

悶々と空夜が考え込むには、ちゃんとした訳がある。空夜はずっと閉じていた口をようやく開け、三角形になって話し込む三人に向かって言った。

「なんで毎回毎回、僕の部屋に集まるんだよ」

不機嫌極まりない声だった。とても迷惑しているようだ。この一週間、朝飛と魁と志保はずっとこの部屋に集まっては大声で話している。

「僕の部屋でもあるんだよ、空夜……」

二段ベッドの上方へ向かって朝飛が言う。そう、ここは兄弟二人の部屋だ。別に朝飛が使ったって構わない。

「それをそっくりそのままバッドで打ち返すよ。兄さんの部屋でもあれば、僕の部屋でもある。なのになんで作戦会議室みたいなことになってんの」

「え、だって僕と魁と志保と空夜が居る場所でやらないと、意味が無いだろ？」

空夜が「げ」と声を出してあからさまに顔を顰めた。

「僕も犯人探しのメンバーになってるの？」

「なってるんだから、いつまでもそんな所にいないでこっちに来いよ。ほら、オレがコンビニで買ってきたお菓子やるから」

魁が袋をガサガサと左右に振って、空夜を呼ぶ。すぐく気に入らないが、降りないといつまでも呼び続けられそうだ。空夜はひよいと階段を使わずに飛び降りて、三角形の中に入った。これで四角形

だ。

「どこまでいったの」

「え？ 駅前のコンビニ」

魁が素直に言う。空夜が溜息を吐く。

「そうじゃなくて」

「今は、殺された忍達の生い立ちを探ってるところよ。何故殺されたのか。殺される理由があったのかを見つげるためにね」

はい、と空夜に紙を渡す。

「うちの忍の情報よ。調べさせたの」

「ふうん」

“草津大河、苗木之下出身。十二歳の時に火事で両親を失って以来、十歳違いの妹、草津真理奈と共に修行を積む。

性格はいたって真面目、几帳面。修行時代は優等生として通っている。後にその能力を認められ、火之基の忍となる。仕事は重松鉄平とよく組んでいた。

重松鉄平、苗木之下出身。父親は病死、母は過労死。しばらくは親戚の家に預けられていたが、十五歳の時に十歳違いの弟、重松鉄太と共に苗木之下に入門。

同期の草津大河とは苗木之下時代から仲が良かった。

補足。二人の弟妹はいま苗木之下で修行中。”

空夜が紙を志保に戻す。

「この二人は特に問題を起こすような忍じゃなかったらしいわ。殺される理由が見つからない」

「らしい？」

「下の方の忍だったから、よく知らないの」

気まずそうに言う志保だったが、空夜は納得するように声を出し

た。

「僕もそうだよ。三忍衆以外、全然知らないから」

「それって駄目なんじゃねえの……？」

次に魁から紙を渡される。

“佐渡朱美。両親が共に苗木之下出身の鍔木の忍だったため、自然とこの世界に入る。幼少の頃は苗木之下で過ごすのが、すぐに鍔木に入り、主に武具の受け渡しを行っていた。

若いながらも優秀で、武具こそ満足に作れないものの、どっかのピアスだらけの赤メツシユより絶対に役にたつてたと思う。あーあ、惜しい人材を失ったなー。

と、完璧に調べ上げたわけだけど。

これくらい自分で調べよな。バーカ、バーカ！

もう一生帰って来んな！ お前の所為で、俺等までお頭に怒られたんだからな！

帰ってきたら土下座しろ。そして死ぬ。

シユウ様より

こんな雑用、こつちに回さないでよね。バーカ、バーカ！

魁なんか死んじやえー、花火のように散れー！

そして鍔木の跡取りの座は終と都月ちゃんのモノ！

あ、おみやげヨロシク。

都月ちゃんより”

読み終えて、空夜から紙が戻される。

「……誰、この手紙を書いた二人」

最後の二つのメツセージが気になって、魁に尋ねる。ものすごく

複雑な顔をしている。

「桐生で言うところの、三忍衆みたいな奴等だよ。鰐木の双葉って呼ばれていて、思いつきり口が悪い双子」

口が悪いのは読めば分かる。

「嫌われてるの？」

グサツと音が鳴った。魁が相当ダメージを受けていた。どうやら凶星らしい。

「ああ、うん。まあそんなところ。オレと同年なんだけど、どうも気に食わないみたいで…」

「駄目ね。次期頭領たる者、駒の信頼を得ていないと」

志保の駄目出しで、さらに傷口を抉ったようだった。そんな魁を放って置いて、朝飛は話を続ける。

「それから、志保のお兄さんの志斗さん。最後に薬樹の忍、相津清忠さん」

「薬樹の情報はまだ手に入っていないわね」

朝飛が手前のポツキーを取り出しながら、首を振った。

「それなら大丈夫だよ。今日の夕方、波奈さんが来るから」

「「なみなさん？」」

声の揃った魁と志保。空夜は興味無いのか、魁の袋からオレオを箱ごと取って、一人で食べている。

「そう。薬樹現当主、薬樹波奈。綺麗な人だよ」

9・1週間 The different world (後書き)

罇木の双葉

遠藤 終「えんどう しゅう」

遠藤 都月「えんどう つづぎ」

五月五日生まれ、牡牛座。

好きなこと、魁いじめ。

嫌いもの、魁。

10・薬樹忍 Mental Stabilizer

「綺麗な人かー。楽しみだなー」

まだ見ぬ薬樹波奈に思いを馳せる魁。志保も興味津津なのか、朝飛を問いつめていた。

「どんな人よ？ 何歳くらい？」

「二十代前半つてところかな。いつも着物を着てるよ。昔は関西に住んでたらしくて、関西弁を使うんだ。頭目なのに、下っ端がやるような仕事もすすんでする人だよ」

朝飛が波奈の説明をしていると、がた、と玄関が開いた音がした。「邪魔するぞー！ 朝飛は居ぬのかー？」

階下から四日市瑠璃の声がした。

「居ますよー。二階です」

ドアを開けて叫ぶと、ちょうど反対方向の窓から瑠璃が侵入してきた。

「なんだ、こんな所に寄って集って」

「なんでそんな所から侵入してくんだよ！？」

魁がかなりびっくりしたようだ。ちゃっかり志保の後ろに回っている。志保は別段驚いた様子もなく、空夜からオレオを受け取っていた。

「今日はどうしたんですか、瑠璃さん。貴女宛の任務はありませんよ？ それから何度も言いますが、二階へ来るときは階段を使わないですよ」

「分かっている」

「分かっています」

「あーあー、がみがみガミガミうっさいのお。お前は僕の母親か！ めちゃくちゃ理不尽だった。慣れているのか、朝飛は何も文句を言わずにはいいい、と受け流す。

「っと、忘れるところじゃった。今日はこれを渡そうと思うてな。

お隣さんからお裾分けしてもらったジャガイモなのだが、僕は芋類が苦手だな。だからお裾分けのお裾分けじゃ」

手渡されたスーパールの袋にころころと入ったジャガイモを見て、朝飛は嬉しそうに礼を言う。

「わあ、こんなにたくさん。いいんですか？　ありがとうございます。今日はこれを使おう」

「本当は袖希ん所にも分けてやろうと思ってたんじゃが、アイツのアパートに行ったら留守だな。今日はアイツ、何か仕事入ってたかの？」

相変わらず口調と合わない可愛らしい表情で首を傾げる。

「いえ…今日はお休みだったと思いますけど……」

「居るよ」

首を傾げる二人に、空夜が天井を指差した。天井裏に居るのだからか。朝飛が動く前に、魁が壁に立てかけてあった朝飛の竹刀を持って、上をつついた。

「うわ！　ちょ、何すんだこの穴だらけ人間！」

…… 袖希の声がした。瑠璃が魁に「もっとやれ！」と命令した。

「おお、面白え。今まで散々馬鹿にしてくれたお返しだ！」

子供のようにとんとんと竹刀を上突き上げる魁。どうやら袖希が魁を嫌っているように、魁も袖希のことをよく思っていないらしい。仕返しだと言わんばかりに攻撃する。が。

「何すんだコノヤロー！」

「おわっ！」

いつの間にか降りてきた袖希の鉄拳を喰らう。今度は志保がおかしそうに笑う。

「あっははは！　やられてやんのー」

「無様だね」

空夜も後打をかけるが、魁の耳には入っていない。

「袖希！　てめえ、一発殴らせろ！」

「やだね！ てめえこそ、もう一発殴らせろ！ あと、呼び捨てすんなピアス！」

「ピアスじゃねえ！ 魁だ！」

「うっさい、このはまぐり！」

「それは貝だ！ 違うから！」

間に割って入って、朝飛が二人の喧嘩を止める。

「はいはい」

両腕をあげて、

「喧嘩…両成敗だー」

勢いよく振り翳して、

「よー！」

二人の頭にクリーンヒットした。志保がお見事、と手を叩いている。瑠璃と空夜は悶絶して床を転げ回る二人を見て呆れていた。これが自分と同じ忍か？

「……さて、用も済んだし、僕は帰るとするか」

「もう帰るの？ ゆっくりしていけばいいのに」

引き留める空夜に、首を横に振る。

「いや、いい。今日は薬の渡し日であろう？ 薬樹の頭目は、どうも苦手じゃ」

逃げるようにして、また窓から帰っていく瑠璃。それを見送ろう

と空夜が窓へと近付いて、

「あ……兄さん」

兄を呼んだ。

「ごめんください。薬樹です」

外から鈴を転がしたように可愛らしい声が聞こえた。

「まじで綺麗だなー……」

廊下の角、一番下にいる魁が感嘆の声をあげる。

「和服美人ね……大和撫子って感じ？」

魁の上に乗つかかるようにして覗く志保も呟く。

「……なんで隠れてんの？」

一番上、空夜も一緒になって隠れながら聞いた。

「いや、なんとなく」

三人は会話を中断して、玄関先で風呂敷を広げる波奈をもう一度見やった。

「いつもご苦勞様です」

朝飛が一礼する。それに対し柔らかに笑いかけて、波奈は薬を小分けした瓶や袋を差し出す。

「いえいえ。お得意様やからねえ、桐生さんちは。こちらが曾根崎君のお使いになりはる針銃の薬です……」

「ありがとうございます」

曾根崎針銃の使用者 柚希が瓶を瓶を受け取る。透明のジェル状になったものが詰まっていた。

「それと、こちらがこの前注文してくれはった、自白剤の追加……」
朝飛がそれを受け取る。先週、魁に使ったのを最後に、無くなっ
てしまったのだ。

「それからいつもの傷薬、鎮痛剤、痺れ薬……」
次々と渡される包み。朝飛はそれらを丁寧に受け取って、波奈に

一つ一つ礼を言う。そして一番最後、嚴重に包まれた袋を取り出したのを見て、角で隠れて見ていた空夜が「あ」と声を出した。

「最後に、いつもの空夜君のお薬です。効き目がのうなってきたゆうてはりましたでしょ？　せやから、また新しく調合し直しましたさかい……」

波奈がおつとりと喋っている途中で、空夜がその袋を奪い取った。「空夜君。そこに居はったん？」

「……………」

思わず飛び出してしまったことと、その上乱暴に袋を取り上げってしまったことに後悔したのか、少し気まずそうにする。

「空夜？　ちゃんとお礼言いなよ」

朝飛が注意するのも聞かず、空夜は慌てて二階の部屋へと戻っていく。それを志保と魁が不思議そうに見ていた。

「すいません、波奈さん」

「別に構いませんよ。難しい年頃になりはったんやねえ……うちもああいう頃があつて、よう周りを困らせとりました……」

ふふ、と懐かしそうに笑う。朝飛もまた、つられるようにして笑う。

和やかな空気が流れるそこだったが、志保がしびれを切らして飛び出た。

「ちよつと朝飛！　さつさと相津清忠のことを聞きなさいよ！」

「あ、そうだった」

この馬鹿！　と朝飛の頭を叩く志保を見て、波奈が少し驚いたように言う。

「あら、火之基さんとお嬢さんやありませんの。こうしてお会いするのは初めてやねえ……」

「ちよつと事情があります……波奈さん。この間お亡くなりになった、薬樹の忍の相津清忠さんについてお尋ねしたいんですけど……」

朝飛が本題に入るのを見て、魁も角から出てきた。

「オレ達、忍殺しの犯人を捜してるんすよ。協力してくれませんか」

「？」

「あらあら、次は鰐木さんとこの……。えらい大事になってはりますなあ……。ええと、相津清忠さん？ 苗木之下出身で、八年程前から、うちに仕えておりましたよって。別段優秀という訳でも無し、かといって足手纏いにもならへん普通の忍でしたよ。ただ、惨い殺され方されたみたいで……」

残念そうに語る波奈。やはり相津清忠も、殺される理由の無い忍だと言うことが分かった。これで犯人の動機は分ならず終いか、と魁は落胆の意を示した。

それを見て、波奈が申し訳なさそうに謝る。

「なんや、あんまり協力できひんかったみたいで……」

「そんなことないです。わざわざありがとうございます」

魁の代わりに志保が言つて、波奈はふんわり微笑んだ。

「ほな、うちはそろそろ帰りますね。夕飯の支度せなあかんさかい

……」

二階。先程まで朝飛達が集まって騒いでいたその部屋は、今は一人しか居なかった。二段ベッドの上段で寝そべった空夜が、先程波奈から奪い取った袋を開ける。そこにはたくさんの錠剤が入っていた。

それを何度か見て、空夜は溜息を付く。
薬を包んでいた袋の隅には小さな字でこう書かれていた。

“精神安定剤”

「まだ、これが必要なのかな……」
ぼつりと呟く。そしてその袋を丸めて、ゴミ箱へと投げた。

10・薬樹忍 Mental Stabilizer (後書き)

弟は眩く。

その白兔のように真白な粒へと。

11・恐怖 The object of fear

「いつつも思ってたんだけどさー」

波奈と志保が家路についた桐生家では、台所でジャガイモの皮を剥く朝飛へと魁が質問をする。包丁を器用に使い、次々と丸裸にされていくジャガイモ達は、どうやら今晚のおかずになるようだ。瑠璃にもらったジャガイモはまだたくさん残っているらしく、袋は変わらずに膨らんだままだった。

「なにが？」

「こんなでつかい家に、二人しか住んでねえの？」

朝飛と空夜の二人でさ、と言葉を付け加える。魁がこの家に泊まり込んでから、今日で丁度一週間。任務がある日は桐生の三忍衆や、他の忍達が報告へと立ち寄りに来ていたが、日常生活に置いてこの兄弟以外を見かけたことがなかった。

「いまは仕事で居ないけど、いつもは父さんも居るよ。じいちゃんはいま京都へ旅行中。今月は帰ってこない予定」

「へえん……じゃ、イリアさんは？」

誰かから聞いたのだろう。もしかすると例の双葉を使って調べたのかも知れない。魁は教えられてもいない兄弟の母親の名前を口にした。

とんとんとリズム良く切られていくジャガイモ。千切りになったものから順に水の入ったボウルへと入れられていく。朝飛は手を止めることなく会話を続けた。

「母さん？ 居ないよ」

「居ない……って、死んだのか？」

どうやらイリア不在の情報は手に入れていなかったらしい。魁は意表を突かれたような顔をして朝飛の後ろ姿を見ていた。

とん。包丁の音が止んだのを不思議に思ったのも束の間、先程部屋に引きこもった筈の空夜が台所へと来ていた。これには滞在一週

間目になる魁もまだ慣れていないようで、いつも突然ふらりと現れる空夜に毎度飽きもせず驚いていた。

「びっ……っくりした……！」

「いちいち驚くの、やめてくれない？」

ばさばさつと大量のノートや教科書を机の上にはらまいて、空夜は先程の魁の質問に答えた。

「母さんなら、僕が小さい頃に出ていったよ」

「出ていった？ 家を？」

「……そうだよ」

また包丁の動きを再開させて朝飛が続きを担う。空夜は興味なさそうにぺらぺらと教科書を捲り始めた。

「父さん、仕事人間だったからね。いまだって、そうだよ。父さんが仕事に出て行って今日で十日目。なのに一度も連絡が無いんだ。それくらい、仕事が大事な人なんだよ」

朝飛の使う包丁に、少し力が入られた気がした。少なくとも常に刃や刀とともにあった生活をしてきた魁には、そう聞こえた気がした。

「信頼されてるんだろ」

「どうだか………あの人、『いつてきます』を言わないんだ」

だからいつ仕事に行ったのか分からない。気が付いたら、家に居ないのだ。宛先も居場所も何も分からない時だっただけだ。

朝飛はボウルの中にあるジャガイモの水気をよく切ってフライパンへと入れた。まるでピザの生地のようにそれを平たく伸ばして、色々な具を乗せ始める。水分がぱちぱちと音を立てて消えていくフライパンの中を見つめながら朝飛はまた黙った。

「そういえば家事は全部、朝飛がこなしてるよな。空夜はやらねえの？」

少し空気が重くなってきたのを感じ、魁は慌てて話の方向を父親から変えてみる。どうやらこの兄弟に父親の話は禁句らしい。

「僕だってそのくらいやってるよ。洗濯物をたたんだり、玄関を掃

いたり」

「そりゃただのお手伝いだろ。小学生でもやってんぞ。料理とかは？」

魁の丁度向かい側で、教科書の問をノートへと写しだしていく空夜。学校へは行かなくとも、勉強はしているらしい。ペンを持つ手はすらすらと止まることなく答えを出していく。案外賢いのかも知れない。

「料理、するよ。コンビニ弁当温めたり、即席麺にお湯入れたり」

「それを料理と呼ぶのはおこがましい気がするぞ？ ほら、朝飛みたいな家庭料理だよ」

顎で指し示す方向には、先程の生地の上にチーズをトッピングして、ピザ風に仕上げている朝飛がいる。それをどの皿に入れば見栄えが良いかを考えている朝飛は、最早主婦だった。料理しているときが一番楽しそうだ。

「あれは兄さんがやるから良いんだよ」

「ちよつとは協力しろよ……」

「魁には関係無いじゃん」

関係無い。そう言われてしまえば、そこまでなのだが。空夜は魁の後ろにある台所を確認して、出したばかりの教科書達を仕舞い始めた。

「別にいいんだよ」

その台詞を言ったのは朝飛だった。皿へと盛りつけられた料理達を次々と手際よく机の上へ置いていく。空夜が片付けた場所から、取り皿やコップを置いて、夕飯のセッティングを終える。皿の上のそれは、溶けたチーズが食欲をそそる香りをたたせていた。

空夜は邪魔にならないようにノート達を自分の隣に置き、魁を見た。解せない顔をしている。

「空夜はいいんだよ」

「なんで？ 料理くらいしとかねえと、いざっていうときに困るんじゃないね？」

例えば朝飛が居ないときとか。そう言ってみるが、それでも頑なに朝飛は同じ言葉を繰り返す。それからチラ、と空夜の方を盗み見た。魁にはもちろんばれていたが。溜息混じりに弟は言った。

「『やらない』んじゃなくって、『やれない』んだ。僕、無理なんだよ。包丁とか」

疑問符号を飛ばす魁に、朝飛がもう少し詳しく説明する。

「先端恐怖症って、知ってる？ 空夜はそれなんだ。軽度のね」

「あー、あの刃物とか、鋭利なものに対して恐怖心を抱くってやつ？」

「そう。軽いものだから、先端が尖ってるくらいだったり、目端に写るくらいは大丈夫なんだ。けど、刃物を自分で持ったり、近すぎると駄目なんだ」

なるほど。魁は先程の波奈が来たことを思い出す。あの薬は、きつと安定剤か何かだったのだろう。

刃物が持てないから、料理が『出来ない』。

しかしそれは、忍にしてみれば致命的ではないのか、と魁は思う。危険の無い任務ばかりではない。時には自分を守るための刃も必要なのだ。

「食べないのかよ、魁」

ぼーっとしている魁を見て、皿を下げる真似をする朝飛。

「えー!? 食う食う! 食うから!」

ぼっ、と皿を取り返し、ピザ風ジャガイモへと箸を伸ばす。隣では空夜がトッピングされていたベーコンを避けていた。食べれないらしい。

「空夜、好き嫌いはダメだよ」

やはりというか、朝飛に怒られている。空夜は聞こえないふりをしてテレビのリモコンを取った。おもむろに電源をつけると、丁度地方ニュースが流れていた。どうやら畑ではなく道路から生えた根性大根のニュースらしい。朝飛は「へー…」と感心した様子でそれに見入っていた。

朝飛がテレビへ気を取られているのを見て、魁は無言で空夜の皿から取り除かれたベークンを自分の皿へと移す。それを見て最初は何もしなかった空夜だったが、魁と朝飛を交互に見て、自分もベークンを全部魁の皿へと移動させた。

ここ一週間で出来上がった、『嫌いな物を協力して食べよう同盟』である。朝飛は栄養に気を配って調理しているため、少しでも何かを残すと後が五月蠅いのだ。それを解消すべく、魁と空夜はそれぞれの嫌いな食べ物を代わりに食べていた。

「あ……」

朝飛が何かを言った。その声に慌てる二人。

「どうした?」「なに?」

朝飛は何も言わない。その代わりに、テレビを指差した。

『……斉藤恭介さん、三十二歳。体中に刃物で傷つけられた痕があり、死因は出血多量によるもの。警察は他殺・現在捜査中の連続通り魔との関連性を調べる模様です』

「……恭介さん……?」

魁が箸を落とした。それとほぼ同時に空夜も声を発する。

「鰐木の忍の人だ……」

面識のあった人が、ブラウン管の中に映っている。それも、最悪な事態で。

「また……」

朝飛もやるせない表情でそれを見ていた。

11・恐怖 The object of fear (後書き)

加害者も被害者も犠牲者も、皆等しく。

12・嘘 Lie and morning sun

鰐木の忍だった斉藤恭介が死んだ。魁はそのニュースをただ呆然と見ていた。

ブラウン管の中から聞こえる音は、既にただの雑音になって自分の耳へと入っている。もう何の意味もなさない。

恭介との面識は、ほとんど無かった。擦れ違えば、挨拶をする程度。それでも、シヨックは大きかった。また新たな犠牲者が出てしまったのだ。

「魁……大丈夫か？」

朝飛から声を掛けられて、やっと魁は我に返った。

「え？ あ、おう。大丈夫……大丈夫だ」

まるで自己暗示のように呟く魁を見て、空夜はテレビの電源を消した。

彼なりの配慮だったのだろうか。相変わらず無関心を装って夕飯を咀嚼していた。魁はそれを素直に有り難いと感じた。自分で思っている以上に、やはり衝撃は大きかったらしい。あれ以上ニュースを見ていたら、きつと訳の分からない怒りに震えていた。

自分の不甲斐なさや、無力さに。

「……くそっ……」

一体なんのために、自分は今ここに居るんだ。この忍殺しの犯人を捕まえるためじゃなかったのか。

結局、何も変わっていない。

「焦っても仕方ないよ。いま出来ることをやろう」

朝飛が宥めるように言う。言いたいことは分かる。焦れば焦るほど、事態は悪くなってしまうものなのだ。

「分かってるさ……でも」

魁はそれ以上言わなかった。朝飛も空夜も、三人が三人、一様に黙り込む。さっきテレビを消してしまった所為で、無音で居心地の

悪い空間が出来てしまった。

「兄さん」

そんな重苦しい雰囲気を変えるかのように、コップを持ちながら空夜が言う。

「え、なに？ 空夜」

慌てて朝飛が返事をした。

「明日、学校行くね」

「うん……………ええっ!？」

あっさりと言われてしまったため、危うく聞き流すところだった。朝飛が慌てて聞き直す。

「行くって学校？ 学校に？ 行くの!？」

「……………そんなに驚くことかよ？」

普段の朝飛からは考えられないくらいに慌てている様子を見て、魁が不思議そうに首を傾げる。空夜は見るからに中学生。学校へ行くのは当たり前だろう。何をそこまで慌てる必要があるのか。

「お、驚くよ！ だってここ最近、ろくに通ってなかったから……………」

「あー、そっぴやお前、毎日家で……………してたもんな。不登校だったんだ？」

空夜が毎日……………していたのを知っているのは、もちろん彼があの日からずっと桐生家に居座っているからである。すでに桐生家の居候と化していた。

柚希が「早くあのピアス野郎を引き取りに来てくれませんかね」と、待ち望んでいる鰐木の追っ手は、未だやって来ない。

「……………そうだよ。ごちそうさま」

一体どちらの質問に対する『そうだよ』なのか分からないまま、言いたいことだけをさっさとと言って、空夜は食べ終わった食器を流し台へと持っていく。

「あ。あとで宿題するから、部屋に入ってこないでね」
どうやら本気で学校へ行くようだった。朝飛が信じられないと言いたげな顔で弟の後ろ姿を見ていた。

* * *

その夜、誰もが寝静まる夜中に魁は、桐生家の居間から電話を掛けていた。大きな庭に面した部屋で、兄弟と一緒に食事をしている部屋だ。数日前から借りている寝室のちょうど隣にあった。

受話器に耳を澄ませる魁。電話を掛けるのは、もうかれこれ3回目だ。深夜の所為で、目当ての人物が出ないのだ。

6回目のコール、やっと向こうの受話器があがる音がした。

『……むおーしもーし……？ 誰……ねむ……』

「あ、もしもし？ 終？」

魁の声に反応して、あんなにも眠たそうだった声が一気に跳ね上がる。

『あつ、その声は魁！ てんめー、よくものこのこ電話なんか掛けてこられたな！ お前が脱走なんてするから、俺等がお頭に怒られたんだぞ！ 死ぬ！ 苦しみにのたうち回りながら死ぬ！』

「あー悪い悪い。まじで悪いと思ってる。反省してる。でさー、頼みたいことがあるんだけどさー」

『……っかー！ 何その態度！？ マジ許せないんですけど！？ マジきもいんですけど！？ てめえ、絶対に反省してねーだろ！』

もう怒ったからな、もうキレたからな！ お頭が選んだ次期頭領だから今までは大目に見てきたけど、今回はほんつともう許せねえ！
都月も相当怒ってたぞ！」

電話の相手 遠藤終は息を荒くして捲し立てるように魁へと突っかかってくる。それもそうだ。鰐木の双葉である彼等の使命は、次期頭領である魁の観察、もとい監視。それをままと抜けられた二人は、当然の如く鰐木の当主に散々説教を聞かされていた。

そんな終に対して、魁はいはいだの、うんうんだの、適当な相槌を打ってこの場をやり過ぎそうとしている。さつさと終わらせたのが見え見えだ。その態度は、終の怒りをさらに増大させた。火に油だった。

「俺の話を聞けい！ とりあえず正座だ正座！ 正座しろ！」
受話器の向こう側から見える訳が無いのに、そんなことを言うてる。魁は正座する代わりにあぐらをかいて続きを促す。

「へいへい、しましたよ」

「そもそもだ！ なんでこんなにも鰐木家をあける！？ お頭も心配を通り越して呆れてるぞ！ もう帰ってきてても良い頃だろ……っつーかお前、いま何処に居るんだ？」

「どこって……まさかまだバレていなかったのか？」
「バレてないからこうして俺様が聞いてるんだ、この馬鹿！」

言おうか言わないか迷った挙げ句、結局魁は言うことにした。いつまでも心配かけていられない。

「……桐生家だよ」

数秒の沈黙。その後、受話器越しにでさえ騒音と間違えそうなほどの叫び声。

「桐生家だー！？ はあ？ 何それマジ有り得ねえ！ だって俺と都月、一番最初に桐生家に連絡取ったんだぜ？ お前が桐生朝飛に会いに行くっつーからよ！ その時に「鰐木の者は一人も来てません」って言われたんだぜ！？ なんだソレ、意味分かんねえ！」
その情報は、魁にも意味が分からなかった。何故なら、確かに自

分は桐生家に居候しているのだから。

「何だよソレ。誰に聞いたんだ？」

「桐生朝飛本人にだよ！ 何だよアイツ、おっとりのふりして実は腹黒かよ！ 俺等があの後どれだけお頭に説教されたことか……やべ、涙が……」

「終が泣きそうになつてるとか、説教がどれだけ長かったとか、今はどうでもいい。魁にとつて、今一番引つかかるのは、その台詞だ。なんで朝飛は、嘘なんか吐いたんだ？」

「そんなの俺が知るか。とつと帰つてこい馬鹿。大体、お前の目的の“桐生朝飛の疑いを晴らす”つてのはまだ達成出来てねーのか？」

「出来たよつな、出来てないよつな……」

「はあ？」

「なんか、納得いかねえんだよな。火之基頭領が来てよ、無理矢理終わらせた感があるんだよな。まだまだアイツは何かを隠してる…… よつな気がする。勘だけど」

「最後の方は少し声音が小さくなって、ぼそぼそとよく分からない呟きになってしまった。受話器の向こうで、聞こえない！ と終が怒っている。それをうち消すかのように、わざと咳払いをして魁は続ける。」

「ともかくだ。オレはまだ帰らない。つーか帰れない。火之基の末っ子とも犯人探しを約束しちまつたし」

「いらん約束をするなー！」

「受話器越しに叫ぶな！ これからはちゃんと連絡するか、ら……」

……

「語尾の方が、最後まで言えなかった。魁が左側を凝視する。あの庭で、何かが動いた気がした。」

「おい、魁？」

「わりの、また今度電話する。都月によろしくな」

「はあ！？ お前、頼みたいことがあるとか言つて……おいコラ！」

人の話を、」

まだ終が何かを言っていたが、お構いなしにそれを切った。そして出来るだけ気配を消して、窓へと近づく。窓は直接庭へ降りられるようになっていいるから、わざわざ玄関にまわる必要もない。

そつと窓から外の様子を伺う。何も見えない。やはり、魁の気のせいだったのだろうか。

窓越しでは分からないと、魁が静かに窓を開け、頭だけを庭へと覗かせる。時々吹く夜風が涼しい。見渡しても、侵入者など見当たらない。

きつと、気のせいだったのだろう。

魁がそう思った瞬間、何か視線の中で絡まった。

眼を凝らして違和感の感じた方を見つめれば、驚いたことにそれほど魁から離れていない場所、そこに確かに人が居た。あまりにも周りと同化しすぎて、見逃していた。

かの人物は、ぼんやりと夜空を見つめている。

「……？」

段々とはつきりとしてくるソレに、魁は思わずその人物の名を呟いた。

「あさ、ひ……」

右手に狐の化物を象った面を、腰には疾風を下げた朝飛が、立っていた。

いや、正確に朝飛かどうかなんて分からない。夜の所為で、はつきりとは見えていない。だが、あの色素の薄い髪は朝飛に間違い無かった。

何故こんな真夜中に、あんなモノをもって朝飛が立っているのかは分からないが、侵入者では無かったことに安心して、魁は朝飛に近付こうと思った。

思った、だけで終わった。

実際に魁は近付くことをしなかった。否、出来なかった。

どこか様子がおかしいのだ。朝飛は虚ろに、ずっと夜空を見上げている。

よく眼を凝らして見れば、彼の口元はずっと動いていて、誰も居ないのにひたすら何かを喋っているのだ。

魁は出来るだけ息を殺し、上半身を外へと出す。人の声は疎か、虫の音さえも聞こえない真夜中だ。それだけで十二分に朝飛の呟きが聞いて取れた。

「……は間違つてなんかいない僕は間違つてなんかいない僕は……」
狂ったように、同じ言葉を単調に呟いていた。

何かに怯えているのか、動揺しているのか。握りしめられた狐の面が、微かに震えているような気さえする。

何も言わず、魁は部屋へと戻った。窓は、閉められない。音がしてしまふ。

それよりも。今の朝飛は、一体何なんだ？

魁はかぶりをふる。分からない。分からないが、自分は声を掛けられなかった。少し近寄っただけでも分かる。殺気がそこにあった。「何なんだ、一体……」

最後に見た狐の面に、赤い何かが付いていたことだけが、目に焼き付いていた。

桐生の忍 影送り組曲

嘘にまみれる虚構の世界。

12・嘘 Lie and Morning sun (後書き)

13・朝餉 I did not hear it

立ち尽くす朝飛の目の前で、少年が泣いている。
嗚咽もあげずに、ただ、はらはらと涙を流して。

『どうして泣いてるの？』

声を掛ければ、いま泣いていることに気付いたのか、慌てて服の袖で涙を拭う。無理矢理擦った所為で、目の周りは少し赤くなっていた。痛そうだな、と思って朝飛が手を伸ばしたが、少年はそれ拒否するかのように避けた。

『……泣いてなんかない』

『じゃあ、どうしてそんなに悲しそうなの？』

そう尋ねると、少年は哀しみと悔しさの混じった表情でこちらを見て、口を動かす。必死に、必死になって、伝える。最後の方は叫んでいるみたいだった。

少年の言葉を最後まで聞いて、朝飛は呟くように言う。

『僕と同じだね……』

そう言うのと、泣いていた少年は朝飛に背を向けて走り出した。突然のことで、呼び止めることが出来なかった。

追いかけてよととして慌てて朝飛は走るけれど、いつものように走れない。

いつもなら、あんな子供、すぐに追いつけるのに。誰よりも速く、走れるのに。

動かしにくい足を必死で走らせていくと、過呼吸のようにどんどんと息だけが荒くなっていく。苦しい。苦しくて、辛い。

それでも少年の背中中は小さくなっていくだけ。朝飛は懇願するよ
うに、叫んだ。

『待って！』

少年が、振り返った気がした。

* * *

「……………あれ？」

「おはよう。もう朝だよ」

目の前に空夜が、居た。混乱する頭を無理矢理働かせてやっと理解する。そうだ、夢だったんだ。何度か頭を振って眠気を晴らす。少し頭痛がした。

「兄さん、腕」

「へ？」

言われてみれば、自分の右手は空夜の左腕をしつかりと握っている。どうやら夢の中で伸ばした手が、目の前にいた空夜を掴んでしまっていたようだ。

「あ、ごめん。寝ぼけてた」

「誰に待って欲しかったのさ？」

「え？」

最初、言っている意味が分からなかったが、すぐにぴんときた。どうやら寝言まで言っていたようだ。

「気にしないでいいよ、ただの夢だから」

「そう？」

別にどうでもいいんだけど、と付け加えて空夜は部屋をでる。その後ろ姿は、久しぶりを見る制服姿だった。

「いったただつきまーす」

「……いただきます」

魁が元気良く声をあげ、それに続くように空夜が手を合わせる。この数日間で見慣れた光景となっていた。魁には本当に驚かされる。あつという間にこの家の景色に馴染んでしまったのだから。

あの桃実や瑠璃でさえ、魁の姿が見つからないときは「どこに行つたんだろっ」と心配するほどに。

朝飛がそんなことを思いながら味噌汁の入った器を並べていると、イレギュラーの声があった。

「朝飛様　！　何かお手伝いすることはございませんか？」

朝つぱらから、叫び声が頭に痛い。

曾根崎柚希がちゃっかり朝の団らんに混じっていた。

「いいから座つてなよ」

そう言われて、柚希は朝飛がそれぞれの手前に茶碗を並べていくのを大人しく見ていた。

「げ！　なんで柚希がここにいるんだよ!？」

魁がいかに嫌そうな声をあげる。それに対して、同じくらい嫌そうに顔を歪めて柚希が反論した。

「それはこっちの台詞です、鰐木はまぐり!」

「ハマグリ違う！　魁だっつーの!」

「うるっさい、このしじみ！　お前、他忍の癖にまだ桐生家に居座つてたのか！　羨ましい!」

「羨ましいんかい!」

「……五月蠅い」

最後の、空夜による一言で桐生家の朝の静寂は保たれた。

いつもなら真っ先に叱る当の朝飛は、ぼーっとテレビを見ながら白飯を咀嚼している。彼がよく見ている星占いはまだのようで、夜

中の交通事故や芸能人の婚約といった、下らないニュースばかりがブラウン管の中で光っていた。

「おい朝飛」

そんな彼に、魁が声を掛ける。

「え？」

「だから、なんで柚希がここに居るんだよ！」

「ああ……ゆずきくん、放って置くと、ろくな食事しないから。時々一緒に食べてるんだよ……うん」

ぼんやりと答えて、またテレビへと視線を戻す。交通事故で死んでしまった被害者は、どうやら無免許だったようだ。

「ろくな食事って……おい柚希。お前、普段は何食べてるんだよ？」

「即席麺とか。時間の無いときは、カロリーメイトとかゼリーとか……って何で俺の食事内容をお前に言わなきゃならないんだよ！」

けるつと答えるその食事内容に、軽く眩暈がした。と、同時に疑問が浮かぶ。柚希に家族はいないのだろうか？

もしかしたら、同じ苗木之下出身なのかもしれない。居ない家族の話が聞かれる辛さを、魁は痛いほどに知っている。だから柚希に聞くことはしなかった。

代わりに、違う疑問を朝飛にぶつける。

「そついえば朝飛、昨日の夜中、庭で何してたんだよ」

「え……？」

朝飛の箸が止まる。テレビからやっと目を離し、魁を凝視していた。

「昨日の夜中。庭に居たろ？」

魁も、朝飛を凝視する。一体昨日の朝飛は何だったのか。何か、自分に隠していることと関連があるのでは無いか。

朝飛が何か言おうとしているが、口を開くたびに、言い切れずに閉じていた。後ろでは星占いが始まっていた。

少しの沈黙があつて、声が発せられた。

「仕事に決まつてるだろ、バーカ。馬鹿巻き貝」

朝飛の代わりに答えたのは、袖希だった。

「朝飛様、昨日は夜に仕事が入っていましたよな？」

「え、あ……うん。仕事に行ってたんだ。魁、庭に居たの？」

「おう。居たって言うか、見てたっていうか。なんかお前、声かけ辛かったからさ」

味噌汁を啜って、魁は興味を失ったのか、星占いの続きを見ていた。獅子座は6位という微妙なランクインを果たしていた。

「ごちそうさま」

星占いが丁度終わった時、音も立てずに空夜が立った。時計を見ればもう八時。健全な中学生は登校しなければならぬ時間である。空夜は用意していたカバンを提げて、くるっと反対方向を向く。

「じゃ、行ってきます」

「いつてらっしゃい」

朝飛がひらひらと片手を振る。やがて、扉の閉まる音がした。

「で、ゆずきくんもいつてらっしゃい」

「うわ、もう八時！？ ち、遅刻してしまいます！」

どうやら朝から任務が入っていたらしい。慌ててご飯を詰め込んで、袖希は朝ご飯の礼を言って窓から出ていった。

「……三忍衆は窓から入るのが流行ってるんのか？」

「ドアを使い、とは言ってるんだけどね」

かちやかちやと片づけを始めながら、朝飛は溜息混じりに言った。誰も言うことを聞かないらしい。

まあ、袖希に至っては天井裏に居るくらいだ。ドアなんてあっても無くても一緒だろう。

「そういえば、お前は学校とか行かねーの？ ずっと家に居るけど学校、辞めちゃった」

さらっと言われた。少し驚いている魁を無視して、朝飛が続ける。

「私立だったから、結構勉強に厳しくてさ。ついていけなかったよ」「ふうん？ 空夜はお前と同じ所に行かなかったんだ。公立だったよ」

「？」

「うん。僕と同じ所は嫌なんだってさ」

「どこの私立？」

「普通の私立だよ。榊寺学園っていう……」

「さ、さかきでら……」

普通じゃなかった。滅茶苦茶有名所だった。魁がぶんぶんと首を振っているのを見て、朝飛はまた「普通だよ」とだけ言った。あまり学歴のことを言われるのは好きではないらしい。

「そういう魁は学校……ああ、苗木之下で大抵のことは学ぶんだっけ？」

「そーゆーこと。まあ義務教育までだけだな。行きたい奴は高校に進学するけど、オレは行ってねー」

小学校の勉強が出来たら大抵なんとななるんだよ、と魁が言うのを聞いて、朝飛は流し台の方へ行く。

水の出る音を背後で聞きながら、あくまでテレビに視線を向けたまま魁は核心に迫った。

「なあ、朝飛」

「なんだよ。洗い物してるときに話し掛けられると、聞こえにくい」
「なにが『間違っていない』んだ？」

一瞬、食器の合わさる音が途絶えた。が、すぐに再開する。

「……ごめん、聞こえなかった」

「そっか。ならいいんだ。大したことじゃねえし。あ、電話借りるなー」

「どうぞ」

これで、確定した。勘ではない。確実に朝飛は何かを隠している。魁は、慣れない手つきで番号を押す。コール二回目という速さで、電話の相手は出た。

『もしもし』

「志保か？ オレだ」

『魁じゃない。なによ、朝っぱらから』

「空夜が学校に行った」

それだけで用件は伝わったようで、受話器の向こうでは不機嫌そう
な声が聞こえた。

『尾行しろって？』

「そんな感じ」

志保が盛大に溜息を付くのが見て取れた。

『言っておくけど、私は私のやり方でやらせてもらおうよ』

「それでいい」

何でもいい。桐生の、何かを掴めれば。それが、この一連の忍殺
しの犯人に繋がれば。

昨日見たあの狐の面が、魁の頭の隅を過ぎった。

後ろでは、まだ水の音がしていた。

13・朝餉 I did not hear it (後書き)

【私立榊寺学園】

創立百二十周年を誇る超伝統校。

生徒数は中等部だけでも千人を超えるマンモス校。中等部から大学院まである。

中等部・高等部は表面上「共学」になっているが、その実、女子部と男子部が別れているので、女子校と男子校が隣同士にあるようなもの。

途中から入る場合、内部生以上に相当な学力が必要なので、大抵が中等部から入学する。

その所為か、内部生と外部生の不仲は有名。

中等部制服：男女ともにブレザー、チェック柄のスカートかズボン

高等部制服：男子は詰め襟、女子はセーラー服

榊寺学園中等部の七不思議の一つである「歌うピアノ」は、朝飛が一番嫌いな話だったりする（夜寝られなくなる）。

14 学校 Play fair

志保はじつと教室の中を見据えていた。彼女の視線の先では、空夜が一人で本を読んでいる。

丁度朝のホームルーム前なのか、ザワザワと騒がしい教室。それに反して、彼の周りの空気だけは凜としているように見えた。いや、凜としているのは少し違う。

人が居ないのだ。他の同級生達が何人かで固まって談笑しているのに対して、彼の周りには誰も居ない。まるで、そこに空夜が居ないかのように振る舞っている。

彼の席が窓側ということは関係ないだろう。窓側にいるクラスメイトでも、お喋りをしているグループがある。

「……いじめかしら？」
「違うよ」

空夜が、開いていた窓から身を乗り出してこちらを見ていた。窓の外 銀杏の木に登って空夜を観察していた志保は、驚きすぎた所為で落ちそうになる身体を、その両腕でしがみついて必死に支えていた。

「な、なんで分かったの!？」
「……普通に分かるけど……」
酷く呆れられた。空夜がさらに乗りだして聞いてくる。

「なんでここにいるの? まあ大体は想像付くけどね。どうせ魁が何か言っただんでしょ」
「……ま、そんなとこね。半分はそうだけど、私自身、空夜に聞きたいことがあったし」

「じゃあ普通に聞けないの? 木の上からとかじゃなくて」
深い溜息と共に言われた。クラスメイト達は、ただ単に空夜が窓の外を眺めているとでも思っているのか、別段こちらを気にした様子はない。

「いいんじゃない？ 誰も何も気にしてないみたいだし。ていうか、空夜ってみんなから避けられてるの？」

「すごいことを、さらっと真顔で聞いてきた。普通なら、もう少しオブラートに包んだ言い方をしそうなものだが、全く悪気の無い様子で言ってくる。空夜はもう何度目かになるか分からない溜息をこつそり吐いて言う。

「ずばつと直球でくるよね、志保って」

「あ、ごめんごめん。空夜ってシカトされてるの？」

「それに決ってきたね。何それ、わざと？」

「じゃあなんて言えば良いのよ」

「……はあ、もういいよ。シカトっていうか、関わらないようにしてるだけなんじゃない？ 人は自分とは異質のものとは関わりたがらない」

そう言いながら、空夜は自分の目を指差した。

「目の色が違うだけで？ 私ならそうは思わないけど」

「これだけじゃないしね。まともに登校したこと無いし、友達だつてほとんどいないし、挨拶もするかしないかっていう程度なんだから、関わり合いのしようがないだろ？」

「どうやら避けているのはクラスメイトだけではなく、彼の方にも問題があるようだった。そういえば忍殺しの犯人探しをしているときも、空夜はどこか無関係を装う節があった。

「それに、」

空夜が何かを言い掛けて、それを中断させるかのようにベルの音が鳴り響いた。ホームルームが始まる合図だ。

「『それに』の続きは？」

「また今度。折角学校に来たんだから、ちゃんとしないとね」

「バイバイ、と軽く手を振って、空夜は窓をカラカラと閉めた。木の上にポツンと取り残された志保は、さっきの言葉の続きが気になりながらもしつかりと空夜を観察することにする。

「そういえば、彼は普段まともに通わない学校に、何故今日に限っ

て来ているのだろうか。
志保がふいに持った疑問は、教卓の前にある黒板によってアツサ
リと解決される。

「……テスト開始時刻、九時……なるほどね」
しばらくして教室へと入ってきた教師の脇には、大量のプリント
が挟まれていた。

* * *

「ここが……榊寺学園」

厳かな感じのする校門に掲げられた、金色で輝く文字を魁はなめ
るように見る。

私立榊寺学園中等男子部。

魁は、朝飛が通っていた学校へと来ていた。

あの電話の後、朝飛はいつもの如く洗濯物を干し始め、いつもの
如く魁にそれを手伝わせ、そしていつもの如く居間で茶を飲んで休
憩していた。どこの主婦だよお前、という魁のツッコミもいつも
如くあった。

何もかもがいつも通りだった。朝餉の時の挙動不審な受け答えも、
何かを隠しているような素振りもまるで無かったかのような、いつ
も通りのそれ。

今日の予定を聞けば、部屋の掃除をするという平凡な答えであった。どうせ今日も夕方から志保が来るだろうから、買い物も済ませておくという追加の答えもあった。

動くなら、動けるときに。

思い立ったら吉日宜しく、そういう経緯のもとで魁は榊寺学園の門前で立っていた。

「男子部？」

魁が疑問符を浮かべ、その文字をもう一度見ると丁度その右横には『女子部』の文字が。門から中へと入れば、真ん中には檻にも似たフェンスがどっしりと構えてある。どうやら共学とは名ばかりの完全別離制になっているようだ。

「しっかしまー……あれだよな。さすが有名私立校だけあるというか」

ちらりと門の向こうを見る。そこには門番がいるであろう建物が、不審者が現れればいつでも出てこられるようだ。

「認識が甘かったかな」

魁はそこで困ったように頭を掻く。創立から百年は軽く越えるという古い伝統校だと聞いているから、侵入は容易いと思ったのだ。いや、門番など魁なら気付かれないようにくぐり抜けることも可能だ。

しかしそれは、相手が人間だった場合のみ。

いま魁の頭を悩ませているのは、門に入っただけに取り付けられている改札口のようなものである。

「IDカード……か？」

この手のものは見たことがある。確か、生徒一人一人にIDカードが配られ、そのカードでしか入れないという仕組みだ。恐らく、あの門番達はカードを持っていない来訪者を案内するためにいるのだろう。

魁も正規のルートを通ればいい話なのだが、その為には学園へ入

る為の理由が必要だ。

「桐生朝飛について調べに来ました…… っつたら、普通に追い返されるだろうな、うん」

機械が相手ではどうしようもない。が、折角来たのに引き返すのも癪だ。

しかし、どうしようもないのも事実。

他から侵入しようにも、生憎この学園は見事なまでに閉鎖的で高い柵で囲われているし、それを登るにしても、周りは賑やかな住宅街と大通り。こんな朝っぱらからそんなことをすれば、紅白の小林幸子並に目立つこと請け合いである。

「……朝飛のことは、また今度にするか」
人間、諦めも肝心である。

魁が門に背を向け、歩き出そうとしたとき、その声は聞こえた。

「あさひ…… って、もしかして桐生朝飛？」

脱色して明るい金色になった髪の毛の少年が、魁の方を伺うように見えた。

「は？」

「あ、わりい。友達の名前と同じだったから、ちょっと気になってさ…… うん、そうだよな。そんなわけないんだよ…… 桐生はいなくなっただもんだ……」

どうやら朝飛の知り合いらしい。よく見れば、彼の来ている制服は神寺学園中等部のそれだ。年齢的に見て同級生であろうか。

丁度良い。魁はしっかりとその少年に向き合って聞いた。

「もしかして、朝飛の知り合い？」

「え、やっぱり桐生のこと言ってんの？」

少々会話が噛み合わない。魁も金髪の少年も、自分のことしかいっていない。軽く頭痛のする頭を押さえ、魁が投げやりに言った。

「あーもー！ そうだよ桐生朝飛のことだよ。ここの学園に通ってて、中退した桐生朝飛！」

「はあ！？ なにそれ、桐生って中退してんの！？」

「なんでお前、朝飛のこと知ってんのに中退のこと知らねえの!?
その制服、榊寺学園だろ!？」

「お前こそ、なんで榊寺じゃないのに、桐生が中退したって知ってんの!? ていうかなんだそのピアス! うぜえ!」

「ピアスくらいいいじゃん……じゃなくて! 大体お前、なんでこんな時間にここにいるんだ? いま九時半だけど、授業はないのかよ?」

「噛み合わない会話、エンドレス。お互いに何から話せば良いのか全く分からない程に収集がつかなくなっていた。

「ていうか! 桐生、生きてんのかよ!」

金髪の少年が、大層驚いたように喚いていた。

* * *

一限目、数学のテストが始まってから、志保は空夜の行動をずっと見ていた。

まず驚いたのが、問題を解くスピードだった。前後の席の生徒が一問を解いている間に、空夜はすらすらと三問を確実に片付ける。開始から二十分が経った頃には、もう既に殆どの回答欄が埋め尽くされていた。解いている間中、一度もペンが止まることは無かった。その後、十分ほどで全ての問の見直しを終えるとすぐにプリントを裏向け、すっかり居眠ってしまった。

志保は数学は得意な方ではないが、見る限りほぼ正解だと思った。教科書で見たような模範的な解答がそこに並んでいた。

「まともに学校に通ってない癖に……」

銀杏の木から、恨みがましい視線を眠っている空夜に送る。

「……それよりも、私は一体いつまでここに居ればいいのかしら」

別に帰っても良いのだが、空夜に聞きたいことはいっぱいある。

それに、学校での空夜、という普段では見られない姿を見られるかも知れない。

黒板に示された今日のテストの時間割を見れば、数学・英語。休憩時間も合わせて約一時間だとすれば、帰るのは十一時過ぎといったところか。

「さすがにずっと木の上って言うのもキツイものがあるわねー」

休憩時間になったら、空夜にもっといい隠れ場所でも聞こうかと思っていると、タイミンク良く終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。教室内が再び賑やかになる。

問一解けた？ 記号はどれを選んだ？ などと答え合わせをするクラスメイト達。もちろん、その輪の中に空夜は居ない。答案用紙を回収してもらっても、机に突っ伏して寝ている。まるで関わってくるな、と身体で表現しているようにも見えた。

と、丁度志保が腰掛けている木の前の窓を、答案用紙を全て集め終えた教師がガラツと開けた。空気の換気だろうか。

そんな、呑気な話があるわけでもなく。

「ちょっと君。さっきから何をしているんだ？」

どうやら、思いつきりばれていたらしい。

志保は苦笑いを浮かべ、空夜の方を見た。空夜と言えば、机の上で寝たふりをしながらも、確実に志保の方を向いて溜息を吐いていた。

「え……えと、あのー……そのー……」

いい嘘が思いつかない。というより、志保は元々嘘や何かを誤魔

化したりするのが破壊的に駄目だ。視線が泳ぎ、教師の不審の視線が痛い。

「空夜が……」

馬鹿正直に言ってしまった。空夜がかなり嫌そうな顔をしてこっちを睨んでいる。

「桐生がどうした？ 桐生、この子と知り合いか？」

空夜が何か考える素振りを見せる。ここで空夜に切り捨てられれば、志保はただの不審者だ。自分の格好がセーラー服に下駄、というのも拍車をかけてしまっている。

志保は必死で縋るように空夜を見た。それを見て、空夜が教師に分からないように声を出さずに口だけで「今回だけだよ」と伝えてきた。こくこくと何度も頷く志保を見て、彼はまたしても溜息を吐いた。

「はあ……僕の従姉妹です」

しれっと嘘を吐く。志保は相変わらず苦笑いのまま空夜と教師を変わりばんこに見ている。あとはなるようになれ、空夜がなんとかしてくれるだろう。

「従姉妹？ なんでお前の従姉妹がここにいるんだ」

「先生、話せば長くなるのでとりあえず場所を移動しませんか？」

従姉妹も、いつまでも木の上にはいられないだろうし、みんなも気になっってしまうだろうし……」

「ああ、そうだったな」

そこでやつと教師は志保に木から降りるように言う。志保としては、はやくまともな地面に尽きたかったので万々歳だ。例えどんな状況だったとしても、だ。

「えへへ……お騒がせして、ごめんなさーい……」

ひよいつと軽やかに教室内へと飛び移る。その行動に、教室内がしんと静まりかえった。答え合わせをしていたグループも、諦めてお喋りしていたグループも、次の試験に賭けて勉強をするグループも、みな等しく。志保に、四十人弱の視線が一気に集まっていた。

「あれ？　なんでそこで静かになるの？」

ぱんぱんつと両手を叩き、ついでにスカートの汚れを払う。志保にとってみれば、なんでもないようなことだったかもしれない。だが一般人にしてみれば。

「志保……ここ、4階……」

空夜がうんざりしたように言った。

桐生の忍 影送り組曲

それぞれの学校。

14 学校
P l a y
f a i r
(後書き)

15・学友 Doesn't know anything

「……じゃあ桐生は中退して、今は家の剣道場を手伝いつつ、家出したお母さんの代わりをしてるんだ？」

榊寺学園の門前で出会った金髪の少年 椎名圭都しいなけいとがポテトを摘みながら言う。

「そ。要約するとな」

その向かいの席で、魁がハンバーガーを頬張る。魁が頷いたのを見て圭都はようやく納得したようで、前のめりになっていた身体を落ち着かせた。

二人が居座るここは榊寺学園から徒歩数分の所にあるファーストフード店。噛み合わない会話の中、このままでは埒が明かないと言うことになり、落ち着けて話せる場所へと移動した結果がここだった。平日の朝と言うこともあってか、客の入りは少ない。

圭都は本来なら学校へと通っていないなければならない時間なのだが「どーせ遅刻してたし、このまんまじゃ授業なんて身に入らねーよ」と言うので、結局今日は無断欠席ということになった。

「で、次はオレの番。さっきお前が言ってた『生きてたのかよ』ってどついう意味？」

「そのまんまの意味だよ。桐生、学校来なくなってから色々な噂が流れてたから……」

「噂？ 中退したって、教師とかから聞かなかったのか？」

「全然。てゆーか、先生もよく分からないって言うからさ、噂が立ったんだよ。家出したとか、行方不明になったとか、自殺したとかいろいろ」

言い終えて、ずっと音を立てながらシェイクを飲む。その向かいで魁は首を傾げていた。

「教師も中退を知らなかった？ なんだそれ」

「知らねーよ。っつーか、お前はなんで桐生のこと知ってたんだよ？」

俺だつて知らなかったのに……魁つて桐生のダチなわけ？」

「え？ ……あー……友達、か？」

「や、俺に聞くなよ」

炭酸が切れかけてきているコーラを口に含んで、魁は言葉を濁す。「簡単にまとめると、オレ、家出中なんだ。で、朝飛の家に居候してんの」

「ふーん」

魁の家出の理由はどうでも良かったのか、大して疑問も感じていないようだ。圭都はまたポテトを摘んで、何気なく右側の窓を見た。微妙な時間帯だから車も人通りも少ない。学生は学校、社会人は会社。みんな今居るべき場所へ居るのだろう。が、そこに見知った顔を見つけた。

「げ」

「あ？ なに？」

圭都が短い奇声を発したのを聞いて、魁も彼の見ていた方を見ると言うより、見ざるを得なかった。

『やほーい！ 圭やーん！』

丁度二人が座っている席の窓に、人間がべたあと貼り付いてこちらを見ていた。ガラスに遮られているが、くぐもった声でハッキリと圭都のあだ名の様なものを呼んでいる。

『こんなところで何してんのー？』

嬉しそうに手を振る彼は、圭都と同じ神寺学園中等男子部の制服を着ていた。制服どころか、組章も圭都と同じで『2・2』と示されたバッジを胸ポケットに付けている。どうやらクラスメイトらしい。もう一度圭都が「げ」と声を発していた。

魁と圭都が呆然としている間に、かの少年はいつの間にか店に入ってきて、二人の目の前に立っていた。

「やあやあやあ。圭やん、奇遇だね！」

「ばちこーん、とでも音が鳴りそうなくらい上手にウィンクをしてやってきた少年。その彼に対して、圭都はウンザリしたような声で挨拶した。

「おう……奇遇だな、加賀谷」

「朝からローテンションだなー。眠たい朝こそ、もっとアグレッシブに行かないとさ！」

「朝から攻撃的になってどうすんだよ！ アグレッシブの意味も分からねーまま使うなよ」

「まあとにかく元気良くて言いたかったんだよ。キミもそう思わない？ えーっと………」

加賀谷と呼ばれた少年は、魁の方を指差して止まる。魁も突然のことに動きが止まる。相手は、にこやかな笑顔のまま疑問符を浮かべる。同意を求めてみたのは良いが名前が分からないようだ。何度か悩んだような声を出して、最後に一言。

「圭ちゃん、この人どなたかな？ おれの知ってる人？」

「加賀谷……そういう疑問はもっと最初に持とうぜ。とにかく座れ」
「はあ、と圭都は溜息を吐く。面倒臭そうに席を一つ横にずれて、少年が座れるようにした。

「あー、魁。こいつの名前は加賀谷喜一かがや きいち。俺と同じクラスで、二年二組。ちなみにクラスは三年間持ち上がり制だから、一年の時も同じな。桐生とも同じクラスだった」

喜一は人懐こそうな笑みを浮かべて、魁に握手を求めた。

「はい、仲良しの握手！ 喜一って気軽に呼んじゃってー」

魁が手を差し出すと、ぶんぶん勢いよく振り回された。勢いが良すぎて、机の上のものが落ちそうになったのを見て、すかさず圭都が喜一にチョップをかました。

「大人しくしろ！ で、こっちが鰐木魁。今は家出中で、桐生の家に居候してるらしい」

圭都が最後に言った言葉を聞いて、喜一の目がこれ以上無い程に見開かれた。机の上に身を乗り出して、魁の胸ぐらに掴みかかる。

そして周りのことなど一切気にせずに、大きな声で叫んだ。

「朝ちいのこと、知ってんの!？」

「あ、朝ちい……?」

「加賀谷ー、落ち着けーい」

驚愕し過ぎて呆けている魁と、それに掴みかかったままの喜一の間に割って入って、圭都は上手い具合に二人を引き離れた。

「あ、めんごめんごー。ちょっとビックリしちゃって。魁っち、大丈夫?」

テヘツと頭を掻いて笑いながら座り直す。

「おう、大丈夫だよ……って、魁っち?」

「あー。こいつ、変なあだ名付けるのが趣味でさー……気にしない方がいいぞ、魁」

「変とは失敬な。圭ちゃん、ニックネームは仲良くなる裏技って知ってたー?」

「そんな裏技は無い」

「そーだ、魁っちは知らないよね。『朝ちい』って言うのは朝飛のことだー、おれと朝ちいは超仲良しだったのさ!」

「他人の話を聞け!」

サラッと圭都を無視して魁と喋り始めた喜一に、怒りの鉄槌が下される。それをまともに喰らって、喜一は後頭部を押さえたまま悶絶した。

「ったく、なんで俺の周りは他人の話を聞かない奴等ばっかなんだ?」

「いや、お前も聞いてないじゃん。門の前で、あんだけ会話が噛み合わなかったじゃん」

魁がぶんぶんと片手を振る。が、それよりも圭都には引つかかることがあったのか、魁の方を真剣に見た。

「そうだ。そういえば、なんでお前は門の前に居たんだけ? 榊寺の生徒……って訳でもないよな?」

その通りだ。それどころか、魁は学園に侵入する為に門の前に居

ただ。朝飛の情報を得るために。生憎IDゲートという壁に塞がれたために、それを実行することは出来なかったのだが。

ならば今の状況は願ってもない好機では無いのか？

魁は今更ながらに、目の前の二人の人物の重要さに気付いた。朝飛が学園に居る時代を知っている人間が、二人も居るのだ。しかも、同じクラスで仲が良かったと言っている。これなら学園に侵入せずとも、いくつかの話は聞けるかも知れない。

魁が考え込んだのを見て、喜一は圭都へと話し掛ける。

「圭ちゃん」

「ん？ どうした？」

「おれさ……気付いたんだ……」

「何がだよ」

さっきまでの惚けたような感じとは違い、真剣な表情で喜一は店のカウンターを指し示す。

「おれはいま、猛烈にチキンナゲットが食いたい……！ 今なら百円なんだって！」

「どうでもいいしー！」

本日三度目の拳が喜一の頭にクリティカルヒットした。

15 学友 Doesn't know anything (後書き)

二年二組九番
椎名圭都しいな けいと

- ・サッカー部所属
- ・得意科目は数学
- ・苦手科目は古典

二年二組四番
加賀谷喜一かがや きいち

- ・バスケット部所属
- ・得意科目は体育
- ・苦手科目は理数系全般

16・兎殺 Only the lie

「……と言っわけで、少しの間だけこの一年B組に加わることになった日野志保さんです。知ってる人も居るかもしれないけど、日野さんは桐生くんの従姉妹で、ご両親が海外へ出張している間は桐生くんの家に預けられています。その間は元に居た学校に通うことが難しいそうなので、ご両親が帰ってくるまでの短い期間だけ、この学校で学ぶことになりました。みんな仲良くするように」

若い女の担任が話し終わると、クラス内が一気にざわついた。志保を見る者、空夜を見る者。反応は様々だ。

志保は担任の隣で視線を泳がせていた。どこをどう見ても、好奇の目線ばかり。当たり前か。志保は諦めて窓際の席にいる空夜を見た。彼はまた素知らぬ顔して窓の外を眺めていた。どうやら、もう志保に対する無視を決め込んでいるみたいだ。あとは一人でどうにかしろということだろうか。

「じゃあ、日野さん。桐生くんの後ろの席に座ってくれる？」

「はい」

言われたとおり、空いていたその席へと移動する。机と机の間を縫うようにして歩いていくと、クラスメイト同士が小声で話している声が聞こえた。

「……兎殺しの従姉妹だったさ」

「こえー……あいつもそうなのかな」

兎殺し。おぞましい単語が聞こえてきたが、志保にはそれが何を意味するのか分からなかった。文脈からして、空夜の代名詞であることには違いないだろうが、空夜が兎を殺したということだろうか。後で真意を問おうと心に決め、志保は何も聞こえなかったふりをして、担任に言われた席へと着いた。それと同時に、ホームルームが始まった。前の席にいる空夜がやっと窓から教卓へと視線を移していた。

「えー、みなさん。中学へ入ってから二回目の模試はどうでしたか？ 二週間後には期末テストも控えていますから ……」

担任に話を右から左へと流して、志保はつい一時間ほど前の出来事を思い出していた。

あの時の空夜は、凄かった。

これと違って戸惑うことも無く、さらさらと志保がここに居る偽の理由を話し出し、教師をいとも簡単に騙し、ことを片付けた。苗字を『火之墓』ではなく『日野』へと変えたのも機転が効いている。珍しいものよりも有り触れたものを選んだのだ。

あんなにも簡単に嘘を真実のように話す人間を、志保はこれまでに見たことがなかった。元々志保は嘘が吐けない部類の人間だから驚きは余計に大きかったのだが、とにかく空夜は凄かったのだ。

その結果、日野志保としてこの学校に通うことにまでなつた。これはこれで「終わりよければ全てよし」というやつだろ。魁は空夜を調べるように言ってきたのだ。これなら理由をつけなくとも、志保自身、学校へ通うことによつて空夜をより近くで調べられるようになった。

「それでは、明日も遅刻しないように登校しましょう」

どうやら担任の話が終わつたようだ。学級委員らしき女子生徒が号令の合図をかけ、クラス全員が起立礼をする。

「さよーなら」

間の抜けた挨拶をして、生徒達が思い思いの場所へと向かう。友達の席、部活、帰宅。彼等に混じつて、空夜はゆっくりと帰り支度をしていた。

「あのさ、空夜……」

「ねえ日野さん！」

空夜へと話し掛けようとして、突然真横から声をかけられた。さつき号令をかけていた女子生徒、それから他にも何人か。

「わ、私？」

「さっきのアレ、どうやったの？」

「へ？」

「木の上からよく教室内に飛び込めたね！ 怖くなかったの？ すごーい！」

「いや、まあ……」

「つていうか、お父さんもお母さんも海外に出張とか、格好いいよねー」

「や、そうでもないよ……」

もっと高いところから飛び移ったりするし、海外出張とか全部嘘だし。志保は喉まで出かかった言葉を苦笑いでなんとか誤魔化した。好奇心旺盛な女子生徒達の質疑応答は終わりそうにもない。困ったように空夜のいた席を見ると……誰も居なかった。

「あれ!？」

慌てて教室のドアを見ると、丁度帰ろうとしている空夜を見つけた。

「ちよつ、空夜!？」

「じゃあ僕、先に帰ってるから」

いつぞやと同じように軽く右手を振って、空夜は薄情にもさつさと歩いていってしまった。そこまで面倒を見きるつもりは毛頭無いらしい。彼が完全に帰ってしまったと分かってから、黙っていた女子生徒達が口々に話を再開し始める。

「ほんと、何考えてるのか分からないよね……」

「そりゃあ、うちらとは違うもん。アレ、やってるらしいじゃん？」

「えー、でも噂でしょ？」

一応『従姉妹』ということになっている志保の前でも、お構いなしに話を続ける。これが本当の従姉妹なら憤慨するところだが、志保にしてみれば貴重な情報源だ。魁に言われたとおりにするのは癪だが、これも兄殺しの犯人に繋がる大切な糸なのだから。

「『アレ』つて何？」

思い切って、学級委員らしき少女へと話し掛ける。少女は周りの女子生徒達を目配せをしあって、それからこの質問に答えるべきか

否かを相談していた。

「日野さんなら、本当かどうか知ってるんじゃない？」

「聞いて……みる？」

話がついたのか、志保の丁度隣にいた髪の短い少女が声を潜めて呟いた。

「リストカットだよ」

思いもしなかった言葉が、少女の口から紡がれた。

「……え？」

「桐生君、リストカットしてるってホント？」

何も答えられない。それよりも、言葉が出ない。まさかそんな単語が出てくるとは予想だにしていなかった。志保はやっとの思いで首を横に振り、分からない、とだけ言った。

「なんでそんな物騒な噂がたってるの？」

「えー？ なんてだっけ？」

「みんなが言ってるからねえ……それに兎殺しだし？」

また出た。志保は空夜に直接聞くことが出来なかったその単語について、彼女たちに尋ねることにした。

「あのさ、さつきも男子が喋ってるのを聞いたんだけど『兎殺し』って何？」

「そのまんまの意味だよ。兎小屋の兎が、全部死んでたの。飼育委員の桐生君が世話してる兎が」

ねえ、と隣の眼鏡を掛けた女子生徒に同意を求める。彼女もまた頷きながら、話の続きを志保へと聞かせた。

「それでね、桐生君が言ったのよ。『僕が殺したんだ』って」

怖いよねー、とみんなで頷きあうその光景を、志保はどうすれば良いのか分からずにただ見ていた。一応従姉妹ということになってくるのだ。空夜を庇うべきか、それとももつと情報を入手しておくべきか。噂がただの噂だったとしても、ここまで悪い噂が広がるかにはなんらかの理由や原因があるはずだ。空夜は、もう少し調べる価値がある。これだけは分かった。

志保の視線に気付いて、慌てて彼女たちは笑顔を向けてきた。

「あ、別に日野さんが怖いとかそういうんじゃないからね!」

「そうだよ。何か困ったことがあったらいつでも言ってみてね。お父さん達が居なくて心細いよね」

「ありがとう」

その場限りの笑みを作って、志保は愛想よく答えた。

「そろそろ私、家に帰らないといけないから……」

あとは、本人に直接聞くのみ。

16・兎殺 Only the lie (後書き)

そこにあるのは偽りだけ。

17・兎追 Grip the truth

学校からの帰り道を空夜は一人歩いていた。あまり教科書の入っていない鞆をぶらりぶらりと少し前後に振りながら、時折思い出したように隣を通っていく人達を横目で見ながら歩いていた。

今頃志保は、好奇心の塊である女子生徒達の質問攻めに遭っているところだろうか。そこまで一緒に付き合っただけでやる義理もないので半ば逃げ出すように教室を出て来たが、今更になって可哀想に思えてきた空夜は後ろを振り返ってみる。案の定志保の姿はまだそこにはなかった。今日も今日とて兄と魁との三人で犯人探しをすると言っていたが、この分だと言間に合わないかもしれないな、と空夜は前を向いて歩みを再開させた。

久しぶりに登校した学校は、やはり相変わらず気持ちの良いものではなかった。ばれていないとも思っているのか、チラチラと向けられる視線。わざと聞こえるように言っているとしたかと思えない内緒話。特に、自分の周りには誰も居ないはずなのに、何故か自分を取り囲むあの重く息苦しい空間。

あれと似た空気を自分は知っている。途轍も無く似ているのだ。五忍樹と、自分との間にある空気と。遠すぎるようで、近い。近すぎるようで、遠い。当たり前か。自分はこの世界に一片の関心すら無いのだから。

「こらー！」

突然クンツ、と制服の襟元を後ろへ引つ張られた。

「考え事しながら歩いちゃ駄目よ！」

上半身だけ後ろを向くような形になって、いまさっき自分を引つ張った人物が志保だと気付いた。走ってきたのか、荒い息をして志保は恐ろしい形相でこちらを睨み付けていた。

何があったのだらうと思いい、空夜がこれから歩こうとしていた自分の行く先を見て、ああ、と納得した。横断歩道には飛び交うよう

に車が走っていた。歩行者信号はもちろん赤色。どうやらしっかりと周りの世界を見られていなかったらしい。

「危なかったね」

「何悠長なこと言ってるのよ！ 馬鹿！」

「うん」

ようやく状況が飲み込めてきた空夜は、話を切り替えるように志保へと向かい合わせた。

「みんなの質問攻めからは逃げてきたの？」

「逃げるとは失礼ね。かわしてきたのよ」

「あんまり変わらないよ、それ」

逃げるのは卑怯じみて嫌なの、と志保はさも憤慨そうに言った。空夜はそれに対して適当に相槌うって返事をした。

「で？ 僕に聞きたいことがあるんじゃないの？」

見透かしたような台詞に、志保の言葉が詰まる。

「う……まあ、あるっちゃーあるんだけど……」

「いいよ。答えられるものなら答えるし」

あ、信号変わったね、と空夜が何気なく言い、二人して横へ並んで歩き出す。志保は何から尋ねようか迷った拳げ句、ここは順番通りにいこうと話し始めた。

「『兎殺し』ってどういう意味？」

「そのまんまの意味だよ。僕が兎を殺したんだ」

「それ、嘘でしょ」

「……なんで？」

「女の勘ってやつ？」

あっさりと答えられて、なんとも言えない表情をした空夜が居た。適当だね

「ま、そんなもんでしょ」

「……僕が学校を休んでいる間に決まっちゃったことなんだけど、何故だか飼育委員になっちゃって。飼育委員は、当番に当たった日は朝早くに来て兎小屋を掃除しないといけないんだ」

「うん」

本当のことを話してくれるらしい。志保は前方と空夜とを交互に見ながら真剣に話を聞いた。

我が物顔で通っていた車も疎らになり、閑散とした住宅街の中を二人は歩く。テスト期間は帰宅が早くなるので、まだ太陽はてっぺんに昇ったままだ。

「大分前、僕が小屋の掃除当番に当たった日、兎小屋の扉が開いていたんだ。多分、前日に掃除した人が鍵を閉め忘れちゃったんだと思う。それは別に良いんだけど、小屋の中に野良犬が入っちゃってさ。兎を噛み殺してた」

結構グロテスクだったよ、とさして表情も変えずに空夜は言った。「じゃあ、その野良犬が兎を殺したってこと？」

「そんな感じ」

「なんでそのこと、みんなに言わなかったのよ」

「なんて言うんだよ。鍵を閉め忘れた飼育委員が悪いって？ それに、言えばきつと、野良犬が殺されるだろうね。保健所とかに連絡しちやったりしてさ」

空夜は志保の方を見る。そのアーケイツクスマイルは、背筋に蜘蛛が這うような感覚がした。

「……空夜って、何考えてるか全然分かんないわ」

「それはどうも。質問は終わり？」

横断歩道の信号が赤になると同時に、今度はちゃんと立ち止まった。歩を進めないおかげで話が集中できそうだと志保は首を振った。

「まだ！ まだもう一個聞きたいことがあるの！」

「まだあるの？ じゃあ僕の質問に答えてくれたら、答えてあげよう」

質問？ と鸚鵡返しに聞いてくる志保に、軽く頷く。

「人が死ぬのって、悲しい？」

「そりゃ、悲しいでしょ」

「知らない人が死んでも？」

「うーん……悲しさの度合いは違うかも知れないけど、やっぱり悲しいんじゃない？」

欲しかった答えが貰えなかったのか、上手く尋ねられなかったのか、空夜は少し迷ったような表情を見せる。

聞き方を変えて、空夜が再度志保に尋ねた。

「お兄さんが死んだとき、悲しかった？」

「……………正直な話、いまいちよく分かんなかったのよ。最初に志斗兄が死んだって聞いたとき、『本当に死んだのかな』って思ったんだよね。悲しいって言うより、驚きすぎて何が何だか分からなかったかな」

「そついうもんなんだ」

空夜が納得したのを見て、志保は続ける。

「この前さ、志勇兄の仕事の都合がやつとついで、お葬式をしたんだよね。ほら、一日だけ桐生家に行かなかった日があったでしょ？あの日。自分でもびっくりしたけど、全然泣けなかったの。でもね、志斗兄が白い箱の中に収まったのを見て、大泣きした。悲しすぎて、感覚が麻痺しちゃってたんだと思う」

空夜はちら、と志保を見た。芯の強い彼女は泣くことはしなかった。

「絶対に、見つけだしてやるの。志斗兄を殺した人を」

そつ決意する彼女の横で、空夜は何も言わなかった。ただ、自分の足下だけを見つめていた。

「で！」

「な、なに？」

ずいつ、と顔を近づけてくる志保に驚きながら空夜は答える。

「次の質問ね。あのさ、リストカットとかしてたりする？」

どんな変化球で来るかと思えば、いつそ清々しいまでの直球だった。あまりにもダイレクトなその質問の仕方に、空夜は堪えきれずにぷつと吹き出した。

「ふ、あはははっ！ 志保って凄いやね。うん、凄いや。僕や兄さんなんかじゃ出来ないことを、普通に出来ちゃうんだもんね」

「え？ 何が？」

「言いたいことをハッキリ言えるって、すごいよ。良いと思う」

「それは誉めてんの？ 貶してんの？」

「誉めてるよ」

少し不満そうな顔をして、志保は一度歩行者用の信号を見た。まだ赤信号のままだ。

「で、どうなのよ。クラスで噂になってるのよ？」

噂どころか、本人の居る居ないに拘わらずあちこちで話されていることだ。空夜が知らないはずが無い。とはいえ、それは志保の与り知らぬことだろう。

「……リストカッターの大半はね、死ぬために切るんじゃない、切ることと生きてる実感を得るんだって。流れ出る血を見て、自分が生きてることを確認するんだとか。そう言う意味でなら、僕はリストカットしてないよ」

答えになっっているようで、なっていない。志保は言葉をしっかりと選んだ上でもう一度質問した。

「結局の話、それって、自殺する為にリストカットしてるってこと？ それとも、そのまんまの意味でしてないってこと？」

「それはご想像にお任せしておくよ」

完璧なまでのアーケイツクスマイル。空夜は青色に変わった信号を見て、未だに考えのまとまらない志保を置いて一人進み出した。

横断歩道の白い部分だけを踏みながら、空夜は一息吐いた。自分は上手く話せていただろうか。

兎小屋の話の中で、半分嘘を吐いていた。

あの日、確かに兎小屋は鍵が開いていて、野良犬が入っていた。二匹ほどの兎は首元をやられ、白い毛に鮮やかなまでの赫色が付着

していた。

でも、空夜がそれを見つけた時点で全ての兎が殺されていた訳じやなかった。急いで小屋へ入って野良犬を追い出せば、半数以上の兎が助かっていただろう。だけど空夜はそれをしなかった。黙って、兎が噛み殺されていくのを見ていた。誰も登校してこない早朝、空夜だけがその惨劇を見つめていた。

数分後、十分に満足したのか、野良犬が軽やかに走って小屋を出ていった。小屋の中には、もう生きた兎は残っていなかった。空夜はこれで良かったのだと思った。

飼育委員のみんなは口を揃えて言っていた。なんで朝早くから兎の面倒を見なきゃいけないんだ、面倒臭い、飼育委員なんてならなければ良かった、と。世話をする対象が無くなった今、飼育委員という肩書きに意味は無い。

もう何もなくていい。そう思うと、気分は晴れやかだった。庇護すべき対象がいなくなった。自分はもう何も守らずとも良い。なんて気が楽なのだろう。

自分が居なくなれば、兄もきっとそう感じるだろう。根拠も何も無いが、その時の空夜は漠然と思ったのだ。

「ちょっと空夜、置いてかないでよー！」
後ろから慌てて追いかけてくる志保を振り返って、にこりと笑った。

「だって志保、歩くの遅いんだもん」

真上にあった太陽が、今は少し西に傾いている。早とちりした蝉の鳴き声が耳を掠めた。

17・鬼追 Grip the truth (後書き)

きつと兄は、僕が死んでも泣かないのだろう。
その代わり僕は、兄が死んでも泣かない。

18・彼女 Or it might be him

思い出話はいつになっても尽きないものだ。

微妙な時間帯の所為で客足が疎らなファーストフード店では、本来なら学校へ行っていないなければならない年頃の三人組が和気藹々と話し込んでいた。

一人は脱色したのだと思われる明るい金髪。その隣の席では陽の光に当たって少し茶味がかって見える黒髪の少年が楽しそうに話し、そしてその彼の向かい側では赤色のメッシュをいれた黒髪。

「でさー、その時の朝ちいってば滅茶苦茶びびっちゃってさー」

「おいこら加賀谷！ 俺の分のナゲットまで食うな！ ていうか、ソース付けすぎ！」

喜一の手からナゲットを取り戻すことが出来なかった圭都は、諦めてポテトに手を付けようとトレイに手を伸ばす。

「へー。あの朝飛がびびるだなんて、相当怖かったんだな」

「おいこら魁！ それ、俺のポテト！ 俺のだから！」

食べようとしていたポテトは、既に魁によって半分以上食べられていた。こちらはなんとか取り戻すことに成功して、圭都はやつとポテトに有り付く。

「そうみたいだよ。あれ以来『歌うピアノ』の話したら、朝ちい逃げ出すんだもん」

「今度オレもしてみよっかな。なあ喜一、『歌うピアノ』を詳しく教えてくれよ」

「教える教えるー。第二音楽室に置いてあるグランドピアノの話なんだけどねー」

最初は朝飛のことを聞くつもりだったのだが、いつの間にか喜一達が一年生だった頃の三人の思い出話になっていた。朝飛が居た、学校の思い出。

朝飛が図書委員だったから、いつも三人が集まるのは図書室だっ

たこと。喜一の数学のテストが壊滅的で、放課後に一緒に勉強会をしたこと。中等部の七不思議を全部確かめるために、夜中に学校へ忍び込んだこと。

二人があまりにも楽しそうに話すものだから、魁もつい話に聞き入ってしまった。純粹に朝飛が羨ましいと思った。自分の居場所はいつも苗木木之下で、それ以上の居場所は無かったから。こうやって五忍樹だとか忍だとか裏だとか、そういうのとは違う世界を持っている朝飛が羨ましかった。

「楽しそうだな」

大分盛り上がったところで、魁が一言ぼつりと呟いた。その言葉に圭都が懐かしそうに目を細めて呟いた。

「楽しかったよ。一年の時が、一番楽しかった。なあ喜一」

「そうだねー……なんで学校辞めちゃったんだろうね、朝ちい」

「あー、勉強に付いていけなかったとか言ってたぞ？」

今日の朝、そんなことを言っていた気がする。魁はうる覚えな記憶を辿りながら言った。が、すぐに否定の言葉が入る。

「うっそだー！ だって朝ちい、おれより賢かったもん」

「だってお前追試ばっかじゃん」

間髪いれずに否定した喜一に、こちらの間髪いれずに圭都が呆れたように言った。う、と喜一が胸を押さえて痛がるふりをする。

「いまの一言はキツイぜ、圭やん……！ スパークハートだよ……！」

「スパークしてどうする、スパークして。それを言うならブロークンハートだ」

「ミスった！ あのね、言っておくけどねー、おれだって好きで赤点取ってる訳じゃ」

「好きで取る奴なんていねえよ……って、そんなことはおいといて。俺も勉強に付いていけなくて学校を辞めたことは無いと思うな。成績はそこまで悪くなかったし。大体俺と同じか、少し上くらいだったかな」

なあ、と喜一に同意を求める。それに対し、うんうんと大袈裟なほどに喜一は首を縦に振っていた。

「特に英語の成績は良かったよねー。まあおかーさんが英国人だから、当たり前っちゃー当たり前か」

魁は二人に気付かれないように溜息を吐いた。そうだろうなとは思っていたが、やはり今朝の会話も適当に交わされただけだったらしい。朝飛は一体どれくらいの真実を自分に言ってくれているのだろうか。それともまだ信用されていないのだろうか。

「どうした、魁っち！ 元氣無いぞ！」

「いや、信賴してもらおうのって難しいなと思つて……」

「元氣出せーい。これ食う？」

今度は隠すことなく溜息を漏らす魁に、何がなんだか分からなかった喜一はとりあえず残り一つだった自分のチキンナゲットを魁に勧めてみた。が、あっさり断られた。やはり食べかけのナゲットを勧めたのが間違っていた。

「げ、もうこんな時間かよ」

そんな二人のやり取りに目もくれず、圭都が店内の時計を目に示して言った。時刻は午後一時過ぎ。午前からの店に居たのだから、相当の時間をここで過ごしたことになる。今日は遅刻どころかサボりになってしまった。

「本当だー」

「つていうか喜一、お前はなんでここに来たんだよ」

「今日は気分がのらなかつたからサボろっかなーと思つて」

語尾にハートマークが付いていそうな台詞だった。マイペースもここまでくれば誉めるしかない。

「だってさー、あそこの路地裏で可愛い猫を見つけて、ちょおーつと遊んでたら授業が始まる時間になつてたんだよ。途中から教室に入るのとか嫌だし、一時間目はどうせ」

そこで喋っていた喜一を含む三人の動きが止まった。六つの目は、先程喜一が説明していた猫の居た路地裏から、自分たちの席のガラ

又窓へと釘付けになっていた。

「みーつけたー」

同じ顔が二つ、こちらを見ていた。

似通った二人の相違点は服装。片方はワンピースで、もう片方はズボンをはいていた。今朝、喜一がそうしていたのと同じように窓に貼り付きながら、その双子は魁達のことを凝視している。二人の顔は笑っているはずなのに、どこか怒ったようにも見えた。

突然現れて「見つけた」宣言をされた喜一はおろおろと圭都に疑問をぶつけた。

「な、なにこの人達？ 圭やんの親戚？」

「なんで友達の枠を軽々と飛び越えて親戚になるんだよ。俺はこんな奴等知らねーぞ。おい魁……」

自分には全く見覚えの無かった圭都は魁に尋ねようとしたが、自分の向かい側に座っていたはずの魁はどこかへ消えていた。

「……魁っち、なんで机の下に居んの？」

いや、消えていたわけではなく、机の下に潜り込んでいたようだ。ガタツと物音をさせて魁が震える声を出す。

「ささささっきの双子が来たら、オレは店を出て三キロ南の方向へ走り去ったとでも言ってくれ！」

「え、でも……」

「頼む！」

必死の懇願をする魁に、拒否することは余りにも酷だ。だが喜一はなかなかうんとはいつてくれない。代わりに、圭都が答えた。

「言っても無駄だと思っぞ……」

「なんで!？」

今度はもつと盛大な音をたてて、机から頭を出す。そんな彼の右横を指差して、圭都が残酷な台詞を言い放った。

「だって、もうそこに居るし」

頭だけを出した魁のすぐ横で、さっきの双子がにんまりと笑って立っていた。

「久しぶりだなあ、魁」

「何か都月ちゃん達に言っておかなきゃいけないことは無いかな？」

全く同じ色をした焦げ茶色のショートカット、髪色よりすこし黒い瞳。喜一達と同じ年頃の双子　遠藤終と遠藤都月が腕を組んでいた。

明らかに怒っている二人を目の前にして魁は、

「すみませんでした」

土下座した。

だが、それでも双子の怒りは収まらない。彼が鰐木家を出ていったあと、その責を問われ、頭領から長い長い説教を聞かされ、あまつさえ彼の搜索を押しつけられた彼等の怒りは少々のことでは消えない。

「首の骨、クキッていくのと」

「頭蓋骨、ピシッていくのと」

「どつちが良い？」

「どちらも嫌すぎる。」

魁はぶんぶんと首が飛びそうなくらい左右へ振る。そんな彼の両腕をがしつと掴んで、彼等は魁を机の下から引っ張り出す。

「ほら、遠慮すんなよ。どつちが良いんだ？」

「なんなら都月ちゃん、やりながら歌も歌ってあげるよ？　魁の為のレクイエム」

「悪かった！　本当に悪かった！　ごめん！　勝手な行動してすいません！」

ずるずると引きずり出されていく魁と、明らかに純粹な笑みではない笑顔で詰め寄る双子。

まるで蟻地獄にはまってしまったアリとウスバカゲロウのようだと、そこへ三人とは違う声が混じった。

「魁！」

圭都だ。圭都が終の持つている側の腕を掴んだ。

「け、圭都！」

てつきり助けてくれるものだと思った魁だったが、どうやらそれは違うらしい。

「彼女か！？ この子はお前の彼女なのか！？」

圭都がもう片方の手でビシッと指差した方向には、きよとんとした顔の都月が。どうやら魁と都月が付き合っていると勘違いしたらしい。

「わーお、こんな可愛い子が彼女だなんて羨ましいなー！」

喜一も同じように都月を見る。

「えへへー、都月ちゃんのこと可愛いだってさ！」

まんざらでも無いようで、都月はかなり嬉しそうに笑う。それに反して終は「駄目だ都月！ これは世にも恐ろしいナンパとかいうヤツだ！ 最近は変なヤツが多いんだから気を付けなさい！」と嘆いていた。

よく分からない状況になってしまったが、そのおかげでなんとか双子の拘束から逃れることが出来た魁はそそくさと喜一の隣へと逃げ込んだ。反対側では圭都が口惜しそうな声をあげていた。

「ああああ！ なんて榊寺は男女で校舎が違うんだ！ ちくしょー

！」

「違う違う違う！ 付き合っていないから！ 付き合うわけないから！」

「なんでだよ！ 可愛いじゃん！」

慌てて恋人疑惑を撤回しようとするが、なかなか信じてくれない。だが、魁の言うとおり付き合うわけがないのだ。

魁は決定的なことを口にした。

「だってよく考えて見る！？ こいつら顔がそっくりだろ！ 一卵性双生児っていうのは、絶対に同性だって決まってるだろ！」

しばらくの沈黙。以前として笑顔のままの都月。そんな姿を見て、圭都と喜一はお互いの顔を見合わせる。思っていることは、同じ。そして、圭都と喜一の重なった声が沈黙を破った。

「男………？」

「都月ちゃんの性別も見破れないなんて、君達まだまだ青いね！」
可愛らしく微笑みながら、彼が言った。

終くと都月くんは一卵性双生児。

18・彼女 Or it might be him (後書き)

午後三時前。巷ではおやつ時間も呼ばれるこの時間帯、あるファミレスの一角では容姿が瓜二つな双子と、奇抜な髪色の少年が向かい合って座っていた。丁度注文をしている最中らしく、双子の少女らしき方がウェイトレスにメニューを見せていた。

「都月ちゃんねー、和風おろしステーキとチキンドライアとー、あつそれからデザートにトリプルチョコプレートサンデー食べたい！」
「こら都月、そんなに食って夕飯が食えなくなっても知らないからな。あ、俺は唐揚げコンボと絞り立てオレンジジュースに、ルネサンス風三色ゼリーな」

自分のことを棚に上げながらメニューを閉じて、終はウェイトレスに丁寧に渡す。それを受け取りながらウェイトレスは注文の確認を取る。

「ご注文は以上で宜しいでしょうか？」

「すみません、今の全部取り消しで、ドリンクバー二つ下さい」

「かしこまりました。ドリンクバー用のコップはあちらになります」
「えー」

魁が二人の注文を取り消したと同時に、至極不満そうな声が聞こえた。かなり文句を言いたげだ。

「人がわざわざ捜しに来てやったのに」

「何この仕打ち？」

「奢ってやってんだから、少しは感謝しろ！」

榊寺の二人組にちゃんとした礼も言えないまま、あのファーストフード店を後にしてしまったことで魁は少し苛立っていた。余りにも予定外すぎる二人の登場で、頭が回りきらなかった。

都月が自分の性別を明かした後、呆ける二人に粗方の説明だけをしてすぐにあの場を去ってしまった。それは二人に申し訳ないという気持ちもあるが、何よりも。

「……せつかく朝飛の何かが掴めるかと思ったのに」

折角の好機を逃してしまったことが悔やまれた。溜息混じりにそう言い放った魁に、双子は顔を見合わせる。

「あのさ、いつになったらお前は鰐木家に帰ってくるんだよ」

「そうそう。魁の目的は確か、桐生のご子息に掛けられた疑いを晴らすことだったんだよね？ それならもうとつくに終わったじゃん。五忍樹はもう桐生家を疑ってなんかいないんだし」

桐生の次に権力を持つ火之基家の嫡男がそう言い切ったんだから、と都月は得意げに言った。

「でも、まだ忍殺しの犯人は捕まってない。大河さん達の仇討ちはまだ終わってねえ。それに、何か引つかかるんだよね」

「都月ちゃん、難しい話は苦手ー」

ジューズ取ってこようと、と跳ねるようにして都月はドリンクバーを取りに行く。見てくれだけは少女のそれと変わらないのだから、つくづく凄いと思う。そんな半身を呆れるように見て、終は話を続けた。

「引つかかるって、桐生朝飛がか？」

「色々とな……。そういやあ、志保は『片方に成りきってない』とか言ってたな……」

何が引つかかるのか自分でもよく分からなかった魁は、朝飛に会いに来た時のことを思い出していた。確かあの時、まだ猫被っていた志保がそう言っていたはずだ。ぶつぶつと独り言を始めた魁に、終が首を傾げる。

「何がどうしたって？」

「火之基の末っ子が言ってたんだよ。朝飛は五忍樹の三大原則を守ってないって」

「ああ……それね」

終はそれを知っているらしく、どうでもよさそうに相槌をうつ。

「魁は知らなかったっけ？ 桐生朝飛って、正確には次期当主じゃないんだよね」

「はあ？」

「まあ、順番的に見て、長兄の桐生朝飛が桐生家の次期当主になるのは必然だから、周りはそう呼ぶんだけど。桐生朝飛自身は、まだ次期当主になるっていう決意表明をしてねーの。それさえすれば、完璧にこつち側の人間になっちゃうんだけど、していない間は裏の人間であり表の人間でもあるんだよな」

つまり、黒でも白でもなく、灰色。そういえば、朝飛とはそういう話をあまりしなかった。引っかかっていたのはそれだけだろうか。「たっだいまー」

カルピスを入れたコップ二つを両手に、都月が戻ってきた。ご丁寧にストローまで付けている。赤色のストローは自分の席へ、もう一つの青色のストローがさしてあるコップは終へと渡した。

「そだそだ。都月ちゃん的に、魁に聞きたいことがあるんだけどさー」

椅子に腰掛けながら、都月は本当に理解出来ないという声で魁に問う。

「ん？ なんだよ」

「魁はなんで、桐生朝飛の疑いを晴らそうとしたの？ 理由、まだ聞いてないんだよね」

「あー……なんていうか、アイツには借りがあるんだよな。たぶん向こうは覚えてないんだろうけど。その借りを返すためだよ」

今となつては、疑いを晴らすと言うよりむしろ自分が彼を疑っているような節もあるが。

「ふーん？」

ぶくぶくと行儀悪くストローで遊ぶ都月の頭を終がはたいて、彼は困ったような呆れたような疲れたような、そんな色んな感情が渦巻いた表情をした。

「つまり、忍殺しの犯人を見つけて、仇討ちして、桐生朝飛に借りを返すまでは錨木家に帰らないってか」

「悪いな」

あまり悪びれた様子はなかった。逆に勝ち誇ったような笑みを浮かべている。

「強情っぱりが。いつか痛い目みるぞ」

「そこが魁の長所であり短所だよね」

ストローから口を離し、都月はレースで縁取られたポシエットから何やら資料のようなものを取り出した。写真やら何やらが纏められている。

「桐生家の身边を調べた結果だよ。都月ちゃん達に頼みたかったことって、どうせこんなところでしょ」

あの夜、途中で切ってしまった終との電話。頼み事を出来ないまま終わってしまったが、まさかもうすでに動いてくれているとは。魁は驚きと感謝で言葉が出なかった。

「終、都月……」

しかし都月は一向にその資料を魁へと渡さない。

手を伸ばした魁から遠ざけるようにして、二人はその瓜二つな顔をにんまりと笑顔にさせて言った。

「報酬は？」

「……お前等……」

今度は別の意味で言葉が出なかった。

*
*
*

「びつくりしたねー」

まるで嵐のように魁と都月と終が去ったその席で、喜一は素直な感想を漏らした。丁度賑わいを見せ始めた店内では、帰宅部の榊寺生の姿も見受けられた。

「あー、すっかり騙されたよな。まさかあの子が男とは」

「それもあるけどさ、もつと他にもびつくりしたっしょ？ 朝ちいのことか」

「ああ……」

圭都はトレイに敷いていた広告の端っこに書かれた文字を見ながら頷いた。それは、魁によって書かれた電話番号だった。もちろん、その番号は朝飛の家のものだ。

別に圭都が聞いたわけではない。喜一が勝手に魁に尋ねたのだ。なのに、その広告は圭都へと渡された。

「これ、どうすんだよ」

「仲直りしなよ」

不機嫌そうに問う圭都に、喜一はきつぱりと言った。

「朝ちいと。魁うちのおかげで、病気でも引っ越してもなくて、ましてや行方不明でも死んだわけでもないことが分かった。それから電話番号も分かった。じゃあすることは一つしかないだろ」

「……………」

圭都は何も言わない。喜一が責めるようにその姿を見る。

しばらく二人は動かなかった。が、それに観念したのか、気まずい空気に耐えきれなかったのか、何も言わなかった代わりに圭都はその広告を丁寧に折り畳み始めた。その様子を、喜一は満足そうに見ていた。

「喧嘩別れに近かったっしょ。だから謝って、また三人一緒に……………」

「……………いまさら」
綺麗に折り畳まれた紙は、期待を裏切って喜一の手元へと置かれた。

圭都が持って帰る気は毛頭無いらしい。

「今更何を言うんだよ？ どうせ俺等のことなんか忘れてるに決まってる。じゃないと、半年近く連絡も無いはずがねえだろ。なのになんで俺がわざわざ、」

「心配してたくせに」

「……してない」

「後悔するよ！」

「しない。大体、俺は悪くない。さきに約束を破ったのは向こうなんだから、俺が謝る必要なんて」

「『無い』って言ったら、おれは圭やんを殴るからね。朝ちいを泣かせたのは圭やんだからね」

グーで殴るよ、と喜一は圭都を睨んだ。

「泣かせてねえよ。桐生、泣いたことないじゃん」

「圭やんのガキ。バーカ。このサッカー馬鹿」

いつになく突つかかってくる喜一にほとほと困った圭都は、ただ頭を掻くしかなかった。

「……はあ。引越しても病気でなんでもなかった。ただの中退だった。それでいいじゃん。もうそれ以上関わらなくなつてさ。俺等とはもう関係無い。桐生だって、理由があつたから何も言わずに学校辞めたんだろ？」

何も言えなくなった喜一を見て、圭都はやつと席を立つ。トレイを片付けながら、帰り支度も一緒にすませる。

「……そうだ、ブルーハーツのCD」

ぼつりと、思い出したように喜一が呟いた。思い出して欲しくないことだったのか、圭都はそれに聞かえないふりをする。

「朝ちいに貸したまんま、まだ返ってきてないって言ってたじゃん。それを返して貰うついでに」

喜一が、番号の書かれた紙切れを差し出してくる。どうしても譲る気は無いらしい。そこまでして、あの時に戻りたいとも言つのか。圭都はその紙切れを奪い取るようにして、そしてすぐにトレイの上のゴミの山へと押し込んだ。

「お前、しつこい」

それを見て、喜一の表情が一変した。

「もうおれ知らねー。一生意地張ってる！」

相当頭に来たらしい。自分の食べた分も片付けずに、喜一は店を飛び出していった。残された圭都は、静かに二人分の後かたづけを始める。

「……今更、何を話すんだよ」

心からの問いかけだった。だが、それに答えてくれる人はいなかった。

* * *

「……しっかし、よくもここまで調べ上げたな」

どこぞの観測者顔負けの情報収集力には感嘆の声をあげるしかなかった。遠藤双子が調べた桐生家の情報は、魁が知り得なかったことまで突き詰めていた。もちろんその中には、空夜が先端恐怖症であることもきっちり書かれていた。

「食器を落として割った際に、その飛び散った破片を見て怯える桐生家の次兄の姿を、三忍衆である海老名桃実と四日市瑠璃が確認。当時桐生頭目と長兄は共に任務のため家を空けており、以前から次兄が先端恐怖症であることを知っていた曾根崎柚希が対処した……か。なるほど、先端恐怖症は嘘じゃなかったのか」

それ以外にも、桐生に関する事柄が事細かに記されていた。イリア・スカイグラウンド 後の桐生イリアが桐生家を出ていった日まで。

「感謝してよねー。誰にもバレずにここまで調べ上げるの、大変だったんだから」

トリプルチョコレートサンデーを頬張りながら、都月は大袈裟に首を振って言う。

「おう。すっげー感謝してる。けど……」

「『けど』なんだよ？」

ルネサンス風三色ゼリーをスプーンで掬いながら、終が鸚鵡返しに聞く。これ以上何の不満があると言い出すのだろうか、この次期頭領は。

「この写真、間違ってるぞ」

ひら、と魁が見せた写真には、今より幾分か幼い朝飛と空夜が映っていた。大体小学校低学年程度だろうか。

写真に書き込まれたメモは、朝飛の方に『桐生空夜』、空夜の方に『桐生朝飛』と走り書きがされていた。まったくの反対である。

「うっそだー。都月ちゃんが間違っはすないもん」

魁から写真を受け取って、都月は拗ねたようにそれを見つめた。

「嘘じゃねーよ。黒眼の方が朝飛で、碧眼の方が弟だぞ。そのメモ、正反対のこと書いてるじゃねえか」

「これで合ってるよ。これは桐生兄弟が成りかわりしたときの写真！」

「『成りかわり』？」

馴染みの無いその単語に、魁は怪訝な顔をする。

「桐生家が体術の次に得意とする、つまりは『変装』みたいなものだな」

終がスプーンをぶらぶらと弄びながら、大まかな説明をした。ややこしい話だが、ここに映っている『朝飛』は空夜が成りかわった姿で、『空夜』は朝飛だと、そう言いたいらしい。

「へえ……」

まじまじと写真を見つめ、魁は素直に驚いた。

「それにしてもよく似てんな。もし成りかわられたら、見分け付かねーよ」

写真の中には、入れ替わった二人以外にもう一人人物が写っていた。朝飛と同じ薄茶の長い髪に、空夜と同じ碧眼。二人の母親、イリア・スカイグラウンド。意志の強そうな瞳が印象的だった。

魁が見ている人物が分かったのか、都月が覗き込む。

「綺麗な人だよ」

魁がそれに頷こうとして、携帯の着信音が鳴り響いた。サブ画面には『火之基志保』と名前が出ている。

「もしもし、オレだけど。どした？」

『魁！ あんた今どこに居るの?!』

ほとんど叫んでいるような声色だった。そのおかげで会話が漏れていた。双子が聞き耳を立てているのがいやというおど分かる。

「ファミレスだけど……お前は？」

『桐生家！ あんたもさっさと帰ってきなさいよ！ 仮にも居候させてもらってるんだから！』

怒っている、というよりは切羽詰まっているようだ。何がどうなっているのか、肝心のところが全く話されていない。

「何かあったのか？」

『桐生頭目が帰ってくるって、さっき連絡があったのよ!』
ひゅー、と終が口笛を吹くのが聞こえた。

桐生の忍 影送り組曲

桐生の忍 影送り組曲

思いがけない出来事の幕開け。

19・写真 Resemblance brother (後書き)

閑話「箱庭ツインズ」(前書き)

【一卵性双生児】

1 個の受精卵が分裂して双子になったもの。
二遺伝子が同じため、同性で外見、性格などが非常によく似ている。

閑話「箱庭ツインズ」

「二人とも、そっくりね」

幼かった頃、そう言われるのが堪らなく嬉しかった。

自分達は何処をとっても同じで、眼も口も手も足も同じ。確かに別々の人間なのに、歩く速さも思考の仕方も、全てが同じだった。

双子だということが、誇りだった。まるで鏡に映したように寸分違わない自分たち。終が嬉しいときは、自分が嬉しいとき。終が悲しいときは、自分が悲しいとき。それが、自分達にとっては当たり前で。

だから、ずっと同じでいるんだと思っていた。終も、きっとそう思っているんだと、勝手に勘違いしていた。

自分達は何処までも同じだったから。

* * *

「同じ人間なんかいらないんだ！」

都月と喧嘩する事なんてほとんど無かった俺が言った、最初で最後の恨み言。

きっかけは、本当に、些細なことだった。大好きだった苗木之下

の先生に、見分けてもらえなかっただけ。
見分けられなかった原因は、付けていた名札。この先生だけは俺達を見分けてくれていたから、からかおうと思ったのだ。そして、ほんの悪戯のつもりで都月と名札を交換した。

「どうしたの？ 都月くん」

そう、ただの遊びのつもりだった。

だから、俺の手を引きながらそう言った先生が、信じられなかった。他の人から、都月と見間違われることなんて、よくあることだったのに。

この先生が今まで俺達を見分けていられたのは、名札があったから。その事実が、子供だった自分には途轍もなく悲しいことだった。そして言ってしまった、冒頭の一言。

その時の都月は、ずっと信じていた神様が何かに裏切られたような顔をしていた。たぶん、俺も同じ顔をしながら叫んでいた。俺達は、驚くほど似通っていたから。

* * *

「お前等って、本当に似てるよな」

ついこの間までは最高の誉め言葉だったのに、終の本当の気持ち

を聞いてからはただの嫌味にしか聞こえなかった。

目の前で、両手を頭の後ろに添えた魁は少し困ったように自分を
見た。あまり見ないで欲しかった。今の自分は酷い顔をしているに
違いなかったから。

「ここへ来る前に終を見かけたけど、アイツも泣いてたぞ」

きっと魁には一生分からない。ずっと同じでいてくれると思って
いた人に、同じでいることを拒絶されたた淋しさなんて。

「終に、いらなくて、言われた」

どうすればいいか分からない。自分達はどう足掻いても似ている。
似すぎている。

双子になんて、生まれたくなかった。

全部吐き出すみたいに言うと、魁は右手で乱暴に頭を撫でてきた。
「ちゃんと仲直りしろよ」

喧嘩なんてしたことなかったから、仲直りの仕方が分からなかつ
た。

* * *

俺が酷いことを言った次の日、都月は髪に青いリボンを付けてい
た。

「こつやったら、見分けがつくよ。だから」
「いらなくて言わないで。」

そう言った都月の眼はうつすらと赤くて、ああ、やっぱり自分達は何処までいっても同じなんだと思った。俺の眼も、赤かったから。「これからは終のお姉ちゃんになるね。そうしたら、誰も、見間違うことなんてないから、大丈夫だよ」

大丈夫。そう繰り返す都月が、やっぱり自分と同じ顔で笑った。

「妹の間違いだろ」

上手く笑えたかどうか、自信が無かった。ちよつとでも油断すれば、泣きそうだった。都月も同じ気持ちなら良いのにと、少し思った。

その日から、都月は自分のことを名前で呼ぶようになった。

* * *

「二人とも、そっくりね」

そう言われると、やっぱり今でも堪らなく嬉しいのだけど、自分はずわざと拗ねたふりをして反論する。

「全然違うよー。都月ちゃんは都月ちゃんで、終は終だもん。ねー」隣で頷く終を見ると、ほっとする反面、少しくりと胸の深い部分が痛くなる。

それに気が付かないふりをして、今日もあの子と同じこの髪にリボンを結ぼう。

桐生の忍 影送り組曲

(閑話休題。
2007/4/28)

閑話「箱庭ツインズ」(後書き)

【閑話休題】

それはさておき。話を戻して。

話を本題に戻すときに、接続詞的に用いる語。

20・父親 Why, why to why?

「おかえり……どしたの？ そんなに慌てて」

「ぜえぜえと肩を上下させて、酸素を目一杯補給する魁を見て放たれた一言。居間ではのんびりポツキを食べる空夜と、居間の中をうろろろする志保。それから、

「なんでお前がさも当たり前前の様に帰って来るんだ、この巻き貝！

空夜様、のんびり『おかえり』なんて言っちゃ駄目ですよ」

「柚希が怒った。

「だって『いらっしやい』って感じでもないし」

他に何て言うの、と空夜が訊ねてきて、柚希は言葉に詰まっていた。なんだかいつも通りだ。一応廊下や部屋の中を確かめてみるが、そこに桐生頭目 桐生冬悟の姿は無い。それを確認して、魁は志保が詰め寄った。

「おい、帰ってねーじゃん」

「これから帰ってくるのよ、馬鹿ね」

「なんだかあっさりにはね除けられた。なるほど、これは間に合った良かったと思っべきか。全力疾走した所為で酷く疲労した魁は、はあ、と盛大に息を吐きながら畳の上にしゃがみ込んだ。

その背中を容赦なく柚希が蹴る。

「お前、くれぐれも桐生頭目に失礼の無いようにしろよ」

「わーってるよ。仮にも居候させてもらってたんだ。ちゃんと礼言つて、」

その台詞は最後まで言うことが出来なかった。柚希が魁を無視して後ろへと振り返ってしまったのだ。それに文句を言おうとして、それすらも魁には出来なかった。

そこに、この場で最も権力を持つ人物が現れてしまったからだ。柚希が畏縮したように固まる。

「あ……お、お久しぶりです」

「柚希か。久しぶりだな」

目の前の人物は頷く。空気が重い。志保も魁も、一体何を話せばいいのか分からない。こんなとき、朝飛が居てくれたらなんとかなったのだろうが、今は残念ながら居ない。

「おかえり」

そこで、空夜が何事も無いように声を出した。相変わらずポツキ―を食べたままで。

「ああ、ただいま。なんだ、また学校に行っていないのか」

桐生冬悟が、静かに声を出した。

「……行ってるよ。今日もちゃんと行った。志保と」

「わ、わわわ、私!？」

突然話題を振られて慌てふためく志保。そんな彼女を見て、やっと見慣れない顔があることに気付いた冬悟は、静かに記憶の糸を手繰り寄せる。

「志保？ 確か、火之基の長女がそんな名前だったか」

「は、はい。えっと、初めまして。空夜さんと朝飛さんと仲良くしてもらってます、火之基志保です。あの、えっと、お邪魔してます……」

それに続くように、魁もやつと声を出す。

「オレはこの家に居候させて貰ってます、鰐木魁です。鰐木の家には養子縁組された、元苗木之下の忍です」

次々と自己紹介をされた冬悟は空夜へともう一度向き直る。

「珍しいな、お前の友達が家に遊びに来るなんて」

論点が少しずれている。

「いや、他にもっと聞くことないの？」

「……友達じゃないのか？」

「あ、そこなんだ、父さんの着眼点。いやそうじゃなくて、この二人、他忍だよ？ 火之基とか鰐木とかの直系だよ？ なんでここに居るとか、色々聞くことが……まあ、いっか」

ぱきつ、とまた一本ポツキ―を口にくわえて空夜は面倒臭くなっ

たことを身体全体で表現した。

それを見て冬悟もこれ以上の会話を諦めたのか、代わりに袖希へと声を掛ける。

「袖希。どうして二人も他忍が居るんだ？」

「それはその……何から話せば良いのか……」

取りあえず事の発端である『志保が朝飛に斬りかかってきたこと』から言うべきか、それとも『魁が犯人探しをしていて、朝飛が疑われたこと』から言うべきか、袖希は頭を悩ませる。

それを見て長くなると感じたのか、冬悟は要約してくれて良い、と一言言った。

「はあ……ここ最近忍殺しが多発してしまっていて、その犯人探しをするために朝飛様と空夜様とと一緒に捜査なされているんです」
「なるほど。で、犯人は見つかったのか？」

「いいえ。警察も、連続通り魔事件として行方を追っているようですが、まだ犯人の消息は掴めていないようです」

その二人の会話に割ってはいるようにして、志保が声を発した。

「でも、絶対に見つけます。見つけたして、罪を償わせてやります」

「そうか……。良かったらその事件とやらが解決した後も、朝飛や空夜と仲良くしてやってくれ」

冬悟が志保にそう言うと、空夜が鬱陶しそうに否定した。

「いいよ、別に仲良くしてくれなくたって」

「見ての通り、空夜はあまり人と関わりたがらない所為か、あまり友達らしい子を見かけたことがない」

断言された。空夜は気まずそうな顔をして、何も聞こえないふりをする。親に自分のことを話されること恥ずかしいものはない。ましてや余り良いことではない話なら尚更だ。

「朝飛に至っては、もう学校を辞めてしまっているから、人と関わる機会が少ない。こんな家業だから仕方ないと言えば仕方ないのだが、せめて同じ家業を継ぐ者同士、仲良くしてやって欲しい」

「もっちらんですよ！ 私、二人とはもう友達のもりですから！

ね、魁？」

「あ、ああ。そうだな」

満面の笑みで言う志保に、魁は気まずそうに笑う。どこのどいつが、朝飛に斬りかかったんだ、と。

袖希も同じ気持ちらしく、苦笑いしている。志保は嘘を付けられないようだから、たぶん本音なのだろう。だからこそ、その身の変わり様に引きつり笑いせざるを得ない。

「ありがとう。……袖希、少し疲れたから仮眠を取ってくる。それと、仕事が残っているから夜にはまた家を出る」

「はい」

ゴトン。

袖希が返事するのと同時に、何か重たい物が落ちる音がした。がさがさという袋擦れ音と共に響いたそれは、丁度冬悟の後ろの襖から聞こえた。

それから二秒と経たない内に、声がした。

「……いつ……帰ってきたの……」

開け放されていた襖の向こうの廊下では、朝飛が立ち竦んでいた。彼の右側には、中身が少し零れたスーパーの袋が落ちていた。買い物を終えて帰ってきたところらしい。

「さっきだ」

「……今まで何処に行ってたんだよ！」

突然叫びに近い大声を張り上げた朝飛に驚くことなく、冬悟は答える。

「仕事だ」

「そんなの分かってるよ！ 何処に、何をしに行ったのかって聞いてるんだよ！」

「極秘の護衛任務だ。それ以上は言えない。仕方ないだろう……」
それを聞いて、朝飛は左手に持っていた郵便物を床に投げ捨てた。相当頭にきてるのか、こんなにも感情の起伏が激しい朝飛を、魁も志保も見たことが無かった。そもそも、物に当たる彼を想像することすらなかった。朝飛には穏やかな雰囲気しか浮かばなかったのだ。

「仕方ないって……それにしたって、せめて連絡くらいしてくれても……！」

「話なら今度聞く。今日はまだ仕事が残っているんだ」

「仕事……今度は何処に、」

「極秘任務だ」

繰り返されたその言葉に、朝飛の憤りは膨れあがった。

「また、それ………それでも家族かよ!? いつもいつも急に何も言わずに出ていって、いつの間にか帰ってきて、どうして………なんで、なんでそれで何とも思わないんだよ! 突然、いままで当たり前に居た人が消えるのが、どれだけ不安になることか分かってんのかよ! どれだけ怖いことか、分かってんのかよ!? なんで………なんで分からないんだよ! 仕方ないって、なんでそんな簡単に、なんで、」

「朝飛様」

息を荒げて、それでも何かを話そうと錯乱しかけている朝飛に向かって、柚希がいつもと同じ声で名前を呼んだ。その声で、我に返ったように朝飛の動きが止まる。

柚希はそんな彼を見て、冬悟と彼の間投げつけられた郵便物を拾い、静かにそれを朝飛へと渡す。

「手紙、落としましたよ」

「あ………」

大人しく、先程自分が投げつけたそれを受け取る。柚希はそれを

見て微笑むと、朝飛が最初に床へ落とした買い物袋を取り上げ、中身を元に戻していく。

その横を、冬悟が何も言わずに歩いていった。仮眠を取るために、離れにでも行くのだろう。

朝飛はただ立ち尽くしていた。

21・相違 Who are you?

あの子の朝飛は、誰の目から見てもおかしかった。

気まずさを感じた志保が家路へと付き、今朝の朝ご飯の時と同じように、空夜と魁と柚希は朝飛の作った料理を食べた。

その夕飯がまたすごかった。

「これ……?」

テーブルの上に出された物を見て、魁が戸惑いを隠せずに言う。彼が指差したのは、調理されて無いそのままの状態のきゅうり、人参、トマト。それから、スーパーでよく売っている御惣菜の数々。ごぼうサラダや唐揚げなどがパックのまま置かれていた。いつもなら皿に入れ替えるくらいするのに、それすらもしていなかった。

御惣菜を出すのは良いとして、問題は野菜達だ。これをどうしろと言うのか。

「食べたくないなら、食べなくていいよ」

朝飛は至って普通に言う。自分は食べる気が無いのか、箸すら出していい。三人分の割り箸がテーブルの上にあるだけだ。

「兄さん、マヨネーズ取って」

「はい」

空夜なんかは、何も言わずにいつもどおり食べている。出されたきゅうりにマヨネーズを付け、ぽりぽり食べていた。

柚希もまた同じだ。トマトをそのまま食べている。

魁も二人を見習って、きゅうりに手を付けた。いつもに比べて余りにも違う献立に物足りないと思いつつ、自分も大分ここに馴染んでしまったなと思った。

「……っていうかさ、桐生頭目が帰ってきたけど、オレはまだここに居ても良いのか?」

「いいよ。どうせ父さん、すぐに仕事に行くんだから」

コップを手に取りながら、素っ気なく朝飛が答えた。

「帰れ帰れ。さっさと鰐木の家に帰れ、この二枚貝」

「お前には聞いてねーっつの、柚希」

魁の反撃など無視して、柚希は朝飛を伺うように見る。

「朝飛様。後片付けなら俺がやっておきますから、少しお休みになられてはどうですか？ 顔色が優れないようですし……」

「うん……じゃあ任せる」

柚希の言葉に素直に頷いて、朝飛は立ち上がった。疲れた表情のまま、階段のある方へと廊下を歩いていった。

その後は、特に何もなかった。いつも通りの下らない会話。下らないやりとり。途中で冬悟が家を出る音がして、慌てて柚希と自分で見送りに行った。空夜はテレビを見ていた。それだけ。

そして、今に至る。

魁は夕方、鰐木の双葉からもらった資料を一つずつ読んでいた。借りている布団の上で仰向けに寝転がり、電気に透かすようにして情報を頭に入れていく。

その中でも、やっぱり気になるのは桐生兄弟の成りかわりだ。こんなにも上手く入れ替わるのだから、今でも出来るのかも知れない。出来たところで、どうするんだという話だが。

だが、もしも入れ替わっていたとしたら。

「……あの時の……」

思い出すのは、いつぞやの庭で見た朝飛。ただひたすらに「間違っってなんかいない」と自分を庇護していた、彼。

あの時の彼は、いつもと違うように見えた。暗がりだからそう見えたのかもしれない。だが、考え出したら止まらない。

「あれが、空夜と朝飛が入れ替わった後だとしたら………一体何の為に……？」

入れ替わるのには、理由があるだろう。あるとしたら、一体何故。魁の脳裏に甦るのは、狐の面についた赤い液体。

朝飛の外見に傷は見受けられなかった。ならば、誰かの返り血。それ以外に、あの液体を説明するものが見当たらない。

「忍を、殺した……？」

まさか。魁は自分の考えを振り払うように首を左右へ激しく振った。それでは、おかしいではないか。空夜がもし朝飛と入れ替わっていたとしても、空夜は先端恐怖症なのだ。刃物を扱えない。

空夜は忍殺しではない。忍殺しの共通点は、刃物ですたずたに殺しているところだ。

「あー、畜生。頭がこんがらがってくる」

ばさつと資料を床に置き、飛び起きるようにして布団の上に立つ。まだ、知りたいことがある。

魁は電話のある居間へと歩いていった。

小さなマンションの一室。可愛らしい表札が下がっている505号室からは電話の呼び出し音が響いていた。表札には『遠藤 終・都月』と書かれていた。

部屋の中はダイニングキッチンを真ん中にして、両側にそれぞれドアが付いている。入って右側には『終の部屋』と書かれた水色のドアプレート。左側には『都月ちゃんの部屋』とかかれた桃色のドアプレートが掛かっていた。

その内左側のドアが開いて、都月が慌ててダイニングにある電話を取りに出た。

「もしもーし？ 呼ばれて飛びでてぱんぱかぱーん！ お花の妖精、都月ちゃんだよー」

「もしもし、オレ」

「あ、魁だー」

「都月か？ 終にかわってくれ」

どうやら自分ではなく終に話があるようだ。都月は改めて言い直す。

「あれ？ 都月ちゃんはお呼びでない？ じゃあ言い直すね！ 呼ばれなくても飛びでるぱんぱかぱーん！ 地上に舞い降りた天使、都月ちゃんだよー！」

「……そのテンションを下げられるなら、別にかわらなくても良いけどな……」

「ぶー。分かったよ、ちょっと待ってね。終ー、魁からお電話だよー」

自分の向かいの部屋に向かって声を出すと、終が怠そうにドアを開けて出てきた。

「また魁かよー……ったく」

受話器をしっかりと片割れに渡すと、都月は電話を気にしながらも自分の部屋へと戻っていった。

「かわったぞ。お前、都月を邪険に扱ったら許さねえからな」

「ごめんて。あのテンションでするような会話じゃなかったんだよ」

終は電話を持ったまま手前の椅子に腰掛ける。長くなりそうだ。

「なんだよ？」

「調べてもらいたいことがある」

「つかー！ またかよ……桐生家の資料なら渡しただろ？」

非常に嫌そうに返す終に、申し訳なさそうに魁は話す。

「ああ。今度調べて欲しいのは、曾根崎柚希についてだ」

「そねぞきゆずき……？」

『桐生家の三忍衆の一人。鰐木で言うところの双葉みたいな役だ。その内の一人に、曾根崎袖希って言う奴がいるんだけど、こいつだけ何だか特別な感じがするんだよ。他の三忍衆とは少し違うと言うか……』

勘だけだな、と付け加えられた言葉に、終が溜息を漏らす。魁の勘は案外当てることになるのだ。

そして今回ばかりは、その勘の良さに敬服してしまう。

「たぶん、その勘、当たってると思うぜ」

終や都月だって、調べることはきちんと調べている。桐生家と関係が深そうな曾根崎袖希についてもまた然り。終達は袖希のことももちろん調査済みだった。

『じゃあなんで資料に無かったんだよ？』

「資料にするほどのことじゃ無かったからさ。ちょっと待っとけよ、調べた結果の紙、取ってくるからよ」

そう言って保留ボタンを押すと、終は自分の部屋ではなく都月の部屋へと向かった。ドアの前にたつて、ノックをしようとする右手を出す。

その瞬間、突然ドアが開いた。都月が「喉渴いたー」と呟きながらドアを開けたのだ。

終が目の前に立っていたことに驚いて、都月はぱあっと笑顔を見せた。

「……………凄いね凄いね奇跡だね！ ミラクルだね！ ちょうど都月ちゃんがドアを開けたと同時に、愛しの半身、終がドアの前に立ってたよ！ 凄いよ凄いよまさに奇跡だよ、これを奇跡と呼ばずにしてなんと呼ぶんだらうね！」

「……………偶然って呼ぶんじゃないのか？」

「都月ちゃんは今、全米が涙するほどの感動で町中を駆けだしちゃいそう！ 嘘だけど！」

「落ちてマイブラザー」

言って、すぐにぺしっと都月に頭を叩かれた。

「ちっがーう！ 何度言えば分かるのこの馬鹿ちゃん！」

「分かった、分かったから！ お願いだから落ち着いてくれマイシスター！」

「へいへーい、了解しました。で？ なにかな、マイブラザー？」
確かに、このテンションでするような会話ではなかったな、と心の中で思いつつ、終は目的の紙を要求する。

都月は再度部屋の中に戻って、机の引き出しから薄っぺらい一枚の紙を持ってきた。紙に右上部には、笑っているわけでも怒っていないわけでもない、無表情の柚希が写った写真が貼り付けられていた。それを手渡して、今度は都月も一緒になって電話の近くに行く。どうやら会話に参加したいらしい。

保留ボタンをもう一度押して、終が受話器を持った。

「もしもし？ 今から調べた結果言っぞ」

『頼む』

ぺら、と都月が持ってくれている紙の上から、順番に声を出して読み上げていく。

「曾根崎柚希。

桐生家三忍衆の一人で、次期頭目と言われている桐生朝飛の側近を自称している。

年齢不明。

血液型不明。

出身地不明。

生年月日不明。

学歴不明。

家族構成不明……」

『ちよ……ちよっと待て、』

魁の声を無視して、終は決定的な一言を述べた。

「本名、不明」

受話器の向こうで、魁が絶句しているのが分かった。

「な？ 資料にするほどのことじゃ無かったら？」

『全部……不明じゃねえか……』

「忍にはよくあることだけどね」

そうだ。自分達だって、ほとんどが不明の部分が多い。誕生日なんかも、苗木之下で決めてもらったのだ。

だが、柚希と自分達には最大の相違点がある。

『柚希は、苗木之下に居たのか……？』

「いや。曾根崎柚希は一度も苗木之下に居たことがない」

それだけが相違点。だが、あまりにも違いすぎる点だった。

直系でない人間が忍になるには、身元がはっきりしていなければならぬ。終や都月達が鍔木の双葉をやっていられるのも、苗木之下という後ろ盾があつてこそだ。

それが、苗木之下も無しに三忍衆という役職に就き、あまつさえ時期頭目の側近を自称している。

『あいつ……一体何なんだ……？』

「こつちが聞きたいね」

何かがある。魁にも、終にも都月にも、それしか分からなかった。

桐生の忍 影送り組曲

総意なる相違。

21・相違 Who are you?

(後書き)

22・相異 Do you believe him?

「とにかくだ。あんまり足を踏み入れるんじゃないやねえぞ、魁。仇討ちだかなんだか知んねえけどよ、お前は仮にも次期頭目なんだ」

「分かってるさ。ほどほどにしとく。色々と迷惑かけたな。また桐生家について何か分かったら連絡してくれ」

これ以上小言を言われないように、そそくさと受話器を下げた。

さつさと部屋に戻って、また一から考え直さなければ。魁は反対側を向こうとして、やめた。

否、向けなかった。

首元に、小さな刃物が宛われていた。

「他人のことを影で詮索するのは、あまり良いものとは思えないけど？」

朝飛が小刀を魁に当てたまま、後ろから声をかけた。小さなこの刀には見覚えがある。魁が鍔木の家から持ってきた小刀『小夜風』だ。いまは寝泊まりさせてもらっている部屋に置かれているはずだが、ここにあるということは。

「お前こそ。人の部屋に勝手に入るのは良くないと思っぜ？」

「僕の家だ。僕がどこに居ようと構わないだろ」

その通りだ。朝飛は静かに『小夜風』を下ろし、それを同時に魁は後ろへと向き直った。朝飛は夕食から続いて不機嫌な顔を隠そうとせず、じつと魁を睨んでいた。

「随分と調べてくれているみたいだね。そんな時間があるのなら、

忍殺しの犯人でも見つけたら？」

「忍殺しの犯人を見つげるために、調べてんだよ」

「まだ僕のことを疑ってるんだ？」

ふわりと笑った朝飛の顔は、どこか悲しげだった。本当のことを話してくれない癖に、何勝手に傷付いてるんだ、と魁は憤りを感じた。

「お前だけじゃない。何もかもが不鮮明すぎる。お前、本当は次期頭目じゃないんだってな？」

朝飛の瞳孔が少し開いた。

「双葉から聞いた。周りは勝手にそう呼んでいるが、お前自身はただ次期頭目になると表明していない。こちら側でも、あちら側でもない。そんなグレーゾーンに居てどうするんだよ？」

「僕の勝手だろ。そんな簡単に決められるものじゃないよ、頭目になるだなんて」

「お前は、桐生の頭領に……五忍樹の長になりたくないのか？」

朝飛は首をゆるゆると振る。そのたびに、母譲りの薄茶色の髪がぱさぱさと流れた。

「いずれ、ちゃんと表明はする。それで良いだろ。もう放つというよ」

「……これ以上関わると、ただじゃ済まないよ」
小夜風を持った腕が、すっと伸びる。向けられた刃に、自分の勝ち気な笑みが映った。

「へえ。一体どうするって言うんだよ？」

「お前は、」

「……これ以上関わると、ただじゃ済まないよ」

小夜風を持った腕が、すっと伸びる。向けられた刃に、自分の勝ち気な笑みが映った。

「へえ。一体どうするって言うんだよ？」

迎え撃つ気まんまんな魁に大してにんまりと朝飛が笑い、魁へと向けていた小夜風を持ち替え、彼へと丁寧に戻した。

「こうする」

すう、と息を大きく吸って、吐き出す。

「ゆーずーきーくーん！ 魁がいままさに僕へと刃物を向けて斬りかかるうとしているよー！」

そういえば、今日は桐生家に柚希が泊まりに来ていた。魁が焦って小夜風を仕舞おうとじたばたしていると、案の定風呂上がりの柚

希が物音を立てながら大声で叫んできた。水色のチエツク模様のパジャマを着て、それはもう鬼のような形相で走ってきた。

「ピアス野郎　　！　このっ、もう容赦しないからな！　よくも朝飛様を傷付けようだなんて！」

「待て！　違う！　これは違うんだ！」

慌てて小夜風を持った手を後ろへ隠すが、首にタオルを巻いた柚希は言葉通り容赦なく蹴りを繰り出す。

「刀を持ちながら言っても無駄！」

「違う！　これは朝飛が、」

「それで朝飛様に危害を加えようとしたのか！　朝飛様のご好意で桐生家に居候させてもらっておきながら、恩を仇で返すなんて！」

濡れた髪をばさばさと振りながら、信じられないと言った様子で柚希が声を張り上げる。

もう魁の声なんて聞く気は無いらしい。

「ごめんね、ゆずきくん。お風呂上がりだったんだね」

「いいえ、お気になさらないください。朝飛様が危機に陥つているときに、髪の毛なんて乾かしてられません！」

喋りながらも、魁への攻撃は怠らない。いまはいつもの針銃が無いからか、隙あらば小手返しをしてやろうと関節技をかましている。

「待て待て待て！　柚希、これは誤解だ！　オレは何もしてない、むしろされてた方だ！」

「この際もうどっちでもいい！　お前は前から鬱陶しかったんだ。その大量のピアスとか。丁度良い」

「おい！　それ私情じゃねえか！」

口喧嘩にも発展してきた二人から目を離し、朝飛は壁にかかった時計を見た。夜の十時過ぎ。今日は色んなことがあって少々疲れた。自然と欠伸が漏れる。

「じゃ、ゆずきくん。僕はもう寝るから、あとはよろしくー」

「ちよつと朝飛、こいつを何とかしてくれ！」

魁が助けを乞うが、さらりと無視して柚希へと話を続ける。

「そつだ。今日は僕、一人で寝たいから離れて寝るね。ゆずきくんは客室を使つて」

「はい、分かりました！ このピアス野郎のことはお任せ下さい！」
柚希が返事をしたのを確認して、朝飛は居間から出ていった。柚希は嬉々として両手をボキボキならす。喧嘩上等、そんな雰囲気だ。
「そう言えばこの前、よくも天井を突いてくれたな……あの時の仕返しもしてやる！」

いつも通りの柚希だ。当たり前だ、自分はこれを本当の柚希だと勘違いしていたのだから。

そんな彼に、魁はいつもの様に減らず口をたたくことが出来なかった。複雑な顔をして、柚希を見ることが出来ない。

そんな魁に拍子抜けしたのか、柚希が面白く無さそうにした。
「なんだよ、調子狂うな……言いたいことがあるならはつきり言えよ」

そつだ。直接聞けば良いだけの話。いつまでも蟠りの残った状態では、今までのように接することも出来ない。

魁は持っていた小夜風を、柚希に悟られないようにかまえ直して声を発した。

「じゃあ聞くけどよ、お前、何なんだよ？」

「何度も言ってるだろこの馬鹿貝。俺は朝飛様にお仕えする、桐生の」

「そんな簡単な肩書きじゃない。お前、本当は『誰』なんだよ？」

「はあ？ 俺は曾根崎柚希、それ以外の何者でも無いね」

当たり前のように返される答え。だが、魁が聞きたいのはそんなことじゃない。

曾根崎柚希は、目の前にいる人間の本当の名前ではない。

「偽名なのにか」

柚希の手がぴくりと動いた。さっきまでの表情は一変して、警戒しているのが伺えた。

「……お前、首突つ込みすぎだ」

「ご忠告どーも。オレは知りたがりなんでね。で？ 本当は何て言うんだ」

「本当も嘘も何も無い。俺は曾根崎柚希だ。曾根崎柚希なんだ」
偽名だとばれておきながら、その名を貫く。

魁がまだ何かを言おうとしたが、柚希はもう何も話すことは無いとでも言いたそうに、その身を翻した。タオルで、もう半分乾ききった髪を拭く。

「一つ言っておいてやるよ。これ以上首を突っ込むと、ろくなことにならない」

「朝飛にも言われた」

朝飛、という固有名詞が出て柚希の肩が動く。そして自嘲にも似た笑みを零して、魁を鼻で笑った。

「忠告は、受け取らないとただの戯言だ」

「そうだな。柚希、お前は敵なのか？ 味方なのか？」

暗に、聞く。お前が忍殺しをしたのか、と。

決して口には出されないその言葉を、柚希は己の口で伝える。

「信じるのはお前次第だけど、俺は忍殺しの犯人じゃない。敵か味方かは、お前の決めることだ」

そう言っつて、柚希は居間から出ていった。残された魁は頭を掻いて立ち尽くしていた。

* * *

「失礼します」

「どうぞ」

静かに開けられた襖の向こうには、柚希が居た。

朝飛は布団の上で俯せになって読んでいた本を閉じ、ゆっくりと起きあがって、畳の上で正座する柚希と向かい合った。ここは空夜との共同部屋とは違って和室になっている為、ベッドではなく敷布団を出して寝ている。二人が中学にあがってからは、こうやって別になって寝ることも多くなった。

朝飛は目の前で畏まって座る柚希へと声をかけた。

「どうしたの？」

「いえ、今日はお気分が優れないようでしたので、一応念のために薬をお持ちいたしました」

そう言う彼の隣には、小さめのお盆に乗せられた湯飲みと薬。

「あー、今は大丈夫。まさか父さんが帰ってくるとは思わなくて、ちょっと動揺しただけ」

「動揺と言うよりは、錯乱といった感じでしたけど」

はつきりと告げられ、朝飛は困ったように笑う。

「そう？ ゆずきくんは大袈裟だね。そうだ、魁とはどうなったの？」

「関節技を決めてやろうと思ったのですが、今回はやめておきました。湯冷めしますし。……というか、いつまで鰐木魁を桐生家に置いておくおつもりなんですか？」

かなり不満そうに言う柚希に苦笑して、朝飛は答える。

「魁、いろいろ嗅ぎ回ってるみたいだね。まだ疑われているみたいだよ、僕。ゆずきくんは何か言われなかった？」

「いいえ、特には」

「そっか」

欠伸を噛み砕いて朝飛は返事をする。睡魔が会話の邪魔をする。

柚希はさっきよりも真剣な表情で朝飛を見やった。

「一体、どうするおつもりですか？ このままずると一緒に居ても、」

「馴れ合っている訳じゃないよ。僕には守らなくちゃいけない約束がある。その約束に、魁を巻き込むなんて真似はしない。誰も、決して」

巻き込まない。

自分に言い聞かせるように言う。

「僕が、空夜を守らないといけないんだ」

ぴしゃりと切り捨てられるようなその言葉に、柚希は聞き返す。

「それは、誰も信じていないからですか？」

図星だったのか、朝飛は何も言わない。そして柚希も、その反応に何も言わない。

沈黙が続くと思われたが、すぐに朝飛がふわりと笑った。

「ゆずきくんのことは、信じてるよ」

真っ直ぐに伝えられたその言葉に、柚希も笑う。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。そうだ、明日も三忍衆に仕事が入ってたよね。社長令嬢の護衛だっけ」

予定表が無いため、うる覚えの記憶ではどこか不安が残る。

「ええ、そうです。午前六時に海老名さんと四日市さんと待ち合わせしています。では、朝が早いのでこのへんで失礼しますね」

客室お借りします、と丁寧な頭をさげて、柚希は来たときと同じように静かに襖を開けた。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

す、と閉じられた襖。柚希は誰にも聞き取れないくらい小さな声でぽつりと呟く。

「信じてる、か……」

誰も居ない廊下。静かにその場を去った。

桐生の忍 影送り組曲

22・相異 Do you believe him?

(後書き)

僕等の世界は奈落の落とし穴。
見えない世界を、手探りで歩いてる。

23・想遺 Album of memories

「空夜ー、学校遅れるわよー！」

早朝から近所迷惑もいところだ。少女特有の高い声がこだました。その声によって目覚めた魁は、未だに半分眠ったままの脳を無理矢理働かせて、のそのそと四つんばいで廊下へと出た。

丁度自分の目の前を朝飛が慌てて走っていった。

彼がドアを開けると、そこにはいつものセーラー服を着て、やはりいつもの下駄『花風』を履いた志保が立っていた。

「おはよう、志保。今日は随分早いね」

「うん。だって学校に遅れるから」

「学校？ ああ、そっか、昨日から空夜と一緒に通ってるんだっけ？」

「そうよ」

はつきりと返事をして威張って見せる彼女に、魁はなんとも言えない表情を向ける。

確かに、自分は桐生家から何かを掴めるかもしれないと言ったし、空夜のことを調べるようにも言った。そして彼女は自分は自分なりのやり方でやると言ったし、自分もそれを許可した。

だが、まさか同じ学校に通うことになるとは思わなかった。予想を遙かに超えた彼女の行動に、魁はもう何も言うまいと誓った。

どこまでも大胆な行動をしてのける少女だ。朝飛へ真つ向と勝負を仕掛けたり、隠すことなく本音を話したり。同い年の空夜と比べると、考え方が幼い気もする。それとも、これが年相応の行動なのだろうか。空夜が特殊すぎて、魁には最早分からなかった。

「あ、おはよう空夜」

朝飛が起きてきた空夜へと声をかける。その挨拶には答えずに、空夜はぼそりと吐き出すように言った。

「……しんどいからヤダ」

パジャマ姿のまま、非常に嫌そうな顔をしている。元々滅多に学校へ行かない人間だ。二日連続で行くのは少々疲れるらしい。

「じゃあ保健室に行けばいいでしょ。保健室登校も立派な登校よ。何はともあれ学校なの、学校。行けるうちに行っておかないと後悔するって、志勇兄も言ってたし」

なんだか、志保は当初の目的を忘れていているような気がする。魁は誰にも気付かれないように頭を抑えた。もう彼女に頼るのはやめだ。結局最後に頼れるのは自分だけなのだ。

思い悩む彼の後ろでは、あまり乗り気では無い空夜が、気怠そうに声を出す。

「……袖希ー。起きてきて志保を追い払ってよー」

「ゆずきくんはもう仕事に出ちゃって居ないよ」

兄によって、最後の切り札は捲ることも出来ないまま終わった。

袖希はもうとつくに桐生家を後にして、今頃は任務に就いている頃だ。

空夜は諦めたのか、盛大に溜息を吐いて二階の自分の部屋へと階段をあがる。

「ちよつと、どこ行くのよ」

「制服に着替えてくる。それに、まだ七時半だよ……朝ご飯食べてないし」

「あ、そういえば私も食べてない」

どれだけ急いで来たんだ。朝飛は微笑とも苦笑とも取れない笑みを零して、志保を見やる。

志保はいそいそと靴を脱いで、勝って知つたる風に台所へと朝飛の背中を押しながら歩く。

「朝ご飯食べないとね。一日の活力、活力!」

「はいはい、志保も食べるんでしょ……」

呆れているような声を出してはいるが、一応いつもの彼の姿だった。昨日のあの不機嫌丸出しの朝飛とは大違いだ。今日はまともなご飯にありつけそうだと魁は一安心した。

「空夜も早くおりてこねえと、まじで遅刻すんぞー」
階段に向かつて声を張り上げると、空夜が「分かってるー」と間
延びた返事をするのが聞こえた。それを確認して、魁は、志保に
押されながらもなんとか早歩きで歩く朝飛の後を追った。

* * *

「ここか」

朝ご飯を食べ終え、志保と空夜が学校へと行き、朝飛に洗濯物を
手伝わされて、いつの間にか時刻は午前十一時を回っていた。

それから暫くして、朝飛が買い物をするために出掛けたのを見計
らって、魁はとあるマンションへと訪れていた。五階建てのこぢん
まりとした、古くもなく新しくもないマンションだ。

他のマンションと変わっているところと言えば、屋上の柵が壊れ
て無くなってしまっているところあるうか。住民の話によれば、大
分昔に壊れてから管理人が修繕すると言いつけているらしいが、直
された試しがないらしい。

それ以外は、何の変哲もないただの建物だ。

魁は、このマンションの510号室前に立っていた。一応念のた
めにインターホンを鳴らしてみるが、やはり中からの反応はない。
親切な住民が、ここの部屋の主は昨日から帰っていないのだと教え
てくれた。

これで間違いはない。表札にも、ちゃんと名前が書いてあるのだから。

魁はその名前をなぞるようにして読んだ。

「……曾根崎、ね」

ここでも偽名を通してしているらしい。魁は柚希の住まう部屋へと来ていた。

「分からないことは、自分で調べろ……ってね」

ポケットから取り出したバタフライナイフのような物は鍔木の先代が作った特別製で、様々な機能を兼ね備えた器具を仕込んである。その中にあるピッキング専用のものを取り出して、彼は素早くドアの鍵を開けた。端から見れば、普通に鍵を使って開けたようにも見える。

「鬼が出るか、蛇が出るか」

ふ、と昨日の二人の言葉が頭を過ぎった。

「これ以上関わるな」

それは忠告か、警告か。それでも魁は構うことなくドアノブを捻る。ここまで来て、引き下がることはしたくない。喩え後悔の念に囚われることになるとしても。

キィ、とドアの隙間から身体を滑り込ませるようにして、柚希の部屋へと入った。

「………なんにもねえなー………」

部屋の様相は良く言えば質素、悪く言えば殺風景なものだった。見た感じ、生活に必要な最低限の物しか揃っていない。入ってすぐにあるリビングには低めのテーブルと、オーディオはあるがテレビはない。壁には時計とカレンダー。色んな丸印や走り書きが書いてあるところを見ると、スケジュール帳代わりに使用しているらしい。

そしてリビングに向かい合う形で併設されたカウンターテーブル

式のキッチン。

ここも滅多に使わないのか、シンクが新品のように綺麗に光っている。黒い手袋をはめて、冷蔵庫の中身を拝見してみたが、予想通り栄養ゼリー系が大半を占めている。後はスポーツドリンクや牛乳、申し訳程度に入れられている野菜類。

次に隣の棚を開けてみると、カロリーメイトやクラッカー、即席麺類が買いだめされていた。いつかの朝飛の言うとおり、ろくな食生活をしていない。

「妙な部分はないか……」

ほっとしたような、がっかりしたような、微妙な気分でリビングの南側にあるドアを開ける。部屋はここしか無いらしく、寝室として利用しているようだ。こちらも、やはり殺風景だった。

ベッドに、机、備え付けの飾り棚、そしてクローゼット。折角壁の一部分を占領しているというのに、棚には殆ど何も置かれていなかった。僅かな本と、小さなサボテンが二つ。特に目を見張るようなところは無い。

「なんか、寂しい家だな……」

魁は素直な感想を漏らした。ここで必要最低限のことしかしていないのが見て分かる。帰る家というのは、もう少し温かなものではないのかと問いたくなる。

魁は机と揃いの椅子に腰掛けて、三つある引き出しのうち一番下の引き出しを開けた。日記でも見つかるかと思っただが、どうやら予想は外れたようだ。ほとんど空である。仕事の細かな資料を纏めたファイルや、朝飛から貰ったのだろうか、料理の本が二冊。そして背の高い、少し厚めの本が一冊。

最後の一冊が気になって、魁はそれと取り出した。手袋をはめているのだから大丈夫だろう。

思っていたより重かったそれを膝の上へと置いて、魁は丁寧に表紙を開けた。

「これ……アルバムか」

一番初めのページには、桐生家の玄関先で今より随分幼い柚希と朝飛と空夜が写った写真が収められていた。年頃は小学校低学年くらいだろうか。空夜は幼稚園かもしれない。

人の思い出を勝手に見るのは気が引けたが、魁は二ページ目を捲った。今度は柚希と朝飛が二人で木登りしているのが写っている。

その写真の下に『Yuzuki and Asahi in the park』と筆記体で書かれていた。たぶん、イリア・スカイグラウンドが書いたのだろう。自分の息子と柚希を連れて、公園にでも行ったのかも知れない。

「こんなに小さい時から一緒に居たんだな」

ぺらぺらと、流し読むようにして魁はページを捲っていく。どの写真にも、必ず柚希が笑って写っている。彼と写る人の中には、今より若い冬悟やイリア、桐生前頭目の姿も見られた。そしてほとんどが桐生家や、桐生家の周辺で撮られたものだった。

「……あれ？」

そして、アルバムは最後まで貼られることなく途中で終わっていた。最後の写真に写った柚希と朝飛と空夜は、一番初めの写真からあまり変わっていない。一季節ほどの期間分しか無いようだ。

恐らく、イリアが家を出て行ってからはアルバムを作る人が居なかったのだろう。全ての写真の下に、英語による説明が走り書きさされていたのだ。

魁はアルバムを静かに閉じて、元の位置に戻した。

危うく、ここへ来た目的を忘れるところだった。柚希の不明瞭な部分を明かさなければ。まだ引き出しはあと二つ残っている。

二番目の引き出しには、拍子抜けするほど何も入っていないかった。一番下の引き出しより酷い。ペンが何本かと、メモ用紙、クリップにテープ。それだけだ。

「鬼も蛇も出ねえな」

最後の引き出しに何かがあることを期待して、魁は開けようと手を伸ばす。が、すぐに先程ピッキングに使用したナイフを取り出し

た。

一番上の引き出しには、鍵が付いている。それを慣れた手つきでかちやりと開けると、いままでより丁寧にゆっくりと腕を引いた。

すると、ころころころ、と何かが箱の中で転がる音がした。

小瓶だ。片手に収まりきるほど小さな瓶が引き出しの中で転がっていた。

「これって……!?!」

慌てて持ち上げる。窓から差し込む太陽光にゆらゆらと揺らめく瓶の中身。透明で、少しとろみのついた液体だ。

これに、魁は見覚えがあった。苗木之下に居た頃、教えてもらったときに見たことがある。

「毒……だよな」

無味無臭、そして無色。少量で、人の気を失わせることが出来る薬。使い方や分量を誤れば死にも至る、毒。

仕事で使うわけでも無いはずだ。なぜなら、この薬は五忍樹内では一般人に使うことは禁じられているのだから。

使うとするなら、忍やこちら側の相手しか居ない。出てきたのは、鬼や蛇どころではない。

「何に使う気だよ……?」

平静を保ちながらも、魁は独り呟くしかなかった。

桐生の忍 影送り組曲

23・想遺 Album of memories (後書き)

あの頃の笑い方など、もう忘れた。

24・走意 Like a usual child

「疲れた……」

いま、丁度四時間目の授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。

志保の前の席に座る空夜は、心からの台詞を言つて上半身を机の上へと預けた。

「そう？ さっきの授業、面白かったじゃない。私の学校でもう習つたところだったけど、こっちの先生の方が面白くつていい感じよ」

志保はルーズリーフをファイルへと仕舞い込みながら言った。それを空夜は視線だけ動かして見ていた。一体彼女は何をしに来て居るんだ。確か、魁に言われて自分のことを見張る為に来ていたはずだ。そう本人も言つていた。だが、もうすっかりこの学校での生活を満喫している。

「ほら、お弁当食べよ、お弁当！ お腹空いたー！」

志保は鞆の中からお弁当セットを取りだして、いそいそとランチヨンマットを広げる。

「日野さん。一緒に屋上でお弁当食べない？」

廊下側から複数の女子がこちらを見ていた。昨日志保と一緒に喋つていたグループだ。彼女たちは志保と一緒に屋上へ行こうと誘つている。

志保は一瞬迷つて、すぐに笑顔で首を振つた。

「ありがとー。でも私、教室で食べるねー」

「そうー？ じゃあねー」

「うん、誘つてくれてありがとー」

手をヒラヒラ振つて、女子のグループは廊下を歩いていった。それを見送つて、空夜が不思議そうに首を傾げる。

「行かなくて良かったの？」

「うん、今日は教室で食べたい気分」

そう言いながら、志保のオレンジ色のお弁当箱の蓋が開けられ、

元気良く手を合わせる。

「いったただつきまーす」

「……はあ」

そんなマイペースな彼女を見て、空夜ものろのろとお弁当の用意をする。なんだか振り回されているような気がしないでもない。がいまは気にしないことにする。

空夜が机の上にお弁当を出して、静かに食べ始めようとしたとき、いつぞやと同じように制服の襟元を後ろから引っ張られた。

「ちよつと待った！　なんで一人で食べようとしてんのよ。ほら、机を合わせて！」

どうやら向かい合わせになって食べると言っているらしい。何故だか彼女に逆らえない空夜は、言われるがままに机を後ろへと向ける。

「……これでいいの？」

「うん。はい、手を合わせて、いただきます！」

「いただきます……」

誰かと一緒になってお昼を食べる日など、本当に珍しいことだった。大抵、一人で食べていたし、そもそも食べる前に早退することの方が多かった。

「あ、そのウインナー美味しそう……！」

「え？」

空夜が聞き返すまもなく、志保は彼のお弁当箱からウインナーを奪い取った。その代わりに自分の卵焼きを先程ウインナーがあつた位置へと入れる。

「交換交換！」

入れ替わったおかずを見て、空夜はふと、自分がまるで普通の子供のようだと錯覚した。そんなことあるわけないのに、ただの、忍も裏も何も関係無い、普通の子供でいられたような気がした。

兄が、自分に望んでいるソレ。

それを一瞬でも、叶えられた気がした。

* * *

間違いない。魁は自分でも気付かないうちにそう呟いていた。頭に残るのは、あの小瓶に入った薬の映像。

魁は、柚希の家を後にして、ぶらぶらと街を歩いていた。

「オレが、見間違うはずねえ……」

また呟く。隣を通り過ぎていった人が、自分のことを不思議そうに見ていた。

魁がそこまで言いきれぬ自信は、あの薬ではなく小瓶にあった。

あまりにも特殊な薬 いや、毒の為、他の薬と明らかな区別が付くように鍔木は薬樹から特注の小瓶を頼まれたのだ。

蓋の部分と、底の部分に入れられた椿の花の装飾。それが頼まれた特注の小瓶だった。

柚希の机の引き出しから発見されたそれにも、確かに装飾が施されていた。それをどこで手に入れたのかは知らないが、魁はその小瓶が柚希の手元にあるという事実不安を覚えた。

「まじでオレ、やばいことに首を突っ込んでるんじゃないか？」

今更だが、魁は心からそう思った。柚希は一体何をしようとしているのか。そもそも、柚希は敵なのか味方なのか。それは自分次第だと彼は言った。なら、どうとれば味方になるのか。

考え込んでいると、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「あ、魁」

「んあ？ お、おう……朝飛か」

「ちょうどいいところに居たね。今から買い物に行くから付き合っ
てよ」

「ん、わかった」

「どうやら荷物持ち決定らしい。先程柚希の家へと忍び込んだから
か、何故か罪悪感が残って思わず素直に了承していた。」

「大きいスーパードから、迷子になるかもよ」

「お前、オレのことを何だと思ってるんだ？」

「他愛の無い話をしながら、二人で歩く。どちらかと言えば、ゆっ
くりとした速度で歩いていった。」

「そういえば、前に朝飛へ何故わざわざ歩いて買い物に行くのかを
聞いたことがあった。その時、確か朝飛は学校を辞めてから時間が
余ることの方が多いと答えていた。きつと、彼なりの時間の潰し方
なのだろう。魁は速まりそんな速度を抑え、出来るだけ朝飛の歩幅
に合わせた。」

「そういやあさー、今日の夕飯ってなに………って、朝飛？」

「つい一瞬前まで隣で一緒に歩いていたはずの朝飛が、消えていた。」

「慌てて周りを見回すが、朝飛の姿は見当たらない。その代わり、
見覚えのある顔がこちらに気付いて手を振ってきていた。」

「やほーい！ 魁っちじゃーん！」

「あれ？ 喜ーじゃん。何してんの、こんな所で」

「喜ーが制服姿でこちらへ走ってきた。鞆をぶんぶん振り回してい
て、結構危ない。」

「今日はテストだったから午後は暇だったんだよね。それで、朝ち
いに会いに来ただけで、留守みたいで……」

「へ、へえ……それは残念だったな。ん？ 喜ーは朝飛の住所を知
ってたのか？」

「ううん。お手伝いさんに調べてもらったけど？」

「お手伝いさん。喜ーは何気なく言ったが、結構な金持ちであるよ」

うだ。それもそうか、と、魁は思い直す。榊寺は御曹司や跡取りが行く学校でも有名だ。

「ふーん。なんで朝飛に会いに来たんだ？」

「んー？ 圭やんがさ、朝ちいにブルーハーツのアルバム貸したままなんだって。だからそれを返すように言おうと思ってきたんだけど……そういえば魁っちって朝ちいの家に居候してるんだよね？」

「おう、そうだけど」

「じゃあさ、朝ちいが帰ってきたら、アルバムを返すように言ってくんない？」

巫山戯た感じの喜一が、ものすごく真剣に頼んでくるものだから、魁は自然と頷いていた。断れる筈もない。断る理由もない。

「おう、分かった。たぶん部屋にあるだろ？ オレが持っていて、」

「や、魁っちが返すんじゃない。朝ちいが直接、圭やんに返して欲しいんだよね。おれとしては」

「直接？」

「そ。まあぶっちゃけた話、朝ちいと圭やんを会わせたいだけなんだけどな」

朝飛と圭都を会わせてどうするのだろうか。魁が疑問の表情を浮かべたのを見て、喜一が少し悩んだような声を出し、そして話を切りだした。

「実はさ、圭やんと朝ちいって喧嘩別れだったんだ」

「喧嘩？ どんな喧嘩したんだよ？」

喜一はにへら、と無理矢理笑ってみせる。少し無神経だったかもしれない、と魁は後悔した。喧嘩の思い出なんて、あまり思い出したくもないだろうに。

「……朝ちいがさ、一度だけ約束を破ったことがあったんだよね。おれと圭やんと、一緒にサッカーするって約束。日曜日に河川敷でしようって言うって、おれ達待ってたんだよね。ずっと。結局夕方になっても来なかったけどさ。それで圭やん、めっちゃくちゃ怒っち

やって、朝ちいに怒鳴りつけた」

何も声を返さない魁に大して文句も言わず、喜一は続ける。

「それがまた凄いのなんのって。喧嘩……って言うよりは、圭やんが一方的にキレてるだけなんだけど。でもな、朝ちいってば何も言わないわけ。なんで来なかったのか、理由くらい教えてくれても良いのに、ずっとだんまりで。だから余計に圭やん怒っちゃったんだよ。それで、滅茶苦茶酷いこと言った」

「……なんて？」

「『そんなんじゃお前、一生友達出来ねーよ！ もう俺達絶交だ！

二度と話しかけんな！』ってね」

「……すっごいキレてんな」

「それでも朝ちい、理由を言わなかった。だけど最後に『ごめんね』って謝った。悲しそうな表情だっただけで、泣いてはいなかったけど、あれは泣いてたんだと思う」

きつと。そう喜一は付け足した。たぶん、そうなのだろう。朝飛は泣き顔を見せなかっただけで、本当は泣いていたのだろう。

「圭やん、すぐに反省したんだよ。『俺、滅茶苦茶酷いこと言っちゃった』って。それで、明日になったら朝ちいに謝ろうって二人で話してた。でも……」

「朝飛は、来なかった」

続きの言葉を、魁が継いだ。喜一は小さく頷いて見せた。

「ご名答ー。朝ちい、次の日から学校に来なくなっちゃった。最初は、学校に来づらいのようになってた。でもさ、一ヶ月経つても来ないのは流石に変だと思って、先生に聞いてみたんだ。朝ちいはどうしたんですかってさ。そしたら、先生はこう答えるんだよ。『桐生君はもう学校へは来ません』」

「で？」

「理由が分からないんだよね。だから噂がいつぱい流れてさ。行方不明になったとか、死んだとか、いろいろ。圭やん、すごい後悔してた」

圭都は恐らく自分の所為なのだと思っただろう。謝りたいのに、謝るべき対象が居ないことほどやりきれないことはない。

魁は話の結論を言った。

「で、ブルーハーツを直接渡せと」

「あの二人は話し合わないといけないんだよ」

それじゃあ、朝ちいによろしく。喜一はそう告げて、また走って帰っていった。テスト期間なのだ、忙しいに決まっている。それでも、ここまでやってきていたのだ。

「聞いてただろ、朝飛」

いつの間にかまた隣に立っていた朝飛に、魁は静かに訊ねる。逃げたのは、喜一と会いたくなかったからか。

俯いたまま、朝飛は声を出した。

「……………あの日、僕、本当はサッカーをしたかったんだよ」

「うん」

「友達とサッカーする事なんて無かったから、すごく楽しみで、嬉しくて…………」

「うん」

「でも、急に、僕が行かなくちゃいけない忍の仕事が出て」

「うん」

そこで、顔をあげる。またあの笑顔だった。悲しいのを必死で隠して、わざと笑う。無理矢理作ったその笑顔が、いまは酷く痛々しかった。

今度は魁をしつかりと見据えて、朝飛は言った。

「本当は、僕、サッカーがしたかったんだよ」

「知ってる」

「でも、本当のことなんて言えないから、喜一にも圭都にも、何も言えなくて」

「うん」

「……………僕には、無理なんだよ」

「無理じゃねえよ」

一段と小さくなった声に、魁は間髪入れずに否定した。

「無理だよ。普通の子みたいに、振る舞う事なんて、出来ないんだよ」

ゆるゆると首を振る。それはまるで自分に言い聞かせているようにも見えた。お前は普通じゃないのだと、そう戒めているような。

だけど、それは違う。朝飛はまだ間に合う。まだ完全にこちら側になっていない、灰色なのだ。

少しのきっかけで変われるはずだ。

「……会いに行ってみるよ。あの二人に」

「行けないよ。行く権利なんて無い。もう、絶交されたから」

放たれた言葉に、それ以上何も言えなかった。魁が黙り込むと、朝飛はさつきとは打ってかわって明るい声を出した。

「ほら、お店についたよ。ちゃっちゃと買い物済ませよう」

「……そうだな」

上手く笑えたかどうか分からないが、魁は出来るだけ笑ってみせた。

桐生の忍 影送り組曲

元通りにはなれない。

24・走意 Like a usual child (後書き)

昼食を食べ終わり、チャイムが昼休みを告げると、自然と教室の中がざわついてくる。授業中とはまた違った空気が流れていた。

志保はまだ向かい側で卵焼きを咀嚼する空夜を見ながら、次の授業の準備をしていた。

「次は理科かー。ねえ、今は何をやってるの？」

確か自分の学校では植物関連の授業が終わって新しい分野にいったところだったな、と志保は臍気に思い出していた。空夜は授業を思い出しているのか、しばらく悩んで、

「卵焼き食べてるよ」

見当違いの答えを出した。

「……うん、そっちじゃなくてね」

「冗談だよ」

「空夜の冗談は分かりにくいの！」

「今は確か酸性とかアルカリ性とか……なんかそんな単語が出てたような」

あまり自信は無いが、大体その辺だろう。それを聞いて志保は満足そうに笑う。

「へー。私はまだ習ってないわね。よし、しっかり勉強しよう」と意気込む彼女を見て、空夜は食べ終えた弁当箱を片付けながら訊ねた。

「なんでそんなにやる気なの？」

「だって、しっかり勉強しないと火之基の頭目になんてなれないじゃない」

当たり前のように言われた。が、空夜の中の疑問はさらに深まる。

「志保は頭目になりたいの？」

「そうよ。父さんみたいなの、みんなから尊敬される頭目になるのが夢なの」

「でも、火之基の頭目は志保のお兄さんなんですよ？ 普通に考えて無理じゃない？」

大抵の場合、五忍樹の頭目は男がなるのが暗黙の了解となっている。大体が長男であったりするのだ。末っ子で、そのうえ女である志保には程遠い道のりではないだろうか。

「そりゃ、志勇兄がいるから無理だと思うけど……一応私だって火之基の直系なんだから、頭目になるチャンスはあるはずよ。それに、薬樹の頭目の波奈さんだって女の人じゃない？」

「ああ、波奈さんね。あれは長男の帆波^{ほなみ}さんが事故で亡くなったから、最後の直系である波奈さんが頭目になったんですよ？ 一族の頭目になれるのは直系だけっていう決まりがあるしね」

弁当箱を片付け終えて、机を元の位置に戻していると志保がぶつぶつ呟いていた。

「……なるほど。つまり私が頭目になるには、志勇兄を事故に見せかけて殺つちやえば良いのね」

「良くないから」

「冗談よ」

「志保の冗談って分かりにくいよ！」

脱力しそうになったが、なんとか堪えて空夜は理科の教科書を机から取り出す。休んではかりであまり使っていない所為か、それはまだ新品のようにまっさらだった。

「空夜！ 次の理科は実験だから移動教室だつて！」

後ろから、なんだか嬉しそうな声ではしゃぐ志保の声を聞いて、今度こそ空夜は脱力した。なんで彼女はこんなにも学校生活をエンジョイしているのだろうか。

だが、実験とは都合が良い。

「そうなんだ。実験をする理科教室はね、この教室を出て廊下を右に真っ直ぐ行って、つきあたりの教室だよ」

「そうなの？ ありがとー」

軽やかな足取りでルーズリーフとペンケースを持って廊下へと出

る志保。それを笑顔で見送って、空夜は即座に帰り支度を始める。

机の中のモノを全て鞆へと詰め込んで、安堵の息を漏らす。さつさと家に帰りた。夕方まで学校にいなければならないだなんて恐ろしい。早退をするのは、なんだか嫌なことから逃げるような感じだが、今回は二日連続で学校へ来た自分を素直に誉めたい。しかも保健室へ一度も行かなかった。これは評価されるべきことだ。

いそいそと鞆を提げて教室のドアを開けると、

「何をしてるのかな、空夜くん？」

志保が立っていた。

「……もう、やだ……」

昼休み終了の五分前、廊下には学校指定ではないセーラー服を着た少女に首根っこを掴まれ、ずるずると引きずられていく桐生空夜の姿があった。

* * *

「でっけえ店だなー」

店内へ入っているの一番に魁が感嘆の声を出す。朝飛から渡されたカゴを右腕にぶら下げ、きよるきよると辺りを見回す。食品売り場がかなり大きい。それに加えて、食料品以外のものもたくさん揃えられている。本やCDまでコーナーが出来ている。

一階だけしか無いが、その一階が途方もなく広いのだ。

これは冗談抜きで迷子になりかねない。

「だから言っただろ。迷子になるかもって」

朝飛がすたすたと歩いていくので、魁は小走りでそれを追いかけた。この年になってまで迷子になるのは笑えない話だ。

「今日は何を買った？」

「人参、キャベツ、タマネギ、豚肉。それから空夜に頼まれてた赤ペンとノート」

聞き逃せない名前が混ざっていたことに気付いて、魁が嫌そうな声を出す。

「げ。タマネギ買ったのか？」

「買ったよ。タマネギくらい食べなよ」

「無理無理無理、絶対無理！ オレの分の夕飯だけ、タマネギ抜いて」

「それこそ無理だよ。今日は焼きそばだし」

そんなことをしようと思ったら、魁の分だけ別にして調理しなければならぬ。サラダならまだしも、焼きそばとなれば抜きようが無い。元々抜いてやる気も無いけど、と朝飛は心の中でひっそり思う。

それを聞いて、目に見えて分かるくらいガツカリした魁が今日の夕飯のメニューを嘆いた。これはまた空夜に食べて貰うしかない。

魁の心中などもちろん察することもなく、朝飛はさっさと先へ歩いていく。

「じゃ、先に野菜売り場に行くよ」

「へーい」

カゴを片手に魁は間延びした返事を返す。そんな彼の横を、小さな少年が走っていった。お菓子の袋を抱えながら、危なげな足取りで客の間を縫うように走っていく。母親を捜しているのだろうか。

キョロキョロと余所見をしながら駆けていった。

「危ねえな」

「ホントだ。この先って確か、台所用品コーナーだったと思うんだ

けど……」

前を歩いていた朝飛の横も通り過ぎる。その少年が走っていった先には、ガラスのコップや皿が陳列された棚が続いていた。それを見て、慌てて朝飛が後を追いかける。

「ねえ、きみ！ 走ってたら危ないよ」

だがそんな声が届くはずもなく、少年は余所見をしたまま走っていく。少年が走り行く先には、丁度店員が踏み台の上に乗って棚の食器を並び替えている。

だがその店員が気付くよりも早く、少年の身体はその踏み台へとぶつかっていた。

「危なっ……！」

朝飛が声を出すと同時に、耳を劈く音がした。

大音量の破損音、そして悲鳴。食器とガラスの割れる音がした後、すぐに幼い泣き声が聞こえはじめた。

「おい、大丈夫か!？」

魁が朝飛よりも早くその場へ近付いた。が、周りには既に小さな人集りが出来ていたため、中まで様子を見ることは出来なかった。人と人との隙間からやっと思える程度だ。

走っていた少年は喉を嚔らさんばかりに大声で泣いているが、店員が覆い被さるように庇ったおかげで怪我は見当たらなかった。驚いてしまったのだらう。母親を呼びながら泣いている。

店員もガラスの破片を背から被ってしまったが、運良く深い傷口は無かった。恐らく、小さな切傷ぐらいだらう。身体を起こして、少年の安否を確認していた。

そこへ他の店員が駆け付けてきて、事を片付けていく。

「良かった。大丈夫そうだな」

後ろを振り返りながら朝飛へ声を掛けて、魁はやつと彼の様子がおかしいことに気付いた。

「……い……だ」

「朝飛？」

「……………い、やだ……………！ 違う、僕じゃない……………嫌だ……………誰か、」
「おい、朝飛？」

人集りの中にいる少年を見ながら、断片的な言葉を呟く。呼吸が荒い。

確かに少年を追うために走っていたが、そこまで呼吸が乱れるだろうか。今の朝飛は吐く量よりも、吸い込む量の方が多い気がする。「……………なんで……………いやだ、なんで……………誰か……………おねがい、だれか、」頭を両手で抱え込みながら、朝飛は力無く膝を付く。魁は慌てて同じようにしゃがみこんだ。小さい声が、聞こえづらい。

「たすけ……………ど……………して、だれも……………助けて、……………」

「朝飛？」

肩を掴んで朝飛を揺らす。それでも朝飛は魁の言葉には応えない。彼は、あの走っていた少年を見ているのだと思っていた。視線は確かに、その方向を見ていた。

「だけど違う。今の朝飛は、そんなものを見てはいない。どこか、遠い、違う場所を見つめている。その虚ろな目は、確かに泣いていた。」

「おい！」

さつきよりも大きく揺らすと、朝飛の目がやっと魁を捉えた。

「……………たすけ、て、ほしか……………た……………のに……………」

朝飛が今までより一段と小さい声で言っ、前へ倒れた。

「朝飛？ おい、朝飛！？」

力を失ったその身体は、ぐったりとまるで糸の切れた操り人形のように動かなかった。

* * *

「BTB液が黄色になると、これは酸性であることが分かりますね」
教師が色の変わった液体を見せると、一気に理科実験室の中が騒がしくなった。各班で様々な液体を入れては、何色に変わるのかを見ていく。単純な作業だが、みんな興味津々に作業をこなしていく。志保ももちろんその中にいる。そんな彼女を離れたところから空夜がぼんやり見ていた。

「楽しい？」

「楽しいわよ！ 空夜もやればいいのに。あ、交代する？」

「別にいい」

スポイトを差し出してみるが、空夜はすぐに断った。行き場の無くしたそれを、志保は隣にいた男子生徒へ渡して、空夜の傍に近付いた。

「あのね、もっと授業に参加しない？」

「しない」

「もー。大体ね、」

小言を言おうとした瞬間、機械的な振動がスカートのポケットから伝わってきて、志保は慌ててしゃがみ込んだ。

椅子に座っている空夜が不思議そうに見る。

「どうかした？」

「携帯鳴ってる。誰だろ」

周りには実験に夢中になっているし、教師も違う班と一緒にいる。志保はこっそり携帯を取り出して、画面に『魁』と出ているのを確認した。

「魁だわ」

「出れば？ 小声なら大丈夫なんじゃない？」

空夜に促されて、志保は通話ボタンを押した。出来るだけ小声で電話の向こうの相手へ声を掛ける。

「もしもし？ うん、そう……大丈夫、実験中だし……うん、うん……え？」

しばらく志保は何も言わずに携帯を耳に当てていた。様子が変わったことに気付いて、空夜がどうしたの、と声を掛ける。ゆっくりとボタンを押して携帯を閉じ、志保が口を開いた。

「朝飛が、過呼吸で倒れたって……」

志保の話最後まで聞かずに、空夜は椅子から立ち上がった。勢い余って、椅子が後ろへと倒れてしまい、その音が和やかだった実験室の空気を張りつめたモノに変えた。シンと静まりかえり、痛いほどに刺さる視線を無視して空夜は教室から出る。

「桐生君！ まだ授業中よ、どこへ行くの？」

「先生、お腹がすごく痛くて死にそうなので帰ります」

簡潔に述べて、空夜は廊下を走って行ってしまった。啞然とするクラスメイトの間を抜けて、志保がその後を追う。

「先生！ 空夜が一人じゃ心配なんで私も帰ります！ ごめんなさい！」

教師が生徒がまだ何か言っているのが聞こえたが、それも全部無視して廊下へ出ると、もうそこに空夜の姿はなかった。迷うことなく志保は階段のある方へと走り出す。が、途中まで降りたところで立ち止まった。

「……か、カバンどうしよう！」

きっとこの分では空夜はそのまま帰ってしまったのだろう。自分も同じようにしたいが、後から教師が持ってきてややこしい事態になることだけは避けたい。

「あー、もっつ！」

一旦道を引き返して、志保は舌打ちをした。

桐生の忍 影送り組曲

願ったことはたくさんあった。
叶ったことは一つもなかった。

『許されるとでも思っていたの?』

聞き覚えのある声が聞こえた。だけど、一体何処で聞いたのかは思い出せなかった。朝飛はその声に促されるようにして、いつの間に関じたのか分からない瞼を開けた。

そこは懐かしい場所だった。小さい頃、柚希と空夜とよく遊びに来ていた公園。町中には珍しく広い公園で、四つあるブランコでいつも遊んでいた。

これは夢か。もう随分昔になくなってしまった公園だったので、朝飛は声に出さずにそう思った。

『ねえ、許されると思っていたの?』

「……何が?」

声を掛けてきた少年は、丁度朝飛の目の前のブランコに腰掛けて、小さく動かしていた。時折鎖の部分が擦れて嫌な音が鳴る。

少年は聞き返してきた朝飛に向かって、ゆっくりと答えた。

『ぜんぶ。全部だよ』

「分からない……」

少年の顔は、見覚えのある顔だった。だけど朝飛には、それが何処で見かけた顔なのかよく思い出せなかった。

『分からない? そんなはず無いよね。本当は分かっているくせに、嘘ばっかり』

少年は皮肉な言い方をしながらも、表情は泣きそうになっていた。だけど、決して泣くことはせずに、そのまま無理矢理笑った。それを、朝飛は滑稽だなとぼんやり思った。こんなにも悲しい笑い方をする子供がいるのかと不思議に思った。

「でも、本当に分からないんだ……僕は正しいのか、間違っているのか。本当はどっちだったのか、忘れてしまって」

『許さない』

静かに、呟いた。

『忘れることは、許さない。たとえきみを取り巻く全ての人がきみを許したとしても、僕だけはきみを許さない』
ぜったいに。

底から出したような低い声で言っつて、少年は朝飛を睨んだ。それを見て、朝飛はこの少年が誰であるかを思い出しかけていた。少年の名前を思い出せそうになって、途端に頭痛が走る。朝飛はこめかみを押さえ、受け入れきれなかった痛みを緩和させようとした。

「きみは」

『絶対に、忘れさせない』

静かに少年がブランコから降りた。朝飛が痛む頭を抑えながらそれを目で追う。少年は朝飛の傍まで近寄り見下ろすように彼を凝視して、右の方向を指差した。それに従うように朝飛が指し示された方向を見ると、幼い空夜が泣いて立っていた。

「空夜……?」

『ほら、早く行ってあげないと。空夜を守ってあげるのは、きみなんだでしょう?』

少年は相変わらず表情を変えずに話す。

「そうだ……守ってあげないと」

『約束だもんね。でもね、ちょっと待って』

空夜の傍へ駆け寄り寄りとした朝飛の腕を両手で掴んで、少年は足下を見つめる。訳が分からなくて朝飛も同じように下を見ると、まるで水溜まりのように血が溜まっていた。

『ねえ、どうしてここは真っ赤なの?』

「……っ!?!」

少年が朝飛の腕を放して、二歩後ろへ下がる。

朝飛が見つめるその血溜まりの中に、腕が見えた。白い腕だった。救いを求めるように伸ばされていた腕は、血塗れになってそこにあった。死んだ人のものなのかもしれない。

「や、やめ……」

朝飛がそれから逃れるように少し足を動かすと、ぴちゃ、と嫌な水音が耳を掠めた。気持ちが悪い。見開いた目が乾いて、息は段々と乱れてきた。息苦しさに、朝飛は慌てて両手を口元に押さえて、必死で呼吸を落ち着かせようとする。手の震えが全身に回っていくような気がした。

「ごめんなさい、ごめん、なさ、…め…なさ……」
『許さない』

少年は相変わらず悲しそうに笑いながら、しゃがみこんでしまった朝飛へさらに近づき、そっと耳打ちをする。さっきまでとは打ってかわって、優しい声色で囁いた。

『可哀想に。本当は、きみは苦しまなくても良かったのにね。本当は、空夜が苦しむはずだったのにね。なのに、全部きみが抱え込んで。悪いのは空夜なのにね』

甘く囁いて、少年は朝飛に同意を求めてくる。朝飛はかぶりを振って大声で否定した。

「違う、空夜は悪くない！ 誰も、悪くないんだ……！」

『嘘吐き。本当は、そう思ってるんでしょう？』

だって僕には分かるから、そう良いながら少年は笑顔を崩した。

『だって、僕はきみだから』

その言葉を聞いて、朝飛は思い出す。目の前の少年が、小さい頃の自分と同じ姿をしていることに。

最大の防護壁だったそれを取り払った彼の表情は、ただただ悲しそうに歪んでいた。

* * *

「朝飛？」

魁が声を掛けてみるが、朝飛は相変わらず眠ったままだった。さつきまでは夢に魘されていたのか、苦しそうにしていたが、いまは静かに眠っている。

自分にはどうすることも出来ない。どうすれば良いのかも分からない。魁は助けを乞うように薬樹へ電話を掛けてみたが、運悪く波奈は仕事に出掛けているようで頼りになる人物は未だいないままだった。

「熱は無いし……」

どうするべきか悩んでいると、後ろで勢いよく襖が開いた。肩を上下させて、空夜が立っていた。

「空夜！」

「兄さんが、倒れたって聞いて……」

慌てて帰ってきたのだろう。空夜の額には汗が滲んでいた。

「いまは眠ってる。さつきまでは魘されてただけだな。熱も何も無いし、呼吸も落ち着いてるし、たぶん大丈夫だとは思うけど……あ、一応薬樹に電話してみたんだけど、頭目が仕事で家を空けてて連絡が取れなかった」

とりあえず何事も無いという事実を聞いて安心したのか、空夜は大きく息を吐いて座り込んだ。

力が抜けていくのが目に見えて分かる。それもそうだろう。学校を途中で抜けて、鞆も持たずに帰ってきたのだ。相当心配したに違いない。

「なあ、空夜」

「なに？」

「朝飛は、病気が何かなのか？」

朝飛の様子がおかしくなった時のことを思い返して、魁はそう訊ねた。本当に突然だった。突然、呼吸が荒くなって、何か断片的なことを口にして。そう、彼は錯乱していた。

恐らくあれは過呼吸だったのだろうとは思っけれど、それが何によるものなのかは全く見当がつかなかった。

「よくは、知らないんだけど……」

歯切れの悪い口調で空夜が切り出した。

「昔にも、こんな風に過呼吸になって倒れちゃったり、何度かこういうことはあったんだ」

足を崩して、楽な姿勢を取りながら空夜が続ける。話は長くなりそうだ。

「……兄さんは隠したがってたから、あんまり言わないでおこうと思っただけ……」

「教えてくれ」

魁の真っ直ぐに向けられる視線から逸らすように、空夜は朝飛の寝顔を見つめた。言おうか、言わないでおこうか悩んでいるようだ。

その背中を後押しするように魁が続ける。

「誰にも言わないから」

しばらく沈黙を守っていた空夜だったが、あまりにも真剣に魁が詰め寄ってくる所為でとうとう折れてしまった。

「……PTSDって知ってる？」

「いや、知らない」

「正式名称は、Post-traumatic stress disorder。通称、心的外傷後ストレス障害。心的外傷によって引き起こされる疾患で、それに伴って過呼吸に陥ったりする……らしい。柚希が言うには、仕事中に色々あつたらしくて、それが兄さんにはトラウマになってるみたいなんだ。こんな家業だから日常茶飯事なのかもしれないけど……。桐生の次期頭目がそんな脆弱な奴だと思われたくないみたいで、ずっと隠してるんだ」

自嘲気味に笑って、空夜は魁を見た。誰かに言っんじゃないだろうかとでも言いたげな表情を見せた。それに対して、魁は「誰にも言わない」と再度言った。

それよりも。そんなことよりも今、聞き逃せない単語があった。

「柚希は知ってるのか」

「うん。たぶん、僕より詳しいと思うよ。兄さんが仕事をするようになってから、柚希はずっと傍にいたから」

それが良いことなのか悪いことなのか、魁には判断しかねた。柚希のことを、まだ敵とも味方とも区別できていない。

もう一度、本人と話す必要がある。あの小瓶のことも、ずっと気になっているのだ。判断するのは、それから。

忍殺しの犯人もまだ見つかっていないと言うのに、桐生のことにまで首をつっこんで、自分はどうも深みにはまってしまっ性質があるらしい。反省はするが、今のところ後悔はしていない。

「空夜ー！」

廊下をばたばたと騒がしく走ってくる足音が聞こえた。志保の叫び声が段々と近付いてくる。

そして勢いよく襖が開かれると、そこには二人分の鞆を持った志保が荒々しい様子で立っていた。

「なんで先に行くのよ！ 鞆も放ったらかしで！」

「あ、忘れてた」

悪びれもなく、空夜が言う。

「鞆を！？ それとも私！？」

「お前、ちよつとは静かにしろよ……」

お構いなしに大声を出す志保を見て、溜息混じりに魁が漏らす。

丁度次の日の昼過ぎ、柚希達が仕事から桐生家に戻ってきた。

桐生の忍 影送り組曲

知らないままでいるほうがいい。
狂気染みたまくらを知るには、きみはまだ綺麗すぎる。

目を覚ました朝飛は、まるで昨日の出来事など覚えていないように振る舞っていた。心配して損した、と魁が拍子抜けするほどに。もしかすると、本当に覚えていないのかも知れない。

土曜日だったからか、いつもより遅めに起きたものの、その他はいつもと変わらなかった。毎日見てきた朝餉の光景と同じ。

違うことと言えば、休日のおかげで学校へ行かなくても済んだ空夜の機嫌が少し良いくらいだ。学校へ行くという目的が無いからか、志保は朝から顔を見せることは無かった。

「ただいま戻りました！」
仕事から三忍衆が帰ってきたのは、丁度昼食の片付けが終わった頃だった。

魁と朝飛と空夜が何をすることもなく居間でくつろいでいると、その扉を柚希が勢いよく開けた。右腕には荷物を持っている。彼の後ろには、何やら似たような荷物を持った桃実と瑠璃が立っていた。

「ったく……少しは静かに出来ないのかい、柚希。頭に響くんだよ」
桃実がぶつぶつと文句を言うが、柚希はお構いなしに話を続ける。「朝飛様、これは依頼人からの言付けです。それから」

いくつかの書類を渡す柚希に代わって、今度は瑠璃が言葉を続ける。手に持った荷物を朝飛に渡しながら、いつものように似つかわしくない口調で言った。

「……ほれ、依頼人からの礼の品じゃ。儂はいらんと言ったんじやがの」

ちら、と桃実の方を半目で見る。どうやら断らなかったのは桃実らしい。瑠璃から向けられる呆れの視線に耐えかねたのか、桃実は

柚希と関係の無い話をしていた。

「お礼ですか？」

受け取った紙袋を覗くと、そこにはワイン。もう一つの紙袋には日本酒。他の紙袋たちを全部見ると、色んな種類の酒が入っていた。やけに重いと思っていたが、まさか酒が入っているとは思ってもしなかった朝飛が苦笑いをする。

そういえば、今回の依頼人は飲料系の業種の企業をやっていると聞いていたが、まさか礼の品に酒を渡してくるとは予想していなかった。

「見事に全部お酒ですね……僕はまだ未成年ですから、残念ながら飲めませんね。この中で飲めると言ったら、桃実さんと瑠璃さんくらいじゃないですか？」

「え！？ この女、成人してんの！？」

魁が驚いて瑠璃を指差した。当たり前じゃないかという顔つきで瑠璃が睨んできたので、すぐにその手は引つ込めたが。

「童顔で悪かったな。で、どうするんじゃ、この大量の酒。いまは冬悟頭目もお祖父様もいらっしやらないんじやろう？ かといって捨てるのも」

「飲むしかないっしょ！」

桃実がそれはもう楽しそうに言った。すでにワインのコルクに手を掛けている。素手で開ける勢いだ。

そんな提案に慌てて柚希が首を振る。

「何を言ってるんですか、海老名さん！ こんな昼間っから飲酒だなんて、非常識にも程がありますよ！」

「なんだい、柚希。あんた、自分が飲めないからって拗ねるんじゃないよ」

「俺は拗ねてません！ っていうか、その手を離してください！」

「あ！ かーえーせー、アタシのお酒ー！」

いつから桃実の所有物になったかは分からないが、ワインの争奪戦が始まった。年下とは言え、男である柚希の方が力は上だが、桃

実の執念もなかなかだった。つまり、ワインは交互に行き来していた。

そんな二人の間を行ったり来たりするワインを取り上げ、朝飛が溜息を吐いた。

「飲んでも良いですけど、やることやってからにして下さいね。まず報告書を書いてください」

「えー」

「『えー』じゃないです、桃実さん。それさえ終わったら、好きなだけ持ち帰って良いですから」

持っているワインを少し揺らす。しかしそれには興味を示さずに、桃実は今の台詞を反復した。

「持ち帰る？ こんな重いものを？ どうせならここではーっと騒ごうじゃないのさー。任務終了祝いにさー」

「ここでですか？」

流石の朝飛も少し迷って、周りを見渡す。空夜と魁がすかさず手を挙げた。

「僕、別に飲めるよ」

「オレも飲めるし」

飲める飲めないの問題以前に、法律違反なのだが。とにかく、ここで騒ぐことに異論は無いらしいことは確認できた。

「……はあ。分かりました、良いですよ。でもおつまみも何もありませんから、自分で調達してくださいね」

「よっし！ そうと決まったからにはさっさと報告書仕上げよ！
そんでもって買い物な！」

「俺も行くんですか　！？ 荷物持ち決定じゃないですか！」
朝飛から許しの言葉を貰えた桃実は、早速瑠璃と柚希の腕を引っ張って廊下へと出ていく。

朝飛は三人の声が遠ざかっていくのを静かに聞いていた。

* * *

「あ、また誤字発見」

朝飛の声が部屋に響く。彼が見つめている報告書には、既に何箇所かの訂正が入れられていた。これがまだ社長令嬢の護衛という依頼だったから良かったものの、政治的なものだったらどうするんだと溜息を吐きたくなってくる。

せめて漢字間違いくらいはやめて欲しい。そう本人達に言いたいのだが、生憎三忍衆は揃いに揃って近所のスーパーへ買い出しに出掛けていた。

「人の上に立つのも疲れるんだな」

魁が同情したように呟いた。彼もいずれば人の上に立つ人間だ。だからか、余計に同情心が湧いたのだろう。

机の上の書類と睨めっこをする朝飛に、魁は先程入れてきた茶を置いた。

「休憩したら？」

「うん。でも、もう終わるから」

「そっか……」

語尾の切れが悪い。それに気付いた朝飛は相変わらず書類を睨みながら後ろの彼に声を掛ける。

「何？ 何かあった？」

「いや、ちょっと聞きたいことがあった……っばい……うん」

再び朝飛が不審を感じて、その台詞に言葉を返そうとしたが、そ

れは電話の呼び出し音に掻き消された。それにすぐ反応して、魁が立ち上がった。

「電話だな。出てくるわ」

「うん、よろしく」

電話が終わってからで良いか、と自己完結をさせて朝飛は最後の報告書に手を付けた。

「はいもしもし桐生です」

『もしもし、薬樹です。朝飛君……とちやいますよねえ。魁君、お久しゅう』

受話器の向こうから聞こえてきたのは、薬樹波奈の声だった。関西訛りの声が、驚いたように話し掛けてきた。

「どうも。えっと、どうしたんすか？」

『いやねえ、昨日家を空けると間に桐生さん家から電話ありましたよって聞いたから、なんの用事やったんかなあと思って……』

そういえば昨日朝飛が倒れてから、魁は何度か薬樹家に電話を掛けていた。あれから連絡も何もしなかったのを思い出して、魁が慌てて謝った。

「すいません。その電話、俺が掛けたんです」

『ああ、そうやったんですかあ。なんやうちに用事でもありはったん？』

「や、用事は終わったんすけど、それを言うのを忘れてて……お騒がせしてすいません」

『いえいえ、困ったときはお互い様やからねえ。ほな、うちはそろそろ仕事に行かなあきませんから、この辺でお暇させてもらいます。朝飛君にもよろしゅう言っておいてくださいな』

おっとりした声が消えて、代わりにフーフー、と規則正しい電子音が響いてきた。受話器を下ろして、魁は頭を掻く。

波奈に電話していたことをすっかり忘れていた。自分は相当焦っていたらしい。こんなことではまだまだ頭目になることは出来ない、と魁は一人苦笑いした。

部屋に戻ると、すっかり報告書の確認を終えた朝飛がお茶を飲んでいた。

魁もそれに倣って湯飲みを取る。煎れたときよりも少し冷めた温いお茶が喉に染みこんだ。

「電話、なんだった？」

「薬樹家から」

五忍樹から電話が掛かってくることなど滅多に無いからか、朝飛が吃驚していた。

「この前オレが掛けたから、かけ直してきてくれたんだよ」

「ふうん……？」

自分に関係の無いことだからか、それ以上突っ込んでくることはせずに朝飛は素直に頷いた。代わりに、短く用件を言う。

「じゃ、さっきの続き」

「あ？」

「何か言い掛けてなかった？」

電話がある前のことを言っているのは分かった。が、魁はすぐに返事を返せなかった。さつきも言葉を濁していたが、やはり聞き難い。これはもう首を突っ込むとか、そういう類の域ではない気がする。

「あの、さ……」

「うん」

迷いはある。だけど、それ以上に聞かなければいけない気がした。

「もしもの話………もしも、信じてた人に裏切られたとしたら、お前どうする？」

「……そりゃあ、哀しいんじゃない？」

唐突な話だったが、朝飛は答えた。その答えよりももっと正確な答えが欲しくて、もう一度魁は似たようなことを聞く。ほとんど同じ内容、だけど、決定的に違う一言が入るその台詞を。

出来ることならば、言いたくなかったその台詞を。

「もしも、柚希に裏切られたら、お前どうする？」

それは、誰にも聞こえなかった崩壊の音。

27 不変 Nobody heard of the sound of

「もしも、柚希に裏切られたら、お前どうする？」
『もしも、誰かに裏切られたら、朝飛様はどうしますか？』

魁が放ったその一言に重なって、柚希の声が聞こえた気がした。それはいつだったか、柚希が朝飛に言った言葉だった。

この台詞はいつ頃に訊かれた台詞だったか。つい最近だったような気もするし、随分昔だったような気もする。正確な日にちは全く思い出せなかった。

その問いに対して、自分は一体なんと答えていたのだろう、と朝飛はぼんやり思った。

「なんで、そんなこと訊くんだよ」

「……そういう可能性があるからだ」

突きつけられた言葉に、朝飛は静かに、だが確実に怒りを露わにして答える。

「ゆずきくんが裏切るわけ無い。そんなこと、するわけない」

「何でそう言い切れるんだ？」

「ゆずきくんは、そんなことしない」

信じてるから。そう続けられた言葉。それは純粹に信じていると言っよりも、盲信や妄信の類に聞こえた。理由もなく、ただ訳も分からず信じている。

まるでそれしか信じたことの無いような、そんな狂信的な言葉に聞こえたのだ。

「信じてるって……お前、」

そこまで言い掛けて、止めた。朝飛にはこれ以上何を言っても無駄なような気がした。柚希が偽名を使っていることも、そのほとんどが不明瞭であることも、言っても信じて貰えない気がした。

そしてそれ以上に怖かった。それを言った後の、彼の反応が。

* * *

「だーから、こう言うときに飲んでおかないと駄目だって！」

ぶはあ、と気持ちよさそうに息を吐いて桃実が言った。顔はもう既に赤らんでいる。二十歳を一年過ぎだけの年齢にしては、なかなかいい飲みっぷりだった。手に持ったコップには、また並々と透明な液体が注がれ、それを隣に座る魁へと押しつけては何度も飲むように誘った。

もちろん魁は断る気などなかったのだが、保護者の如く朝飛が見張っているので飲めるものも飲めやしない。

「桃実さん、魁も未成年ですってば」

「ケチくさいねえ……見てみなよ、瑠璃は飲んでるじゃないか」

「瑠璃はああ見えて一応成人してるから」

空夜が言った言葉が気に食わなかったのか、「一応とはなんじゃ」と不機嫌そうに瑠璃が答えた。彼女も相当飲んでる方だが、酒に強いらしく、表情も佇まいも普段をなんら変わっていないかった。

「いいじゃない。もう夜なんだし、少しくらい飲んだってさ」

「誰の所為でこんな時間になったと思ってるんですか　！」

柚希が今にも掴みかからん勢いで桃実に詰め寄った。

柚希達がい出しから帰ってきたのは夕刻も大分過ぎた頃。桃実が店の中ではぐれてしまった為に、時間がかかってしまったようだ

った。桃実は二人が勝手に迷子になったのだと言っていたが、袖希が随分探し回ったと疲れた様子で話していたので、やはりというかそれは嘘だった。

「でもそうやってアタシがウロウロしたおかげで、美味しそうな鱈チーズが見つかったんじゃないのさ」

「あ、ホントだ。この鱈チーズうめえ。他にはなんか無えの？」

「定番の柿ピー、サラミ、なんでもあるよ！」

そう言っつて、スーパールの袋の中からどんどんと取り出していく桃実と魁。もう彼女のペースに流されていくのが目に見えている。この調子だとどれだけ注意しても、きつとみんな酔いつぶれてしまうのだろうと朝飛は頭が痛くなった。

「二人共……こんな所で寝たら風邪引くよ……」

そして、案の定だった。

床の上に大の字になる魁、部屋の隅っこで酒瓶を抱いて丸まる桃実。朝飛は駄目元で二人を揺さぶってみるが、二人揃って起きる気配は無い。そのかわり「もう飲めない」だの「双子が襲ってくる」だの、寝言はしっかり言っている。

まだ二人だけで済んだのだからマシな方だろうか。

意外にも酒に強かった瑠璃は九時になる前に帰宅、そして全く酒を飲まなかった袖希も一緒に帰っていった。空夜と言えば、酔っぱらい二人が寝そべっているその間で体育座りをしてテレビを見ている。最近よく見ているドラマらしい。

「全然起きないし」

朝飛が溜息混じりに壁に掛かった時計を見ると、針は十時半過ぎを示していた。

「放っておけば？ そうか、蹴り上げてみるとか」

空夜が画面から目を離さずに物騒なことを言う。

「そういう訳にもいかないだろ……………あれ？」

「なに？」

「ゆずきくん、上着忘れて帰ってる」

床に落ちていた服を拾い上げて、裏表を確認する。間違うはずも無いが、確かに柚希の上着だった。ばたばたしていたから忘れてしまったのだろうか。朝飛はそれを丁寧に畳み直して廊下へと出る。

「ゆずきくんに着渡してくるよ」

「いまから？ もう遅いよ」

「うーん……………やっぱり渡してくるよ。探してるかも知れないし」

六月ももうすぐ終わりとは言え、夜はなかなか冷える。朝飛は薄手のパーカを羽織って出て行った。その玄関の扉が閉まる音を、空夜は複雑そうな顔をして聞いた。

そしてすぐに窓を開け、庭へと出る。塀の向こうにはもう既に兄の気配は無かった。相変わらず足の速いことだ。

あれだけ足が速いのに、空夜は朝飛に置いてけぼりにされたことは一度として無かった。

いつもいつも、朝飛は空夜が追い付いてくるのを待っていた。隣に自分が来たことを確認してから、また少しずつ走り出すのだ。自分がいなければ、もつと速く走れたらうにと空夜は幼心に思っていた。そう、自分さえいなければ。

「それも、もうすぐで終わるのかな」

「……………なーにが……………？」

頭の中で思っていた言葉がつい口から飛び出してしまっていたようだ。抱えていた酒瓶を横に置いて、桃実が両腕をうーんと伸ばしていた。

「……………ドラマが」

「ああ、最終回ね……………ん？ 朝飛は？」

「柚希の家に、上着を届けに行った。忘れて帰ってたから」

「一人で？」

空夜が頷くのを見て、こんな夜遅くにかい、と桃実が呆れた顔で

言った。

「護衛も何も無しで？ 次期頭目に何かあつたらどうするんだい。つたく……アタシ、迎えに行つてくるよ」

寝癖のついた髪を左手でわしわしと掻き混ぜて、桃実が立ち上がった。

「柚希の家、知ってる？」

「もちろん。あのちっちゃい五階建てのアパートだろ？」

* * *

「510号室、だよな？」

誰に訊くでもなく朝飛が咳いて、また呼び鈴を鳴らした。かれこれ四度目の呼び出しだった。が、部屋の主は一向に現れない。というよりは、まだ帰っていないような雰囲気だ。

朝飛は手に持った上着を見て、どうしたものかと首を傾げる。折角持ってきたのに、無駄足になってしまう。

「あ、もしかして……」

すつと顔をあげて、自分が登ってきた階段の方向を見る。五階建てのアパートなのに、まだ上へと続く階段。落書きで『立ち入り禁止』の文字が消えかかった札が階段の手すりに掛けられている。

朝飛はその階段を一段飛ばしで軽快に駆け上がった。

「やっぱりここに居た」

「……朝飛様？」

屋上の真ん中では、柚希が上を見上げて立っていた。彼に居る場所へ近付きながら朝飛も見上げてみるが、星屑は一つも見当たらない。どうやら星を眺めていたという訳では無さそうだ。

「何してたの？」

彼の前へ立って、疑問を口にした。

「一雨来るな、と思いましたが」

柚希がもう一度上を見上げる。星屑は見えなかったが、代わりにどんよりと重い雲が闇に紛れて見えた。今にも降り出しそうな雲だ。そういえば月も見えない。

「朝飛様こそ、どうなさったんですか」

「上着、忘れてたから」

はいこれ、と渡された上着を手にとって、柚希は嬉しそうに微笑んだ。朝飛の顔にも自然と笑みがこぼれる。

「ゆずきくんって、何でも出来るし凄いなと思うけど、たまにちよつとした失敗するよね」

その上着をそつと下に置いて、柚希が目を細める。いつもの柚希と違って、今の柚希はいつもよりも少し違う感じがした。その僅かな違いを感じ取った朝飛が心配そうにする。

「どうかした？」

そう訊かれて、柚希の表情が一瞬固まる。それも束の間、すぐに彼は薄笑いを浮かべた。いつものような温かい笑みではなく、氷のように冷たい笑みを。

「まるで、俺のことを分かっているみたいなの口振りですね」

「え？ だって、」

「朝飛様は、俺の何を知っていますんですか？」

改めて問いつめられて、朝飛は何も言わない。ただ、目の前の柚希の顔を凝視していた。

そんな様子の朝飛を見て、柚希は可笑しそうに声をあげて笑った。「あはははっ！ 心配しなくても大丈夫ですよ。貴方だけじゃあり

ません。誰も、本当の俺なんて知らないんですから」

「ゆずきくん？」

「……曾根崎柚希なんて人間、最初っから居ないんですよ」

一体何を言っているのだろう。

相変わらず可笑しそうに笑う柚希を、否、名前の分からない彼を見て、朝飛は動揺を隠せずに居た。

「ゆずきくんの名前は、曾根崎柚希じゃない……？」

「朝飛様には、特別に教えて差し上げます。俺が、曾根崎柚希の名乗る前の名前を」

彼の唇が、ゆっくりと動いた。

「桐生柚希って言うんです」

不気味なくらい楽しそうに放たれたその言葉に、朝飛はゆるゆると力無く首を振った。

「なに、それ」

「貴方さえ居なければ、俺はこんな思いをしなくて良かったんです」

「ゆずきくん……？ なに、言っつて、」

「まだ分かりませんか？ 『お前なんかいららない』 そう言っているんですよ」

一歩、二歩、柚希から遠ざかるように朝飛が後ろへ下がる。これが昼間だったなら、朝飛の顔が青くなっているのが見えたかも知れない。

「ねえ、朝飛様。俺のこと、信じてくれていてありがとございませす」

離された部分を取り戻すように、柚希が一歩前へと足を出す。

「誰も信じていないのに、俺だけは信じていてくれたんですね」

「来るな……」

「カワイソウに」

また一步。これで、二人の間の距離は元通りになった。

「来るな……！」

「どうですか？　いまの気持ちは」

朝飛が後ろへ下がるたびに、柚希が前へと踏み出して、二人の距離は変わらずに一定の距離を保ったままで。

柚希が笑ったたびに、朝飛の顔が悲痛に歪んでいく。

「どうですか？　唯一信じていた人に裏切られた気持ちは」

今の状況をはっきりと言葉に換えられて、朝飛は力無く答えを返す。

「……どうして……なんで？」

朝飛の後ろには、もう何も無かった。屋上と外を分けるはずのフェンスは、そこには無かった。

「大丈夫ですよ。もう悲しいだけの世界は終わりますから」

とん。そんな風に軽く右手を押し出すと、朝飛はいとも簡単にその重心を後ろへと追いやった。その両の目はしっかりと見開かれているというのに、まるで何も写していないガラス玉のようだった。

「ゆず、き……？」

ひゅっ、と息を吸い込む音が聞こえた。朝飛の身体がゆっくりと重力に従って、境界線の内側から外側へと追い出されていく。まるでスローモーションが掛かったみたいだ、と柚希はぼんやり思った。そして、朝飛の表情が見えなくなるその前に。

「おやすみなさい」

にこりと、笑って言ってやった。

その瞬間、それは自分の幻覚だったのか、スローモーションだった映像は元の速度に戻って、すぐに朝飛は見えなくなった。

一時の無音、ガサガサと木々が擦れあう音、そして最後に何かが落ちた音がした。

痛みは、無い。全ての感覚が麻痺しているようだ。

さつきよりも遠くなった夜空を見上げて、朝飛は先程の柚希ではなく、夕方のあの台詞を思い出していた。

『もしも、誰かに裏切られたら、朝飛様はどうしますか？』

分からない。どうすればいいかなんて。

『大丈夫です。朝飛様を裏切るような奴は、俺が始末しますから』

ぽつ、と朝飛の頬に何か落ちた。雨だ。

明日まで待つことが出来なかった雲が、ぽつり、ぽつりと雨を落としていく。暗い夜では、一体どんな雨雲なのかが分からない。この雨は、いつまで降るのだろうか。

この、星屑も皆殺しにした雨は。

桐生の忍 影送り組曲

28・影銃 L e t · s g o t o t h e n o t s a d w o r l d

BGM：アンダーグラフ「言葉」

さあ、哀しみの無い世界へ。

大量の雨が、音も無く静かに降り続いていった。雨によってうつすらとしか見えなくなってきたその光景を、魁は窓越しに見ていた。街灯さえも、夜の雨によって滲んでしか見えない。

「雨、止まないわね」

彼の隣で、志保がぼつりと言った。沈黙の続いていったその場で、志保の台詞はまるで空気に溶け込むようにして消えた。実際、誰もその言葉に返事をしなかったので、溶け込んだも同然だった。

二人が立つ、白くて薄暗い病院の廊下。そこには魁と志保の他に、椅子へと腰掛ける桃実と瑠璃がいた。空夜は、いまは四人の眼前にある部屋の中だ。

揃いに揃った、顔の知れた人間達。だけど、ここに居るべきはずの人間がいなかった。居なくてはならない人物。欠けてはいけな人物。

誰よりも、この病室の中にいる少年と、親しかった人間。否、親しいと思っていた人間が。

「…… 柚希、来ないわね」

またぼつりと、志保が言う。決して出されることの無かったその言葉を聞いた桃実が、食い掛かるようにして大きな声を張り上げた。「来るわけないだろ！ あいつが朝飛を殺そうとしたんだ！ 朝飛を裏切ったんだ！」

「落ち着け、馬鹿者が」

瑠璃がぴしゃりと言い放って、桃実はまた何かを言おうとしたが、ここが病院だったことを思い出してやめた。もう一度ベンチに座り直して、声を抑えて話し出す。

「だって、アタシは見たんだ…… 柚希が、朝飛を突き落とすところを……」

朝飛があんなにも信じていたのに。

例え難い表情で言った桃実を見て、魁は壁へともたれ掛かり昨日の出来事を思い出していた。

『朝飛が屋上から落ちた』

そう聞かされたのは、夜中の零時前だった。酔いの醒めないまま取った受話器の向こうで、動揺したように桃実が言ってきた言葉。

屋上から落ちてしまった朝飛を、たまたま近くを通りかかった会社帰りの住民が発見して、救急車を呼んでくれたらしい、と。訳が分からないまま病院へと着いた桃実が、整理の付かない頭でかけた電話だった。

病院へ駆け付けた魁と空夜に、桃実は青い顔をして言った。柚希が裏切った、とただ一言。

桃実が朝飛を追いかけた時、既に柚希と朝飛は屋上で何かを話していた。話の内容はよく聞き取れなかったが、柚希が自分の本当の名前は『桐生柚希だ』と言っていたのだけはかろうじて聞こえた。

その言葉に動揺していると、柚希はいつのまにか朝飛を屋上の端へと追いやり、そしてその腕を突き出していた。それを見て、声も出なかった。

一体何がどうなっている？ 柚希が朝飛を殺そうとした？

理解しきれない状況、飲み込めない現実。ただ一つ分かるのは、柚希が朝飛を裏切ったということ。

「全部、あいつの所為だ！」

耐えかねたように桃実が吐きだしたのを聞いて、魁は思い出すことを中断した。

「いまはそれどころじゃ無いじゃろ」

瑠璃が沈んだ眼差しで目の前のドアを見る。それと同時に、白いそのドアが遠慮がちに開いた。真っ白な風景の中に、はっきりと映る黒髪。

足下を見ていた異色の目が、四人を捉えた。

「空夜、朝飛の容態は？」

桃実がさかさず聞く。それに対して、空夜は複雑な表情をして答えた。

「……………怪我は、大丈夫。運良く木の上に落ちたお陰で直接地面に打ち付けなかったらしいから、ほとんど打ち身と擦り傷で。骨は折ってないし、先生も明後日には家に帰っても良いって言った……………けど」

声のトーンを落として、空夜は小さな声で言った。誰にも聞き取れないような、掠れた声で。

「外傷以外は、たぶん、治らないと思う」
しん、と廊下はまた前の静けさを取り戻した。肌に突き刺さるような錯覚を起こす沈黙を。

誰も何も言わない中、桃実だけが前に出てドアノブへと手を掛ける。その手の上に重なるようにして、空夜の手がドアを開くのを止めた。

「いまは、会わないほうが良い」

「いま会わなくてどうするんだい！」

制止を振り切って、桃実は病室の中へと消えた。それを後から追うようにして、魁が急いで入った。空夜はそれ以上何も言わずに瑠璃の隣へと座った。彼女は、そんな空夜を射るような目で見つめる。まるで何かを見透かすような目で、空夜の横顔を見つめていた。二人の向かい側では、窓ガラスへと押し当てていた右手を下ろし、両手を握りしめた状態で志保は震えた声を出した。

「……………ちょっと私、家に帰る」

視線を床から空夜へと移し、押し殺したような声で続ける。

「こんな時に、別行動取つてごめん。でも、志勇兄なら……火之基の頭なら、何か知ってるかもしれない。だから」

「僕は大丈夫だよ」

空夜は笑っていた。それが無理矢理作つた笑みなのか、それとも自然と出た笑みなのかは志保には分からない。志保は、嘘を吐くことが出来なければ、見破ることも出来ない人間だった。

「僕は、大丈夫だから」

「ごめんね。何か分かったら、すぐに戻ってくるから」

意志の強さが現れるその眼を廊下の先へと向けて、志保は向かうべき場所へと駆けていった。

彼女は、忍になるにはあまりにも真つ直ぐだ、と空夜は思った。

それと同時に、今まで自分が見てきた人物の中で、一番人間らしい、とも。

とつとつ二人だけになつてしまったその廊下で、沈黙は続く。

瑠璃も空夜も、お互い口数が多い方ではないから当たり前だろう。だが、それとは少し違うような気のする沈黙だった。何かを言いたい、言えない。そんな、居心地の悪い空気。

朝飛と、それから魁と桃実を飲み込んだ病室の扉を見て、空夜は隣の彼女へ向けて言葉を投げかけた。

「何か、言いたいことがあるんだろ？」

その言葉を待っていたかのように、瑠璃も同じように扉を見ながら答える。

「お前達の選んだ筋書きは、どうにも結末が読めん」

淡々と吐き捨てるように言った。

隣に座る少年は、感情を感じさせない声色で答える。

「望もうとも望まなくとも、いずれはこうなるように出来ていたんだよ。僕達が選んだわけじゃない」

「ならお前は、こうなることを望んでいたのか？」

「さあ……どうだろうね」

その問いかけには、空夜は答えることをしなかった。ただ曖昧な

返事と、どういう意味で微笑んだのか分からない笑顔だけを残す。どちらとも取れない答えに、瑠璃は自然と空夜を睨んでいた。「僕は、お前が少し怖い。肯定も否定もせず、ただ傍観しているだけのようじゃ」

「僕には、関係の無い話だから」

「関係無いわけなからう。お前の意思はどこにある？」

ずっと合わせていなかった視線を横へ横へとずらしていく。かち合ったのは、彼女の少し焦げ茶がかった黒瞳。

「瑠璃。僕はね、世界に対して無関心なんだよ。どんな人も、どんな事も、どんな物も、僕には無関係に出来てるんだ。だから意思なんてものは何処にも無いよ。何処にもね」

やっと合った目を逃がさないようにと、瑠璃はまばたきをせずに反論する。

「兄と、兄同様に慕っていた者が関わっていても、無関係なのか？」

「さあね」

にこりと笑って、肯定も否定もしない。さっきと同じ曖昧な答え。呆れた瑠璃は、話題を変えながら視線もずらした。

「…… 柚希は、恐らく殺すつもりなのじゃろう。とても生かしておくとは思えぬ」

「止めたいのなら、瑠璃が止めなよ」

投げたような、無責任な答え。食い掛かろうとしてくる瑠璃に先手を打つように、空夜は言った。

「僕も、柚希と同じだから。死んだ方が良いと思ってるから」
今度は、あの曖昧な笑みは無かった。

* * *

病室に入つてすぐに見えたのは、腕と額に包帯を巻き、点滴をした朝飛の姿だった。その目は何を映しているのかも分からない。何かを見ているつもりは無いのかもしれない。

壁も天井もシートも白いその部屋に、朝飛は違和感なくそこで上半身だけを起こしていた。元々、父親似な弟と違って、母親に似た所為か色素の薄い方ではあったが、それだけでは無いのは明らかだった。

いつもの朝飛は、そこにいなかった。

視線は、相変わらず右手にある窓の外を眺めている。

「あさ、ひ？」

「……出てって」

開口一番に出た一言は、拒絶を示すものだった。

「朝飛、怪我は大丈夫かい？ どこか痛いところとか、
「出てって」

魁にだけではない。それは桃実にも同じように向けられた。三忍衆にもこんな態度なのだから、空夜にも同じことを言ったのだろうか。まるで決まった台詞しか言えない人形のように、同じ口調で朝飛は言った。

それでも桃実は諦めずに話し掛ける。

「心配しなくても大丈夫だよ。あんたが家に帰ってくるまでは、桐生家や空夜のことにはアタシと瑠璃に任せときな。明後日には帰れるんだろ？」

「そうだ朝飛、志保が廊下にいるから呼んできてやるよ」

柚希のことは一切会話に出さずに、一方的に話し続ける桃実と魁。そのどれにも反応しなかった朝飛が、最後に突き放すように答え

た。

「いまは、誰とも会いたくない」

そう言うと同時に、両手で耳を塞いで続けざまに言う。

「お願いだから、出てって……！」

「朝飛……でも」

魁も桃実も、その悲痛な叫びにたじろぐことしか出来ない。それでも動こうとしない二人に、今度こそ朝飛は吐き捨てるように叫んだ。

「誰も信じられないって言うのが分からない?!」

叫ぶと同時に、傍らの枕を思いつきり投げた。それを魁が受け止め、ごめん、と呟いた。何に対して謝ったのかは、自分でも分からなかった。そんな彼の腕を引っ張って、桃実は病室のドアを開く。

「朝飛。誰も信じられないかも知れないけど、アタシはあんたの味方だよ。信じて」

桃実の泣きそうな声が朝飛の病室に響いて、かちやりと冷たい金属音が鳴った。部屋は、また静かな空間へと変わる。そこに、哀しげな声だけを響かせて。

「そんなの、信じられないよ……」

自分の腕に刺さった点滴の針を見て、朝飛は自嘲気味に笑った。

29・拒絶 The bell of the end begins to

灰色の世界は、黒色に染まり始める。
世界の終わりを告げる鐘が、鳴り始めた。
漆黒の世界になるまで、あと、わずか。

30・虚構 We were telling a lie for a lie

「
そうやって笑う顔を、自分は幾度となく見て来た。」

嘘だらけの世界の中に居ただなんて気付きもせず、その笑顔は信頼の証だと勘違いをして。

「
だけど、ああ、彼は今なんて言った？」

「
もう、終わりにしましょう。」

「
そうだ。確かに彼は、そう言ったのだ。」

「
自分のよく知っている、あの笑みを浮かべて。」

「
終わりが始まる話。」

「志勇兄！」

勢いよく和室の襖を開けると、そこに長兄の姿は無かった。いつもなら大抵この部屋に居るのだが、今回は違ったようだ。

「何処に行ったのよ！　こんな大事なときに！」

志保は襖を閉めることなく、また廊下を進んでいく。和室に居ないとなれば、後は見当が付かない。今日は特に外へ出るような予定は無かったはずだ。こうなったら片っ端から部屋を見ていくしかない、と志保が小走りで進むと、目当ての人物の声が聞こえた。

「志勇兄、見付けた！」

居間へ入ると同時に声を張り上げると、志勇は電話の最中だったらしく、表情だけで「静かにしろ」と志保へ伝えてきた。

「……分かった。忠告かたじけない……ああ、私の方からよく言い聞かせておく。では失礼する」

『私』と畏まっているところを聞くと、電話の相手は恐らく五忍樹かそこらだろう。兄は仕事のこととなると自分を作って見せるところがある。

誰と会話しているのか気になる所だが、それよりもいまは大事なことがある。受話器が完全に下ろされたのを確認して、志保は話を切り出した。

「ちよつと時間良い？　志勇兄に聞きたいことがあるんだけど」

「丁度良い。俺もお前に言わなければならぬことがある」

「言わなきゃいけないこと？」

こんな夜更けに外を彷徨っていたことだろうか。だが、朝飛が病院へ運ばれたと聞いて慌てて家を飛び出してしまったのだ。そのへんは仕方がないことだ。怪訝な顔をして見せる志保に、志勇は深く頷く。

「ああ……………桐生家について、だ」

そのまま、志勇は傍にあった椅子に座るように促した。聞こうと思っていたことを相手から切り出された志保は、言われるがまま、兄の向かい側へと腰掛けた。

「朝飛くんが病院に運ばれたそうだな」

何故そのことを知っているのだろうか。だが、すぐに思い当たるさっきの電話だ。あの電話の相手は、やはり五忍樹の誰かからによるものだったのだ。

志保が小さく頷くと、彼はあらたまった声を出す。

「今から言う言葉は火之基の頭目としてじゃない。お前の兄としてだ。いいか、志保。全てが終わるまで、桐生家に関わるな」

「……………なんでよー！」
反発した志保に向かって、怒るわけでもなく、志勇は静かに話し始める。

「……………何から話せば良いんだろうな。お前には、志斗と違ってあまり五忍樹の話をしていなかったから……………」

視線を空中に向け、志勇は目を瞑る。話すことは、本当はもう決まっている。

「志保。お前は、何故桐生家が五忍樹の長だと言われているか知っているか？」

不満を隠すことなく表情に出して、志保は首をふるふると振った。知っているも何も、この兄は何も教えてくれなかったではないか。

「知らない。何でも良いから教えてよ」

その答えを受け取り、志勇は心を決めた。

「そうだな、一番初めから話そうか……………」
深夜の静けさの中に、兄の声が反響した。

「……………そんな……………」

志勇が話し始めてから話し終わるまで、志保は声を出せなかった。

ただ、自分があまりにも無知だということを思い知らされた。無知で浅はかで、兄の語る言葉にただただ目を見開かせることしか出来なくて。

全ての話を聞き終えてやっと出せた言葉は、驚愕を表わす一言だけ。

「そんな、だって……それじゃあ、朝飛は……」

「もう一度言う。全てが終わるまで、もう桐生家と関わるな。これは忠告だ。でないと、お前まで巻き込まれてしまうぞ」

突き放すような一言に、志保は力無く首を振る。そんなことをしたところで、自分に出来ることなど何一つ無いと思い知ったばかりだというのに。

手に何かが落ちたことに気付いて、その時初めて、志保は自分が泣いていることを知った。

* * *

「なあ、空夜と志保は？」

部屋から追い出されてしまった魁と桃実が見た先には、瑠璃だけが椅子に腰掛けていた。

志保や空夜の姿は無い。瑠璃は持っていた缶コーヒーをゴミ箱に

向かって投げ捨て、魁を見ずに答える。

「空夜は家に帰った。火之基の小娘も自分の家に帰ったぞ」

「帰った？」

魁が鸚鵡返しに聞くと、何度言わせるんだとでも言うように瑠璃は溜息を付いた。

「ああ、帰った。志保とやらはまた戻ってくると言っていたが、空夜はたぶん戻ってこんじゃろう」

「空夜の奴、こんなときに何考えてんだ……？」

実の兄が大変だというのに、弟である彼が何もしなくてどうするというのだろう。魁が呆れと苛立ちの混じった声色で言う。

「じゃが、儂らもそろそろ帰らんといかんぞ」

時計を見れば、もう夜と言って良いのか朝と言って良いのか分からない時間になっていた。朝飛の一応の無事を確認したのだから、自分達もそろそろ帰らなくてはならない。

「朝飛のこと心配じゃが、儂らこうしていたって何も変わらんじやろう。病院側の迷惑にもなる。一度家に帰って、また朝になってから来れば良いじゃろうて」

「だけどよ、志保が戻ってくるって言ってたんだろ？」

魁がそう言うと同時に、微かなバイブ音が聞き取れた。慌てて彼がポケットから携帯を取り出す。病院で携帯を使うことは禁じられているが、画面に映った『火之基志保』の文字を見て取らないわけにはいかなかった。

「もしもし？ オレだ」

『……魁……勝手に帰ってごめん。あのさ……私、そっちに戻るって言ったんだけどさ……』

「ああ。丁度オレ達もその話をしてたんだ。戻るって言ったって、もうこんな時間だろ？ 取りあえずみんな一旦家に帰ることにして、朝になったらもう一度こっちに……」

『魁は、朝になったらまた病院に行くの？』

奇妙なことを聞くな、と魁は首を傾げる。

「オレか？ そのつもりだけだよ。お前も来るだろ？」

『私……行かない』

「……行かない？」

予想していなかったその返答に、魁はただ同じ言葉を繰り返すことしか出来なかった。受話器の向こうの彼女は一体何を言いだしたというのか。

『ごめん。でも、魁も行かない方が良く……もう、関わらない方が良く……』

「お前、何言ってるんだよ？ 朝飛のことはどうでもいいのかよ！」

『どうでもよくなかない！』

怒鳴るように返されたその声は、震えているように聞こえた。

『そんなこと、思ってた……でも……ごめん』

「おい、待て！ まだ話が……！」

一方的に喋って、一方的にその通話は切られた。虚しい音しか聞こえてこないその携帯に向かって罵倒を浴びせ、魁は電源を切った。

「くそっ！」

消化しきれない苛立ちを、壁に向けて放った。

* * *

朝になってみれば、本当に夜中に雨が降っていたのかと疑いたく

なるほど天候は晴れやかだった。

「ただ、地面には水溜まりが所々に残っており、やはり昨日の雨は嘘ではなかったのだと思いつき出させる。」

「朝飛。一口でも良いから、何か食べな？」

「一番先に病室へと来ていたのは桃実だった。」

「プレートの上の食べ物は一切手を付けられていないことに気付いて、桃実は朝飛に声を掛ける。だが、帰ってくるのは拒絶の言葉。」

「いりません」

「いらないうて……」

困ったように笑ってみせるが、やはり朝飛から聞けるのは拒絶の返事だけ。

起きあがりもせず、桃実の顔を見ようとせず、寝たきりの姿勢のままずっと反対方向を向いていた。

それ以上なんの反応も見せない朝飛にどうしたものかと桃実がサイドテーブルを見ると、水入れの水が残り少なくなっていることに気付いた。

「そうだ。アタシ、何か飲み物買ってくるよ。喉渴くだろ？」

「自販機は何処だったかな、と声に出しながら桃実は外へと出て行った。扉がかちやりと閉まる音を聞いて、朝飛は目を瞑った。横になつたままでは、窓の外も見えない。ただ、白い壁だけしか見えない。」

「朝御飯には手を付けなのまま、反対へと寝返りをうつ。」

「……………？」

「今まで全く気付かなかったが、枕の傍に何か白い便せんが置いてあるのが目に入った。確か、昨日までは何も無かったはず。眠っている間にでも置かれたのだろうか。」

「やっと起きあがって、それを手に取る。やはりそれは手紙のよう。」

「訝しがりながらも、そつと開いてみると、朝飛の目はこれ以上ないほどに見開かれた。声は、出ない。」

それから暫くして、病室から朝飛の姿は消えた。

「朝飛ー、起きてるかー……って、居ない……？」

病室のドアをノックもせずの開けたのは魁だった。

拍子抜けしたような彼の言葉通り、病室には誰も居ない。その代わり、サイドテーブルの上には手の付けられていない朝御飯が見えた。

「まったく、食ってないのに何処消えたんだ？」

美味しくはないと言われている病院食を覗き込んで、そのトレイの隣に紙切れが置いてあることに気付いた。

手紙のようにも見えるソレを、悪びれもせずに勝手に手に取り、中身を確かめる。

“ 屋上へ来てください。

曾根崎柚希 ”

その紙には確かに、そう書かれていた。

「……んだよ、コレ……！」

「首を突っ込むな、って言っただろ」

背後から急に聞こえた声に魁が驚いて振り向くと、名前の人物がそこに立っていた。

この病室にいるはずの少年と、いつもと言って良いほど一緒にいた人物が。

「柚希、てめえ……！」

今にも飛びかかりそうな魁を後目に、柚希は淡々と語り始める。まるで、目の前の人物など眼中には無いと言わんばかりに。

「あるところに、誰にでも優しく、自分にだけ優しくなくて、人よりも少しだけ強くて、人よりも少しだけ弱い人が居た。

普通の人よりも少しだけ特殊な家庭に生まれたその人は、けれどあくまで普通の人間として生きていた。

これからも、そうやって生きていくものだと思っていた。自分は特殊な家庭に生まれながら、特別では無かったと知っていたから。

だからこそ、その人は『弱さ』というものを持ち合わせていた。

だけど、ある日、その人には守らなければならない約束が出来てしまった。優しくすぎた為に、永遠に続くこととなってしまふ約束が。その約束を守るためなら、その人はどんなことでも出来た。そう、その為なら、誰よりも強くなることすら出来る。

自分の弱さを押し殺して、信じることも泣くことも止めた。

そんな人の心を折るには、どうすれば良いと思う？」

恐らく、魁に向かって問いかけたのだろう。まるで答えの出ないようなその問いに、魁は声が出せない。

いや、それだけではない。分からないから出せないのではない。

頭が働かないのだ。意識が白い霧の中に投げ出されたように朦朧としてくる。まるで何かの薬でも打たれたように。

「分からない？ 簡単なことさ……裏切るんだよ」

柚希が、今までに見たことの無い笑みで笑った。哀しいのか楽しいのか分からない。ただ、無理矢理作ったものだと分かる程度に。「何もしなくていい。ただ、今までいた位置から、一歩ずれるだけで良いんだ。そうすることで、その人を消してしまえる。そう思っ
てしまった人が居たんだ……。ああ、もう話すことも出来ないか」

もう立つことも出来なくなってしまうた魁に向かって、柚希は背を向けた。

「くそっ……待、て……！」

待っている時間など無い。

早く行かなければ。

屋上へ。

「おやすみ、鰐木魁」

屋上から望む景色は、別段綺麗という訳でもなく。誰も居ないその場所で、朝飛は立ち竦んでいた。

柵へと手をかけ、重心を少し前へと落とす。それが一番楽な姿勢だった。

誰が開けたのかは知らないが、出入り禁止となっているはずの此処へのドアには、鍵が掛かっていなかった。恐らくそうしたのは、自分をここへと誘った人物。

「ここで僕を殺して、終わらせるつもりなんですね」

朝飛は声を出す。

静かに扉を開いた人物に向かって放った言葉。

「それが、あなたのしたかったことなんでしょう？」

久しぶりに笑った気がする。朝飛はぼんやりと思った。自然と笑ったつもりだけど、やっぱりいつものように困ったような笑い方になっちゃっただろう。

「もう、終わりにしましょう」

振り返った先には、驚いたようにこっちを見つめる人間が一人。朝飛はもう一度同じ台詞を言った。

「もう、終わりにしましょう。桃実さん」

桐生の忍 影送り組曲

桐生の忍 影送り組曲

虚構の世界で少年は、

30・虚構
We were telling a lie for a li

31 戯言歌 Who is the twicer? (前書き)

真実が、半分だけ明らかになる話。

31・戯言歌 Who is the twicer?

「もう、終わりにしましょう。桃実さん」

いつものように微笑んで見せた朝飛に向かって、桃実は訳が分からないといった風に肩をあげた。

「一体何を言ってるんだい？　　ったく、部屋に戻ってみればあなたの姿がないもんだから、随分探したんだよ」

やれやれと溜息を漏らしながら桃実は言う。だが、朝飛の表情は変わらない。

「僕の枕元にあったあの手紙……あれは貴女が書いた物ですね。見舞いに来たふりをして、彼処へ置いたのでしょうか？　　ゆずきくんの字とは少しだけ違いました。筆跡を真似る余裕すら、貴女には無かつたから」

「……手紙？　　朝飛、さつきから一体何を言ってるんだい。アタシにはさつぱり……」

「僕は全部知ってるんですよ、桃実さん。いえ」

びう、と風が吹いた。二人の間を擦り抜けるようにして吹いた風の音の中で、はつきりとその言葉は聞こえた。

「波奈さん　　と、呼ぶべきでしょうか」

驚きは、隠せなかった。だがそれ以上に、笑いが込み上げてきた。馬鹿馬鹿しい。なんて馬鹿馬鹿しいんだろうか。

目の前の少年は、全部知っていた。知っていたのだ。

「ほんまに全部、知ってはるねんねえ……」

す、と自分の髪へと手を伸ばし、勢い良くソレを取り去る。そこからは、今まで見えていた色とは全く別の、きちんと切り揃えられ

た黒髪が現れた。

汚れを落とすように、腕で乱暴に口元を擦って口紅を薄める。目はまだ違和感が残ったままだが、確かにその姿は薬樹の若き頭目薬樹波奈と見受けられた。

「なんでばれてんやろうなあ……」

「人間というのは、大きな特徴を変えてしまえば印象が変わる。それを知っていて、鬘をかぶり、口調を変えていたんでしょ。僕もすぐに貴女が波奈さんだと分かったわけではありません」

ですが、と今までの言葉を否定する台詞を朝飛は入れる。

「煙草です。貴女は海老名桃実であるときは見せつけるように吸っていた。その代わり、薬樹波奈であるときは絶対に煙草を吸う姿は見せなかった。だけど、その独特の匂いは微かに残っていたんです」
相変わらず同じ表情で話し続ける朝飛に、波奈はひくりと片頬を引きつらせる。

「嫌になるわあ……その笑顔。いつも笑ってるもんやから、つい信頼されてるもんやと思ってるんけどねえ……」

そう言いながら、彼女は朝飛に向かって詰め寄る。一步、二歩と確実に間合いを詰め、そして四歩目に至ったその場所で、ぴたりと足を止めた。

朝飛には手を伸ばしてもまだ足りない距離で、

「それ以上、朝飛様に近付くな。この忍殺し」

柚希の針銃が背に当てられた。丁度、波奈にぴたりと影のように付いて、柚希は敵意とも殺意とも区別がつかない目を向けていた。

「……分らんわ、全然分からへん……。なあ朝飛君、なんでここに曾根崎君があるん？ 君を屋上から突き落としたはずの子やる？」

波奈は、まだ首を振る。分からないことを示すその表情は、もう無に近かった。

「それだけやない……うちが忍殺しの犯人やって、なんで分かりはったん？」

その問いかけに、朝飛は少し口を噤む。

騙っていた相手に話すには、余りにも嘘だらけな世界だった。
「始まりは、半年前。僕が、貴女の兄……薬樹帆波さんを『影送り』
したことから始まりました」

思い出すのは、あの日の風景。

「くそ！　なんで、なんでだ？　なぜバレた!？」

安っぽいネオンで賑わう繁華街、去りゆく人間に目もくれず、ただ信じられないとでも言いたげな台詞を吐いた男の姿を追いかけていた。

『影送り』をするときにはいつも身につけていた、あの狐の面をかぶり、藍色の衣服に身を包んで。走って走って、走っていた。五忍樹を裏切った裏切り者の彼のことを始末するために。

「裏切り者」

そう彼に向けて言えば、彼もまた皮肉めいた笑みを見せて笑っていた。「俺を始末するつもりなのか？」と問いかけながら。

朝飛は、始末しなければならなかった。

薬樹の頭首でありながら、非合法の薬を表の世界に流し、そして幾度と無く告げられた忠告にも耳を貸さなかった薬樹帆波のことを始末しなければならなかった。それが桐生家の責務だったから。

だから朝飛は、その繁華街の路地裏で彼を追いつめ、そして『影送り』した。

五忍樹を守るために。その為に作られ、その為に何人も斬つてきた疾風の刀を振り上げて。

まさか、その光景を、誰かに見られていたなんて思いもしなかった。

全ては一番最初に始まっていたのだ。

「表に影響を及ぼし、五忍樹全体の危機に関わるようなことをした造反者をあの世へ送る者の総称。

造反者殺しの『影送り』……他忍同士の争いは、例外を除いては基本的に禁じられてるし、殺すなんてもつてのほか。せやのにも拘わらず、忍を殺すことが許される唯一の存在。それが、桐生家の『影送り』。

それが、桐生家が五忍樹の長となった所以やてねえ……………

あの日、お兄ちゃんは桐生家に殺された。お兄ちゃんは何にも悪いことなんかしてへんかったのに！」

泣き声にも近い声音で、波奈は叫んだ。悲鳴のような叫びだった。「絶対に復讐してやろうと思った。あんた一人を殺すだけじゃ気が済まへん。せやから、」

「他の忍を殺した。忍が殺されて真つ先に疑われるのは、桐生家だから。忍を殺せるのは、桐生家だけだから」

朝飛が続きを言つて、彼女は可笑しそうに笑い出した。

「そうや！ 火之基の忍も、鏑木の忍も、それにうちの忍も消した。消されてへんのは桐生家だけ。火之基は直系まで殺されたのに、桐生家は誰一人として殺されてへん。これを怪しまん奴はおらんからなあ……。もしおつたとしても、薬樹家に『犯行現場に桐生家の持つ疾風の欠片らしき物が落ちていた』なんてゆわれたら、疑うしかあらへん。

何もしてへん忍を殺した桐生家は、五忍樹の裏切り者。そんな桐生家が何ゆうても、誰も何も信じへん。そこで長の地位を降ろされて、軽蔑の眼差しを向けられて、苦しめて苦しめて、それから『影送り』と頭目を殺してやろうと思った。桐生朝飛、あんたをな！」
頭を上へと向け、雲一つ無い晴天を見上げて波奈は続ける。

「『影送り』をした桐生家の頭目を殺して、その刀を作り出した鏑木家の頭目を殺して、そして……薬樹家を五忍樹の長にする。そうすれば、きつとお兄ちゃんは喜んでくれる！ お兄ちゃんは間違つてなかつた！ 間違つてたのは桐生朝飛だった！ お兄ちゃんは何

も悪いことなんかしてへんかったって、そこで証明される！」

狂ったように笑い続ける波奈へ、柚希が声を張り上げた。

「そんな馬鹿な話があるか！ 葉樹帆波の作ったドラッグの所為で、表の人間が何人不幸になったと思ってるんだ。その所為で、裏の人間が、五忍樹全てが無くなってしまいかもしれなかったのに！ 朝飛様は間違つてなんかいない！」

怒りに任せて針銃の引き金に力を込める。だが、冷静でないままの状態では見当違いの場所にしか当たらない。

そんな、前までの忠実な側近の姿の柚希に向かって、氷のように冷たい声を彼女は吐きだした。

「あんたは一体、何者なん？ いつもいつも桐生朝飛の傍に引っ付いていて、お陰で何も出来へんかった。三忍衆に入って朝飛の信頼を得て、それで裏切った後に殺す機会を伺ってたのに、いつもあんたがおる所為で上手くいかんかった。邪魔で仕方なかった。せやのに、急に屋上から突き落としたり」

くるりと振り返り、柚希の目を食い入るように見る。その目は、恐ろしいほど憎悪の念に満ちていた。

「あの時は焦ったわ。うちが殺そうと思ってた人間を、先に殺されてしまったと思つてなあ……」

「貴女を迎え撃つために、そうしたんです。いつ襲われるか分からないよりも、こちらの思い通りに動いてもらおうと。『不測の事態』を用意したんです」

思つてもみなかつた人間が、朝飛を殺そうとする。自分が殺そうとしていたのに、さきを越されてしまう。

だけど朝飛は生きていた。心が壊れてしまったように見せかけて生きていたと言うことは、また柚希が殺しに来るかも知れないということ。一体何がどういう理由でかは分からないが、柚希は朝飛を殺そうとしていた。だが先を越される訳にはいかない。

自分で殺さなければ、気が済まない。

そう思つた波奈が、すぐに行動へ移すように。

「そして貴女は、僕達の作った舞台の上へとあがってきた」
「うちが、あんたらの手の上で踊らされてたとも言いたいん……
?!」

それでは、自分は一体何をしてきたというのだ。これではまるで失敗するのが目に見えている道化師ではないか。

波奈の握る拳が震える。

そして、また、彼女は笑い出す。狂った笑い声を高らかに響かせた。

「あははははははっ！ それで？ うちをどうするつもりなん？
影送りするんか、桐生の次期頭目。全部あんたの所為やのに！」

泣きながら、それでもまだ笑い続ける波奈に朝飛は目を大きく開く。

「違う、僕は間違っただけなんかない、間違っただけ……だって、ああしくちやいけなかつたんだ……！」

「殺して殺して、あんたに復讐するためだけに忍を殺してきたうちを、影送りして、それで終わりにするんか！ 直系を失った薬樹を消滅させて、五忍樹から名前を排除でもするん？ あはははははっ、悪いのはうちじゃないのに！」

袖希が針銃をかまえる。と、その時、後ろで人の気配がした。

「お前が、大河さんと鉄平さんを殺したのか……！」

巻きませないようにと袖希が眠らせておいたはずの魁が、そこに立っていた。腕に刻まれた切り口から、ぽたぽたと血を流しながら、恐らく痛みで目を醒ませたのだろう。

その魁が、桃実に向かって言い放った。

「お前が忍殺しだったんだな!？」

「鰐木の、次期頭目……お兄ちゃんを死なせた刀を、作った一族……！」

さっきまで虚無感に襲われていたはずの桃実が、魁の方へと向き直る。懐に忍ばせて置いたナイフは確実に魁を狙っていた。

「危ない！」

叫んだのは、誰だったのか。

飛び出したのは、朝飛だった。何も出来ずに立ち竦んでいたのは魁だった。引き金を引いたのは柚希だった。

倒れたのは、誰だ。

終わるのは、誰だ。

31・戯言歌 Who is the twicer? (後書き)

桐生の忍 影送り組曲

3
2
・
空
蝉
歌
A
t
l
a
s
t
,
a
l
l
w
e
r
e
u
n
d
e
r
s
t
o
o
d

柚希の撃った針は外れ、飛び出した朝飛は魁を押し倒すようにして雪崩れ込み、波奈の振り上げたナイフの刃が太陽の光で目映く反射した。

だが、それ以上そのナイフが下へと向かうことはなかった。

「……邪魔せんといて！」

波奈の腕は、行き場を失って宙で静止していた。この先には、殺してやりたいと思っていた魁と朝飛がいるというのに、その腕を振り下ろすことは出来なかった。

「はよ、どいて……！」

彼女の声が震える。怒りなのか哀しみなのかは、誰にも知る由は無い。彼女の動きを止めた人間も、同じように声を震わせて叫んだ。「やだ……！」

両手を精一杯広げて、志保は叫んだ。首が取れてしまうのではないかと思うほどに左右に振り、何度も拒否の言葉を叫んだ。

「絶対にどかない！」

「どけ！　せやないとあんたも殺す！」

「殺せばいい！」

一段と大きく叫んだ志保の目からは、ぼろぼろと涙が零れていた。だが、それは恐怖からじゃない。こんなことしか出来ない、自分の不甲斐なさから来る口惜しさだった。

「私も志勇兄も、朝飛に酷いことした………志斗兄が殺されて、それを朝飛の所為だと思って………なのに朝飛は、私達も守ろうとして……！　だから、今度は私が守ってあげなきゃいけないの！」

目の前で怒りの感情に染まった波奈の顔を見つめながら、あの時の兄の言葉を思い出す。

無知だった自分を思い知らされた言葉を。

『そうだな、一番初めから話そうか……。五忍樹は、言ってしまったえば閉じられた世界だ。』

苗木之下は、五忍樹の一員となる子供を養育し、それぞれの一族は新たな忍を得る代わりに苗木之下への資金援助をする。

鰐木と薬樹が生産した武具や薬を受け取り、火之基と桐生は外へ出る。それが、消滅していく忍家業をこの世に残すための「五忍樹」という小さな世界だった。

この世界を守るために、造反者を裁く人間が必要だった。影のような忍を、送るための人間が。

そんな重い責務を請け負ったのが、桐生家だった。

だがいくら五忍樹の為とは言え、納得出来ない人間も出てくる。

影送りはそんな彼等に怨まれる。時には、殺意すら抱かれるほどに。そしてその殺意は暴走をして周りまでも被害を与えることがある。

“兄さんはきつと、志保や魁にまで危険な目にあってほしくない。

だから、今は桐生家に関わらないで欲しい。もうすぐで終わるから。”

空夜くんからの、電話の内容だ。

魁くんにも伝えてやれ。今のお前達に出来ることは無い。あるとするなら、巻き込まれないようにすることだ。』

だけど。

だけど、それは逃げているように思えた。嫌なことを全て朝飛一人に押しつけて、自分だけ無関係を装って、逃げてしまっているだけだと。

「影送りでお兄さんを失って、悲しいのは分かるの……！ でも、影送りをする方だって、同じくらい辛いに決まってる！」

志保の言葉に反論できずに、上手く声を発せられないまま波奈は立ち竦んでいた。

そんなことを言われたって、この怒りが収まるはずもない。自分の前に立ちふさがる少女は邪魔でしかない。だけど、志保まで殺してしまえるほど、波奈は非情になりきれない。

その隙をつかれて、波奈は袖希にナイフを奪い取られてしまった。「観念しろ」

武器は、無い。憎い人間を殺すことも出来なければ、何も出来なかった自分を殺すことも出来ない。

糸の切れてしまった人形のように、波奈はその場へ崩れ落ちた。

そんな彼女から目を離し、今度は座り込んだままの朝飛を見下ろす。

「……この……」

そのナイフを収めながら、袖希は目を吊り上げた。

「……何考えてんだ、この馬鹿！ 死ぬ気か!？」

溜め込まれていた苛立ちと呆れと怒りとが一気に吐き出された。

今までに見たこと無いくらいに、袖希は顔を真っ赤にして怒っていた。

「なんで考え無しに飛び込むんだ、朝飛！ もし火之基志保がいなかったらどうするんだ!？」

いつものように敬語ではなく、言葉遣いまで荒れている。

それを見て、そしてその懐かしい口調を聞いて、朝飛はやっと安堵した。生きてる。魁も志保も波奈も袖希も、そして自分も。

そんな呆けたままの朝飛を見て冷静になったのか、袖希は大きく息を吐いて頭を下げた。

「……申し訳ありません。つい……。立てますか？」

「うん。大丈夫だよ」

そう言つて、やっと朝飛は立ち上がる。魁はまだ訳が分からない顔をしている。志保はさつきから泣いたままだ。

本来ならこの場にいるはずのなかった二人は、朝飛の歩いていく先を一心に見ていた。

「僕がちゃんと、終わらせなきゃ」

そう。中途半端に終わらすことは出来ない。自分達で作り上げた筋書きは、まだ終わっていない。

力無く座り込む波奈の前に立ち、朝飛は淡々と話し始めた。

「波奈さん。貴女は無関係の忍達を何人も自分の手で殺し、そして僕も殺そうとした。残念ながら、貴女の実在は五忍樹を揺るがす者と見なされるでしょう。貴女のお兄さんと同じように」

ぴくり、と波奈の肩が動いた。咄嗟に袖希が針銃をかまえる。だが、それを下ろすようにと朝飛が無言で指示する。

もう彼女に、為す術はないのだから。

それまでの機械的な話し方をやめ、朝飛はいつものように彼女の名前を呼んだ。

「波奈さん。本当はあの時、貴女は僕を殺すことが出来たんです。

僕が屋上で柵に寄りかかっていたとき、僕は貴女に背中を向けていました。だけど、貴女は迷っていた」

「……そんなことあらへん。うちは、あんたを殺そうとしてた」

ぼつりと、答える。それでも朝飛は話し続ける。

「貴女は怖かったんでしょ？ もし失敗してしまえば、自分が造反者だとばれてしまう。影送りされてしまう。そうして直系の居なくなつた薬樹が、消滅してしまうことが」

もう一度、朝飛は幼子に言い聞かせるように言う。

「それが怖くて出来なかつたんでしょ？ 貴女は一族思いの頭目だつたから」

波奈は何も答えなかった。

答えない代わりに、涙の跡を残した顔で皮肉っぽく笑った。

「それでも結局、全部終わってしまうやん。うちが影送りになつて、

薬樹は終わりや。うちの所為で終わりなんや」

波奈に向かつて、朝飛はしつかりと首を振った。

「いいえ。貴女のことは影送りにせず、警察に任せることにします。たくさんの人を殺めたその罪を償ってもらうために。そして……」

後ろにいる柚希を見る。彼は小さく頷いた。

「父との約束で、僕は一年間影送りをすることと引き替えに、次期頭目になる権利を得ることが出来ました。その権利を行使して『五忍樹の頭目は直系でなくても受け継ぐことが出来る』ように、変えてみせます」

それが、この閉じられた世界を守ることに繋がる。そう信じて。

このことを波奈がどう思ったかは分からない。それでも、朝飛はそうすることが一番良いと思った。

「僕の勝手な我が儘ですけど」

そう言った朝飛に続くように、魁が立ち上がって言う。大量のピアスが、揺れた衝撃できらりと反射した。

「鰐木の次期頭目として、オレもそれに賛成しておくよ。あんたが罪を償うことで、オレの仇討ちは終わりにする」

志保も同じ意見だったらしく、何度も頷いていた。まだ泣きやむことが出来ずに、ぼろぼろと涙をこぼしながら、それでも強く頷いている。

朝飛が静かに問いかける。

「それで、終わりにしませんか？」

瞬きを忘れたように、波奈は朝飛を凝視する。

罪を被せられ、そのうえ殺されそうになってたというのに、この少年は一体何を言っているのだろうか。

分かるのは、一つだけ。

「優しすぎるわ……影送りなんかに向いてへんよ、あんた……」

波奈が頷いたのを見て、朝飛はやっと笑えた気がした。

終わった。
やっと、全部、終わった。

そう思うと、急に眠気が襲ってきた。

ずっと張り詰めていた何かが、まるでぷつんと切れてしまったように。

「……朝飛!？」

急に倒れた朝飛を見て、柚希が慌てて駆け寄ったが、もうすでに
瞼は閉じられていた。

まるで、怖い夢の所為でずっと眠れなかった子供が、ようやく眠
ることが出来たような表情で。

起こしてはいけない気がした。起こす必要も無いだろう。

「おやすみ」

柚希が、そっと呟いた。

静かに眠りにつく世界の中で。

32・空蝉歌
A t l a s t ,
a l l
w e r e
u n d e r s t o o d

朝飛は、まるで動くことのない人形か、死んだ人間のように滾々と眠り続けた。

和室に敷かれた布団の上で身じろぎ一つせず、何かの悪夢に魘されることもなく、ただ静かに眠っていた。

そんな朝飛の様子に安心したように見て、柚希は部屋から出る。「終わったんだね」

襖を閉める彼のすぐ傍では、空夜が立っていた。

「はい」

「……じゃあ、僕の肩書きは変わるんだね」

「はい。桐生家の次期頭目となる権利は、空夜様から朝飛様へ移されました」

「そう」

特に興味無さそうにして、昨日まで次期頭目だった空夜は返事をした。別に、肩書きに執着など無かった。単に自分を示す代名詞が変わっただけだ。

そんなことよりも、自分にはしなければならぬことが出来た。

「さて……と。終わったってことは、もう、刃物が怖いふりもなくて良いんだよね？」

「もちろんです。もう嘘は吐かなくても良いんですよ」

解放された。まるでそんな風に、空夜は大きく伸びをする。

「兄さん、あの様子じゃ当分は起きないだろうね」

「ですね。気が休まる日なんて無かったですでしょうし」

襖の向こうで泥のように眠る兄を想像し、空夜は伸ばしていた両腕を勢い良く下ろした。

「じゃあ、夕飯の買い物にでも行ってくるよ。腕が鈍ってなきやいいんだけど」

包丁を使うのは久しぶりだから、と心配そうに右手を閉じたり開

いたりする空夜に、柚希は自然と微笑んだ。それに気付かずに、空夜は玄関へと足を向ける。

「……あ、そうだ。魁達が居間で待ってたよ。はやく行ってあげないと。いろいろ聞きたいことがあるみたいだし。主に魁が」

どうやら、話すのが面倒になって買物へと逃げることにしたらしい。そんな彼の背に向かって、柚希は苦笑気味の表情を隠せずにいた。

居間に入ると、空夜の言っていたとおり魁と志保が手持ち無沙汰に椅子へと腰掛けていた。

この光景に違和感を覚えなくなるだなんて、随分と馴染んでしまったものだと柚希は顔には出さずに驚く。人が居るだけで、こんなにもこの家が明るくなるだなんて。

志保は兎も角、それが魁のお陰だと思うのはどうにも癪だったの
で、柚希は唐突に魁へと突っかった。

「うわ……すっげー馬鹿面」

「第一声がそれかよ！」

いちいち五月蠅い奴だ、と思いつきり顔に出して柚希は志保の向かいの席に座った。

「朝飛はどうだったの？ 大丈夫なの？」

「ええ。眠ってるだけです。魔されてもいませんでしたし、大丈夫です」

それを聞いてやっと安心したのか、志保はほっと胸を撫で下ろした。

柚希は、そんな彼女のことを良い人だと思う。真っ直ぐで、正直で、素直で。どこにでも有り触れた人間のようできて、そうじゃない。

だからこそ、彼女は忍には向いていないと思った。

彼女から視線を外し、今度は魁の方を見る。

「で？」

主語も述語も何もない。ただ一言そう聞いた。それに対して、魁は簡潔に用件を述べる。

「志保から大体のことは聞いた。だけど、まだ気になることがあるだよ。お前の、」

「あ、そうだ。牛乳が切れてたんだった」

思いつきり魁の言葉の途中で、柚希は両手をぱんと合わせた。しまった、と頭を掻く姿に魁が殴りかかろうとするが、もちろんそれを華麗に避けて。

ひらりと魁の拳をかわす柚希に、志保は続きを促した。

「牛乳がどうしたの？」

「いえ、大したことじゃないんです。空夜様が夕飯の買い出しに行かれたのですが、牛乳を頼むのを忘れてたんです。でも、もう出て行かれた後だし……」

「それなら私が言ってきたらあげてあげてあげてあげて。別に私は魁みたいに聞いたことなんて無いし、空夜一人で買い物するのは大変でしょ？」

そう言いながら立ち上がる志保に、申し訳なさそうに柚希が尋ねる。

「本当に宜しいんですか？」

「いいのいいの」

気前よく手を顔の前で振り、志保は店の位置を柚希に確認してばたばたと出て行く。

完全にドアが閉まる音がして、魁は豪快に座り直しながら問うた。

「……志保に聞かれちゃまずい話なのかよ？」

「火之基さんは、嘘を吐けない人だと思っから」

あまりにも、真っ直ぐすぎて。

嘘を吐くことに慣れてしまった柚希は、自嘲するように笑った。

「で、続きは？」

「あ……聞きたいことは山ほどあったはずなんだけどな。取りあ

えず、お前、何なんだよ？」

それは、いつかに聞かれた問いかけと同じだった。曾根崎袖希とは、一体何なのか。

「結局お前が裏切ったのは敵を誘い出すための芝居だったし、お前が桐生家の忠実な部下だったってのは分かる。けど、それ以上の存在でもあるんだろ？ アルバムに貼ってあった写真には、本来なら苗木之下で過ごしている筈の年頃から、お前は桐生家に居た」

そこまで聞いて、袖希は心底驚いた顔をしてまじましと魁を見つめていた。

「…不法侵入までしてたのか、お前…最低だな、さすが馬鹿貝…」

「…まあ、勝手に家に入ったのは悪いと思ってる。だけど、結局どれもこれも不明だった。生年月日も、家族構成も、本当の名前も」
半ば呆れた顔のまま、袖希は答える。

「それに対する答えは、前と同じだ。俺の名前は曾根崎袖希……」
「…だけど、最初は違う名前だった」

袖希は、今度こそ本当のことを口にした。もう嘘を吐く必要はどこにも無いから。

「桐生袖希。小さい頃はそう名乗っていた。本当の名前も、出身地も、生年月日も、家族構成も、何も分からない。その名前だけが、俺を証明するものだった」

自分が持ち合わせていたのは名前だけ。それ以外は、何も分からなかった。

「俺は赤ん坊のころ、桐生家に拾われたんだ」

「朝飛、空夜！ 次はあの公園！」

幼い自分が、前に向かって指を指す。

「ゆずきくん、待ってえやー。空夜がまだ来てへんねん」

走り出そうとする自分の腕を引っ張って、まだ幼い弟の心配をする兄。

『あさにー、ゆずきー』

一番小さかった弟は、いつも自分達のことを追いかけるのに必死だった。

そう、何も知らなかったあの頃は、まるで兄弟のようだった。

毎年夏休みになると桐生家へと遊びに来る二人の兄弟。関西特有の方言で話す彼等は、自分のことを兄のように慕ってくれた。そして自分も、まるで弟のように接していた。

夏の帰省の時にだけにしか会えない分、ずっとずっと一緒に遊んでいた。

その時の家族だった桐生秋人の孫にあたる彼等兄弟と自分は、親戚の類だとばかり思っていて。

だけど知ってしまった。自分が捨て子だったこと。この家の子供ではないこと。そして拾われた先が特殊な家だったことに気付いたとき、あの兄弟もまた自分達が普通ではないことに気がき始めた。

自分達は、特殊な家系にいるのだと。

そして、朝飛達が本家に引っ越してくることが決まった年に、柚希は決心した。

桐生の名前を捨て、桐生の忍として生きていこうと。それが、そのままのたれ死んでいたかも知れない自分を何不自由なく育ててくれたこの家に対する、恩返しになると思つて。

「五忍樹の家の子供が頭目になるのは、大概が年功序列式だ。兄弟がいるなら、一番上の人間が跡を継ぐ。だけど桐生家だけは違った。影送りの責務を負う桐生家は、実力と才能を重視した。その結果、次期頭目は空夜様がなることになった」

「空夜が……？ 朝飛じゃなくて？」

理解しきれずに、魁が何度も疑問の声をあげる。

それもそうだろう。魁は、空夜が忍としての活動をしているところを見たことが無いのだから。

柚希は深く頷いて続けた。

「空夜様は、天才だった。あらゆる面に置いて、忍としての資質を兼ね備えていた。それに反して朝飛様は、どれを取っても空夜様を越えることが出来なかった。ただ一つだけ、走ることに関しては朝飛様の方が上だったけれど」

この二人の中からどちらか一人を選ぶとしたならば、当然空夜を選ぶだろう。それほどまでに、実力の差は明らかだった。

それに対して、朝飛が不満を抱くことは無かった。それがごくごく普通のことだと思っていたから。弟が選ばれて当然のことだと思っていたから。

自分は、特殊な家に生まれたが、特別ではないのだと知っていたから。

だからこそ、自分が頭目になる必要もなる理由も無い。朝飛はそう思っていた。

「あの出来事が、起こるまでは」
柚希の声が、一段と低くなる。

「言っただろ？ 朝飛様には守らなければならない約束が出来てしまったって。優しすぎた所為で、永遠に続くこととなってしまったって」

たった一言の約束だった。

ありふれた、どこにでもあるような言葉で紡がれた、そんな約束。

その約束がされたのは、夏の暑い日だった。

朝飛達がこっちへ引っ越してきてから初めての夏。柚希が、朝飛

達に兄のように接することがなくなっってから来た、初めての夏。

その日桐生家は、惨劇に見舞われた。

『影送り』に納得することが出来なかった忍が、桐生家を襲ったのだった。

忍の狙いは、影送りである桐生頭目を殺すことだった。だがその日、その場にはイリアと朝飛しか居なかった。

ならば、と忍は考えた。

ならばせめて、次期頭目を殺してしまおう。そして狙われたのが、無関係のはずの朝飛だった。本当の次期頭目は空夜だと言うのに。

イリアは、朝飛を連れて外へ逃げた。

逃げて、逃げて、逃げて、冬悟が助けに来てくれるまで朝飛を守りきらなければならぬと、必死で手を握って。

だけど、幼い朝飛を連れて走り続けることは困難だった。

何処かに隠れなければ。そして逃げ込んだ、工事現場の資材置き場。

ここなら大丈夫だと朝飛が上を見上げたとき、何か降ってくるのが見えた。逆光になってよく見えないが、確かに何か落ちてくるのが。

その向こうで、確かに誰かが笑っていたのだ。

「お母さん!」

朝飛が声を出すと同時に、耳を劈く音ツネがした。

大音量の破損音、何か割れる音、イリアの声。

「僕じゃ、ないのに……」

自分の上に覆い被さったイリアは、ぐったりとして動かなかった。周りには鉄の錆びたような匂いだけが立ちこめていた。

自分のすぐ横には、ガラスの破片が飛んでいた。動かない母をどうにかして起こそうと身体に触れたとき、何か切れる痛みと、ぬるっとした何か手が手に付着するのが分かった。

そこに付いたのは、母に刺さったガラスで切った傷と、母の血。

「…だれか助けて、お願い、誰か助けて…このままじゃ、死んじやう…誰か」

誰も、来てはくれなかった。

泣き出した朝飛の手に、そつとイリアの手が添えられる。

「朝飛。大丈夫だよ。大丈夫。お父さんが助けにきてくれるよ」

母がそう言えば、なんとかなる気がした。幼子は、その言葉を信じて必死で泣くのを止めた。

「朝飛は強い子だね。空夜はまだまだ弱いから、お兄ちゃんが守ってあげてね」

噎せ返りそうないいの中で、母が言った言葉。

「朝飛が空夜を守ってあげてね。約束よ」

最後に交わした言葉が、幼い朝飛にとって、永遠に続くことになってしまふ約束となった。

父が助けに来てくれたのは、母が喋らなくなってしまった後だった。

「どうして誰も助けくれなかったの」

もう流す涙も残っていない。

朝飛はどうにもならない気持ちを冬悟に押しつけるしかなかった。

「どうして…」

悪いのは父ではない。だけど、責めずにはいられなかった。助けに来てくれると信じていたのに、と。

「たすけてほしかったのに」

その言葉は、袖希に一生活ることのない傷を付けた。

守ってあげなければならなかった。だけど、助けることすら出来なかった。だから、今度は何があっても助けられるように、一番傍に居ようと思った。

それから現在に至るまで、朝飛は『約束』を守ることだけに生き

てきた。

母を死なせてまで生きてしまった自分がしなければならぬのは、最後に交わした約束を守ることだと、朝飛は盲目的に信じていた。

こんな思いをするのは自分だけで良いと、空夜には『母は家を出ていった』と嘘を吐き、死んだことは伝えなかった。

頭目になつてしまえば、必ず影送りが付いてくる。そうすれば、次にあんな目に合うのは空夜かもしれない。それを避けるために、朝飛は自分が次期頭目になろうとした。だけど、実力でも才能でも弟に劣る人間がなれるわけもなく。

それでもと食い下がった朝飛に出された条件は、一年間影送りの仕事をする事だった。

「そして、やっと一年間が過ぎたんだ」

柚希の言うとおり、朝飛は次期頭目になった。朝飛の望み通り、空夜を守ることが出来るように。

「もしかして、アイツが学校を辞めたのも……」

魁が指摘してきた言葉に、柚希は小さく首を縦に振る。

そう、全ては約束を守るため。

「影送りをする為には、学校に行く暇なんて無かったから」

「そんな……」

絶句する魁に向かって、柚希は悲しそうに言った。

「誰にでも優しいくせに、自分にだけ優しくくない。言っただろ？」

朝飛様は、たぶん、自分を許せないんだと思う。あの時何も出来なかった自分が」

俺だって同じなのに。

呟くように柚希から漏れた一言が、魁に重くのし掛かった。

桐生の忍 影送り組曲

33 記憶 The world where bell finished

助けて欲しかった弟と、
助けてあげられなかった兄は。

もう話すことは無いとでも言うように、柚希は黙り込んだ。奥の窓を見れば、もうガラスは橙色の光が反射して入り込んでいた。空夜と志保もそろそろ帰ってくる頃だろう。

同じように黙っていた魁は、何枚かの紙を取り出す。それは全て双葉からもらった資料の紙だった。

「……空夜の先端恐怖症は嘘だった。だけど、この資料の中には、食器の破片を見て怯える桐生家次兄の姿が確認されている。……これは、成りかわった朝飛だったんだな？」

資料を受け取りながら、柚希が薄く微笑んだ。

「ああ。空夜様が次期頭目として冬悟様の仕事を見に行かれるとき、必ず二人はお互いに成りかわった。そうすることで、次期頭目は朝飛様だと思いこませることが出来た。海老名桃実……いや、薬樹波奈は影送りを殺そうとしていた。影送りとは、本来頭目か次期頭目がする仕事だったからな」

「これも、空夜に危害が加えられないように……か」

もうこそそと調べる必要も無い。双葉から受け取った資料全てを柚希へ渡して、魁は立ち上がった。

「本当、あいつは誰にでも優しいんだな。あれだけ自分を追い詰めた薬樹波奈にだって、情けをかけるんだからな」

「え？」

聞き直してきた柚希に、魁が首を傾げながら言う。

「だってそうじゃねーか。直系が居なくなっても、薬樹家がなくならないように、直系以外の者が頭目を継げるようにしたんだろ？」

当たり前のように聞き返してくる魁に、柚希は分からない程度に唇を噛んだ。それからしばらくして、曖昧に微笑みながら答えた。

「……そうだな」

「オレ、朝飛の様子見てくるわ」

後ろ向きに手を振りながら出ていく彼の姿を見て、柚希は慌てて立ち上がった。

「……なあ!」

「ん?」

口にした後で、気付く。

自分は、いま何を言うつもりだったのだろう。それを言って、どうするつもりだったのだろう。

柚希は不思議そうに返事をした魁を見て、その先を言えなくなつた。

「……いや、なんでもない。五月蠅くして朝飛様を起こすなよ」

「わかつてるつつの」

今度こそ部屋から出ていく魁を見届けて、柚希は静かに椅子へと座つた。

そう。あいつの言うとおりだ。朝飛は誰にでも優しい。

だけど、『直系以外の者が頭目を継げる』ようにしたのは、葉樹家の為なんかじゃない。

朝飛がああしたのは、空夜の為だ。それ以外の何者でもない。

もし万が一自分に何かが起こって、頭目ではいられなくなつたとしても、その後を空夜が継がなくても良いように。空夜が頭目にならなくて良いように。

『直系以外の者』が、桐生家を継げるように。そう、例えば、自分のような人間が。

ただ、それだけ。

「朝飛の護りたいものの中に、朝飛は入ってないんだよ……」

誰も聞くことの無いかつて兄だった人間の言葉は、静かに消えていった。

* * *

立ち尽くす朝飛の目の前で、今よりも幼い自分と、少年が立っていた。少年は泣いていた。

嗚咽もあげずに、ただ、はらはらと涙を流して。

幼い自分は、その少年へと話し掛けた。

『どうして泣いているの？』

そんな風に声をかけられて、少年は慌てて服の袖で涙を拭う。目も目の周りも真っ赤になっていた。

『……泣いてなんかない』

首を振る度に、黒い髪がぱさぱさと揺れ動く。

『じゃあ、どうしてそんなに悲しそうなの？』

小さな朝飛がそう問いかけると、目の前の少年は哀しみと悔しさの混じった表情で必死に口を動かした。

『護りたかったんだ！ 本当は、護りたかった！なのに……駄目なんだ。護るためにあるんじゃない。みんなを、傷付けちゃうんだ』

必死に叫ぶ。何も言わず、何も聞かない朝飛に向かって、少年は叫び続けた。

全てを言い終えた少年に、幼い朝飛は諭すように何かを言う。静かに、だけど微笑みながら。

朝飛が一生懸命話している内に、少年の涙は乾いていた。

「ね。約束だよ」

『分かった。約束する』

二人の小指が絡まり合って、指切りをする。その指切り歌がどんどんと遠くなっていって、辺りも白い霧の中へと包まれていく。

長い長い夢だった。

「思い出した！」

飛び上がるようにして起きると同時に、額に何かがぶつかった。だが、起き抜けの頭では痛覚がはつきりと伝わらなかったらしい。痛くも何ともない。

「……っつー……！」

朝飛がそのまま立ち上がると、足下には頭を両手で押さえ込んで悶える魁が転がっていた。どうやらさっきの障害物は魁だったようだ。

勢い良くぶつけたので、相当痛いだろう。

「なんだ、魁居たの？」

「居たのっってお前……っつえー……ちよ、どこに行く気だよ？」

「電話するんだよ」

そう言いながら寝間着を着替えて、薄手のパーカーを羽織り、朝飛は電話を求めて早足で廊下へと出て行く。

死んだように眠っていたかと思えば、次は今までに見たこと無いくらいに生き生きとした表情を見せて。

だが、それが本当の姿なのかも知れない。今まで見てきた朝飛は、作り上げてきた舞台に立つ、演じられた彼の姿だったのだから。

あまりの朝飛の行動の早さに、魁はしばらく座り込んでいたが、思い出したように朝飛の後を追った。

「お前、電話って誰に……」

「しっ！」

静かに、と人差し指を口元に当てる朝飛の右手には、しっかりと受話器が握られていた。行動が速い。

電話の相手は一体誰なのだろうか、と魁が訝しげに首を傾げると、朝飛が楽しそうに笑った。受話器の向こう側のベルは、鳴り止んだらしい。

「もしもし、喜一？ うん、そうだよ。うん……うん……元気だよ」
喜一。その名前は、久しく聞いていなかった名前だった。

朝飛が学校へ通っていた頃、一番仲が良かった友達。そして、最後には喧嘩別れをってしまった朝飛と圭都のことを、誰よりも心配をしていたあの少年の名前。

「学校はどう？ うん……うん、それでさ、頼みたいことがあるんだ」

『なにになに？ 朝ちいが頼み事なんて珍しいね！』

受話器の向こうで、嬉しそうにはしゃぐ少年の声が漏れてくる。

その大きすぎる音量に苦笑して、朝飛が一層目を細めた。

「圭都に借りたCD、返して欲しいんだ」

椎名圭都は悩んでいた。電話の前を行ったり来たりして、受話器を上げ下げする。良いところまで行けば、ボタンを何個か押すところまでいっていた。

だけど、電話をかけることはしなかった。この一連の行動を、こ

こ数日間何度か繰り返していた。

「……何してんだか」

一人言を呟いて、圭都は頭を掻いた。

あの日、魁から教えてもらった朝飛の家の電話番号。喜一から押しつけられて、すぐにゴミの山の中へと捨てた。

だけど、頭は勝手にその番号を記憶していた。完璧に。

「今更、何話せば良いんだよ……」

溜息を大きく吐き出すと同時に、外から声が聞こえた。透き通るテノールの声。

『圭やーん！ 居るっしょー？ ちよつと出てきてー！』

嫌と言うほど聞く、自分の友人の声だった。マイペースな彼らしく、呼び鈴を鳴らさずに大声を張り上げている。彼は呼び鈴という便利な道具を知らないのだろうか。

痛くなる頭を抑えて、圭都が玄関の扉を開ける。そこには自転車に乗ったままの喜一が嬉しそうに手を振っていた。

「ちーっす！ ボンソワール！」

「加賀谷！ お前、少しは近所迷惑をかん、が……」

「圭やんにお届けものでーす」

笑いながら、喜一は少しだけ自転車を前へと進める。彼の乗る自転車の後ろに乗せられた、お届けものを見せる為に。

お届けものが圭都の正面に来て、挨拶をする。

「ひさしぶり、圭都」

本当に久しぶりに見る、その笑顔を見せながら。

「……ひさしぶり、桐生」

三人がこうして揃って、そして笑い合うのはいつぶりだっただろうか。

そんなことも忘れるほどに、まるで、それが当たり前のことに笑い合った。

* * *

「夢を見て、思い出したんだ」

河原の道を歩きながら、朝飛が言う。

急に話し出した彼に、わざわざ迎えに来ていた魁が隣を歩きながら言う。

「何を？」

「昔のこと」

懐かしそうに目を細めながら、朝飛は続ける。歩く速さが、少しだけ速くなる。

夢の内容は、今でもしっかりと目に焼き付いている。忘れていたのが不思議なくらい、鮮明に。

「小さい頃、泣いていた男の子と約束をしたんだ。『みんなが笑顔で居られるように、全部を護る』って」

名前も何も知らないんだけどね、と朝飛が苦笑する後ろで、魁も同じように微笑んでいた。

そして彼は、歌を歌うように言葉を紡ぐ。

「『どうして泣いているの？』」

魁のその言葉に驚いて、朝飛が慌てて後ろを振り返る。魁もそれに合わせて歩みを止める。

向かい合った状態で、魁が続けた。

「『オレの作った刀が、みんなを傷付けちゃうんだ。護るために作ったのに』」

まるで幼子に絵本を読み聞かせるように言う魁に、朝飛が読み手に代わる。

「じゃあ、僕がみんなを護ってあげるよ。だから、君は僕がみんなを護るための刀を作ってね。約束だよ」

空は、パレットをぐちゃぐちゃに掻き混ぜたように、橙色と紫色が入り交じる。月は、まだ見えない。

決められていた台詞を言い終えた朝飛が、驚きを隠せずに問う。

「君だったんだ。あの時の子」

「思い出した？ オレ、お前のお陰で諦めずにここまで来れたんだぜ」

今では鰐木の次期頭目となった、あの泣いていた少年が言う。

もう会うことは無いと思っていた少年が、こんなに近くにいることに気付きもしなかった。

「そっか……約束、守ってくれた？」

「まだ。でも、もうすぐ出来上がるぜ」

今度は魁が先を歩きながら、それを追うようにして朝飛が歩く。

段々と暗くなってくる河原道で、二つの影が同じ距離を保ったまま動く。

「名前がなかなか決まらなかったんだ。だけど、今良いのを思いついた」

「へえ、どんな？」

「追風。風に背中を押ししてもらえるから、疾風よりも早く走れるんだ。それこそ、神風みたいに」

夏の風が吹く。

「いい名前だね」

七月の風が、二人の間を通り抜けた。

風が、吹いてる。

34・僕等 The world that doesn't end (後書)

35・世界 Tomorrow

「世界は、常に裏と表によって構成されるモノなんだよ」
僕よりも一年十ヶ月後に生まれた弟が言った。

「例えば？」

僕の問いに、まるで歌うように弟は答える。

「右か左か。」

黒か白か。

前か後ろか。

上か下か。

悪か正義か。

敵か味方か。

生きるか死ぬか。

生かされるか殺されるか。

天国か、地獄か。

世界には、二つの顔があるんだよ」

相変わらず、どこを見ているのか分からないその碧眼を向けて、

弟は言った。

「じゃあ、僕は何処にもいけないね」

そう言うと、弟が笑う。声もあげずに、ただ静かに微笑むように。

「違うよ。兄さんは何処へでもいけるんだよ」

「何処へでも？ 世界は二つにしか別れていないの？」

不思議そうに首を傾げる僕を見ながら、弟 空夜は続ける。

「兄さんはそれで良いんだよ。真ん中で、灰色で、中心で、中立で、

傍観者。だけど、それだけじゃない」

空を見上げながら、空夜は言う。

「兄さんは、繋ぐ人なんだよ」

空夜がくれた答えに、僕は何も言わない。
何も言わずに、ただ笑ってみせた。

僕は、弟が思うような人間じゃない。

嘘を吐いて、想い出を誤魔化して、それでも約束を終わらせることが出来なくて。

ただ、曖昧に笑うばかり。

嘘を吐くのが得意だと虚勢を張って、だけどそれは、ただ本当のことを言えない脆弱さを隠すためのもので。

結局の所、僕は、否定されたくなかった。

どこか一部分でも否定されてしまえば、僕の全てを否定されたような怖さに囚われてしまうから。

だから、いつもいつも「僕は間違っただけなんかない」と自分自身に言い聞かせていた。

そして、僕は弟に嘘を吐き続ける。

そうすることで、あの優しかった人はあの子のなかで生き続けるから。

「何処へ繋がれば良いと思う?」

「明日だよ」

そんな、一週間前の話。

弟が僕の世界から居なくなる、数ヶ月前の話。

これは、僕と僕を取り巻く全てのモノの、明日へ繋がる物語。

(2 0 0 7 / 7 / 2 7 / f i n)

35・世界 Tomorrow (後書き)

始まりを告げるのは君の声。
終わりを告げるのは僕の夢。
そして物語は咲乱れる交響曲へと繋がっていく。

BGM：ガーネットクロウ「泣けない夜も 泣かない朝も」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7405a/>

桐生の忍 影送り組曲

2009年7月3日19時01分発行